緋弾のアリア～世界に見放され皆に見守られる者～

ゴマ増

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア～世界に見放され皆に見守られる者～

【Ｎコード】
Ｎ７７２３Ｖ

【作者名】
ゴマ増

【あらすじ】
世界から消されそうになった主人公・・・。そこへ主人公の両親とその育て親から頼まれたという神様が現れた。どうやら主人公の能力（この世界では使えない）が高すぎて世界が支えきれないらしい。神様はその能力が活かせて、支えきることができる世界に飛ばすことで主人公を生きながらえさせるつもりらしい。その世界は・・・緋弾のアリア！？一部能力がチート級の主人公がさらに神様に願いを５つかなえてもらって・・・・・。
キンジ達と主人公が共に生きていくという話です。

第0話～プロローグ～（前書き）

ファンフィクションは初めてです。といってもこれ含めても二作です。しかも一作目は短編ですし、面白くないですし、面白くないですし・・・。でも自分で書いてて楽しかったんで。悔いはないです。後悔もないです。反省はしていません。

ゆっくりしていってね！

第0話～プロローグ～

「行くわよ！キンジ！ナオヤ！」

「ああ！」

「わかった！」

ここはとある潜水艦のなか・・・

俺たちの運命を賭けて今、『ヤツ』を追っていた・・・・。

―――――――――

俺は神野　ナオヤ。

いたって普通の高校1年生だ。

いや・・・だったというべきか。

両親はいない。

母親は俺を産んでからすぐに亡くなってしまったらしい・・・。

残った父親も母親が死んでから二年後に事故で亡くなった。

その後、親戚の家で暮らし、随分とお世話になった。

だがその親戚も、一年前に事故で亡くなってしまった。

当然、悲しみに明け暮れていたがすぐに立ち直り、他の親戚に迷惑をかけないよう
前から計画していた一人暮らしを始めた。
幸い、計画していただけあって貯金もあり、バイトをしながら何とか生活している。
そんなギリギリな生活だが友達もたくさんできて、日々幸せだった。
だが、神様は、こんな俺をまだ地獄に落としたいらしい。
俺の運命が狂った、ある日の学校の帰り道――――――
「ふー・・・今日も疲れた。ふむ・・・・4時かまだバイトまで時間があるな。どっかで時間でもつぶすかー。」
この日のバイトは6時からで、まだ二時間ほど時間があり、特に着替える必要もない仕事だったのでそこらで時間をつぶすことにした。
――――――それがいけなかった。
「さーて・・・どこいこっかなぁー。」
そう言って近くの公園をうろついていたその時、
『お主・・・・なにをどうしたらそこまで能力を・・・・?』
「っ!?なんだ!?声!?どこから!?」

さっきからされもいない公園で突然聞こえてきた声の主を探し、あたりを見回すも、やっぱりだれもいない・・・・・・。

『ふむ・・・完全に超えておるなぁ・・・。』

「どこだ!?どこにいる!?」

『ここだ』

そう聞こえた瞬間、突然目の前に奇妙な老人が現れた。

「っ!?・・・あんたは一体だれなんだ?俺に何か用か?」

『ほう・・・この状況でまともにしゃべれるとな・・・やはりあの世界しかないか。』

(この人・・・いったい何の話をしているんだ?)

『お主を殺す話じゃよ』

「っ!?心を読んだ!?っていうか殺すだと!?・・・冗談にしちゃぁ物騒だな」

『冗談ではないからのう。お主このままじゃとこの世界に消されるぞ?』

「なんだって!?どういうことだ!」

『そうじゃのう。ならこの世界の説明からせねばならんのう。お主

のおるこの世界は幾多ある世界の一つじゃ。そしてすべての世界にはいろいろな物がおる。お主らの言う幽霊、妖怪、鬼、幻獣、魔物、などがのう。そしてこの世界には人間が住んでおる。比較的身体的能力が低く、発想力豊かな人間が住む世界。
そして人間は生まれたときに世界ごとに人間の限界が決まる。そしてほとんどの人間はその限界を超えることなく、寿命が尽きていく・・・・。だがのう、お主はすでに超えておるのじゃ。』

「・・・・は?」

『この世界で生きる人間の能力の限界を超えておるのじゃよ。』

「超えると・・・どうなるんだ?」

『世界が支えきれんで崩壊するか、そうなる前に限界を超えた人間を世界が消すか、大抵はどっちかじゃのう。』

「っ!?」

『じゃが、今回は特別にのう。お主の両親とその親戚がの、必死に頼んできたのじゃ。「ナオヤを殺さないでくれ」と。だから特別じゃ。』

「っ!?・・・・父さんと母さんと・・・・その親戚の人は死んだんじゃ・・・?」

『無論、死んでしまっているがの。消える訳じゃないんじゃ。ちゃっかり元気にしておるぞ?』

「・・・・・・」

不覚にも泣きそうになってしまった。俺を産んでくれたのにその後の人生を奪ってしまった母親、そのショックと仕事が増えたせいか事故を起こして死んでしまった父親、

そして今まで俺のことを何よりも大切に育ててくれた親戚。感謝してもしきれないのに一度もお礼を言わせてくれずに逝ってしまった。親孝行もできなかった。それが心残りだった。

そして・・・それならなおさらこの大切な命失うわけにはいかなくなった。ましてや存在してたことをなかったことになんてさせる訳にはいかなくなった。絶対に。

「・・・それで、特別っていうのはどういうことだ？」

『それは、もう少し説明せねばいかんのう。さっきも言った通り世界は幾多も存在しておる。そしてみな、その存在を知っておるのじゃ。』

「？どういうことだ？」

『実はのう・・・・・』

――――――――――――――

「大体分かった。つまりこの世界に存在する本のなかの世界が、そのまんま存在しているということか。たとえば緋弾のアリアとか。」

『そういうことじゃ。』

「そしてその世界のうち、俺の能力を支えることができる世界に非難してその世界で暮らしていくということか。」

『そういうことじゃ。ちなみにお主の能力では行けるところが一つしかなかった。』

「そんなに俺の能力やばいのかよ!?」

そんなに力があるのはうれしいような気がするが、それのせいでこの世界とも友達ともおさらばなんていうのはなんかいやだ。

「ちなみにどこなんだ?」

『うむ。お主の言った「緋弾のアリア」の世界じゃ』

「・・・・・は?マジで?」

なんてこったーー・・・・・。さっきこの命を大切にしていこうとか思ってたのに常に命の危険にさらされる世界かよーーー!?

まぁ好きだからいいけど。緋弾のアリア。

『で、そのままの身体能力で行くとついて3日くらいで逝ってしまうなのでのう。5つの願いをかなえよう。』

「5つってどんな願いもか?」

普通いろんなところで聞く話だと1つか2つくらいじゃね?だとし

たらいったいこの人何者・・・・。

『当然じゃろう。わし、神様じゃし。しかも最高位の。』

「は？」

『じゃから、わし神様。一番上の位の神様じゃよ。最高神とか呼ばれとるのう。』

はっはっは神様でした。しかも最高位だって。俺ずっとため口なんですけどー逆鱗に触れて消されたらどうしようｗｗｗ。

「すいませんっしたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

『おおう！？』

とりあえず全力で土下座しました。はい。

『まぁまぁそんなの気にせんでよいから、願い事を５つ言ってみなさい。』

「そ、それじゃあえーっと・・・・」

とりあえず死にたくないから・・・・チートなつよさ?となると・・・

「じゃあ一つ目。努力による強さの限界をなしで」

『そんなもの、お主はもともとじゃぞ?』

「なんですと!?・・・・じゃあ先に俺の能力ってどんなのがあるのか教えて」

『そうじゃのう。今言った努力すればいくらでも強くなれるというのと、大抵の技術や武術などは見ただけで大体理解できるのと、あとは最高の空間認識力と最高の気配察知能力。

最高の反射神経に最高の集中力ぐらいかの。』

「・・・・・・」

『?どうしたのじゃ?」

「俺すげぇぇぇぇぇ!?そんなに能力あったのか!?マジかよ!?うれしいけどそれのせいでこの世界から去るとかもう!!!!!

もう!!!くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ;@:!!!!」

『落ち着け!!到底人間が発するとは思えんセリフが混ざっとる!!!!』

「はっ！！それでも3日で逝ってしまうくらい危ないんじゃないか・・・ちゃんとした願い事を考えなければ・・・・・」

『やっと落ち着きおったわ・・・・・』

「そうだなぁ・・・・・じゃあ努力した時の能力の伸びを最大限にしてほしい。」

『わかった。』

「それから記憶はもったまんまで、見た目はー・・・いいや。向こうでの俺の家をキンジの部屋の隣で。」

『わかった。あと3つじゃ。』

「？あとふたつだろ？」

『・・・・ふふっ。わしもお主が気に入ったよ。残りの願いは決まった時にきこう』

「え？」

『願いが決まったら頭のなかでわしを呼べ。神様とでも呼べばすぐに行こう』

まあ、ぱっと思いつかなかったから助かるけど。

『それにしてもお主・・・見た目はそのままでいいのか？ぱっと見が中性的すぎておもいっきり女に見えるんじゃが・・・』

「それに関してはいいんだ。・・・両親にもらって、親戚に育ててもらった大切な俺の体だ。」

『・・・そうか。』

「それよりいいのか？願い事」

『いいのじゃ。それでは準備はいいか？』

「え？ま、まだ心の準備が『いくぞぉ。それ』って聞いてないいいいーーーー」

その瞬間、目の前が真っ暗になり俺は意識を手放した。

第0話～プロローグ～（後書き）

途中で一回書き直しているので矛盾点とか五時だ辻があったら教えてください。
ちなみに今のネタ何人がわかるんでしょうね。っていうかこのあとがき見てる人いるんでしょうかね?それよりこの小説見てる人（ｒｙ

第1話～出会い～（前書き）

第1話です。短いかもです～。ではどうぞ～

第1話～出会い～

～キンジ視点～

「その　チャリには　爆弾　が　仕掛けて　ありやがります」

なにがどうしてこうなったッ！！！

「チャリを　降りやがったり　減速しやがったり　すると　爆発しやがります」

チラシを　切り貼りしやがって　作ったような　妙な声でやがります。

「ちくしょぉーーー！！」

眉を寄せて周りを見渡すといつの間にかセグウェイのようなものが俺の自転車と併走していた。

その上に乗っていたのは――――――

「ッ！？ＵＺＩか！？」

その銃座から俺を見つめるのはＵＺＩ。秒間十発の９ミリパラベラムをぶっ放す、イスラエルＩＭＩ社の傑作短機関銃（サブマシンガン）だ。

（くそっ！！ＩＭＩ社め！恨んでやる！？）

そして混乱する頭でチャリのあちこちを調べるとサドルの裏に変な

ものが付いていた。

（タイプまではわからんがプラスチック爆弾!!このサイズなら自転車程度なら木端微塵じゃねぇか!?）

そして俺はとりあえず人気のない、第二グラウンド場に向かった。

―――――――――――

～ナオヤ視点～

「う・・・ん・・？」

ここは・・・どこだ？たしか神様にあって願いをかなえてもらって・・・・それで・・・・。

「あああああ!!!そうだ!!いま何時だ!?」

今日は確か始業式って言ってて・・・・いまが８時過ぎだから・・・・

「キンジが!?まぁでも『アイツ』がいるしいいか。」

『おーい。聞こえるか―？』

「わぁあ!?びっくりしたぁ・・・・。ああ聞こえるよー」

『お主はこっちでは始業式からきた転入生じゃからな。』

「へ？どこの？」

『遠山キンジたちが通う武偵校にじゃよ』

「へぇ～・・・・ってことは遅刻じゃん！！！！！」

『ごめん。時間ミスッちった。』

「おおおおおおおおOTZ」

『いや。わざわざ口でオーティーゼット言わんでよかろうに。』

遊んでる場合じゃなかった。急がねば！

『いってらー。がんばってくれ。』

「おう。ありがとう、神様。」

そういって俺は家を飛び出した。

――――――――――

～キンジ視点～

（なんだこの状況は・・・・。）

今俺はたいへんなことになっている。え？武偵殺しの模倣犯だから当然だろうって？違う違うw

俺はできるだけ人がいないであろう第二グラウンドに向けて自転車を走らせていた。

その時、学校の屋上から一人の女の子がパラグライダーで俺を助けに来たのだ。

見事、俺は救出されたわけだが・・・その時、爆風で近くにあった体育倉庫のなかに吹っ飛ばされてしまった。

そして今跳び箱のなかではもみくちゃにされ、（その時見つけたんだがこいつの名前はアリア、神埼・H・アリアというらしい）そのアリアのブラウスがめくれあがっていたのだ。

（ッ!?俺はこういうのはダメなんだ!!）

ただ幸いにもあの禁忌のモードにはなっていなかった。が、この胸が押しつけられればきっとなってしまうだろう。

「へ・・・・へ・・・・変態ーーーーーーーー!」

突然、聞こえてきたアニメ声の主はアリアだった。

「最低ーーーー恩知らずーーーー人でなしーーーーーー!!!」

「ち、違う!これは俺がやったんじゃ――――――――」

――――ガガガガガガガガガガガガガガガガッ

突然の轟音が体育倉庫を襲った。

「――――な、なんだ!?」

「うっ！まだいたのね！？あのおもちゃ！！」

「おもちゃってなんだよ！？」

「あの二輪のセグウェイよ！

「ってことは今のは銃撃！？」

わからない！今の俺にはどうすればいいのかがわからない。

「あんた仮にも武偵校の生徒でしょ！？戦いなさい！！あっちは２５台もいるわ！！圧倒的に火力負けする！！」

（２５！？いつの間にそんなに！！）

――とそのときだった。予想外のことが起きた。

アリアが銃撃しようとして無意識に前のめりになったため、俺の顔にはアリアの胸が押しつけられてしまった。

（ああ・・・アウトだ。）

なってしまった。ＨＳＳ・・・ヒステリアモードに。

ガガガガガッガキン

弾切れの音を派手に上げたアリアが身をかがめて拳銃に弾倉を差し替えている。

「――やったか」

「射程圏外に追いやっただけよ。並木の向こうに隠れたけどすぐ出てくるわ」

「強い子だ。それだけでも上出来だよ。

「――――は？」

いきなり口調がクールになった俺にアリアが眉を寄せる。

（ああ・・・やめてくれ俺よ・・・・。突然その口調はきもい。）

俺はアリアの細い足と腕にすっぽり収まってしまう背中に手を回し、立ち上がってしまっていた。

「きゃっ！？」

「ご褒美にちょっとの間だけ――――――お姫様にしてあげよう。」

いきなりお姫様だっこされたアリアがボンっと真っ赤になった。

抱っこしたまま跳び箱のふちに足をかけ倉庫の隅まで一気に飛ぶ。

そして積み上げられたマットの上にアリアをちょこんと座らせた。

「な、ななな、なに！？あんたどうしちゃったの！？」

「姫はその席でごゆっくり、な。銃なんか振り回すのは俺だけでいいだろ？」

第1話～出会い～（後書き）

矛盾点とかあったらおしえてくださ～い。

第2話～主人公の力～（前書き）

特に書くことがないので第2話、どうぞ～

第2話～主人公の力～

～ナオヤ視点～

「はぁ・・・・はぁ・・・・はぁ・・・・」

俺は今、武偵校に向けて全速力で自転車を走らせていた。

「はぁ・・・・・はぁ・・・・・やっと・・・見えてきた・・・・はぁ・・・・・」

ズガガガガガガガッ

やっと武偵校が見えてきたあたりで突然、ものすごい音が聞こえた。

（ッ！！キンジたちか！？）

音のした方へ向かうと25台のセグウェイが体育倉庫の周りを囲っていた。

（なっ！？25台だと！？どういうことだ！？数が多すぎる！！）

そして体育倉庫のなかの跳び箱からアリアが応戦していた。

（原作通りならここでアリアがキンジに胸押しつけて、それでキンジがＨＳＳになるんだったな。まぁ、ＨＳＳなら問題ないだろ。）

そしてセグウェイが一旦戻ろうとして、こっちを向き、

（え？・・・・・あ。）

走ってきた。

「しまったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！」

～キンジ視点～

（さて、軽くつぶしてくるか）

「しまったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！」

「ッ！？外にだれかいたのかッ！！！」

「アンタ！！まずいわよ！？あの数はＡかＳランクぐらいしか相手にできない！！！」

そのことを聞くまでもなく俺は体育倉庫の外に飛び出た。

「まずいッ！！おいそこの君！！！！逃げろ！！！」

そこにいたのは見たことのない女生徒（ＨＳＳの状態の俺ならやろうと思えばこの学校の生徒は全員思い出せる）だった。

つまり転校生ということになる。（ん？男の格好？・・・まぁあとで聞こう。）動揺して俺の声が聞こえてないようだ。あの様子じゃどうやらランクはＥかＤくらいだろう。

（あれじゃＵＺＩ２５台は相手にできない！！！早くなんとかしないとッ！！！）

が、遅かった。

ズガガガガガガガガガガッ

「危ないッ！！！！！！！逃げろぉぉぉぉ！！」

～ナオヤ視点～

（しまったぁぁぁぁ！？見つかったッ！！！銃撃戦の心得もないからどうすればいいかわからん！！！！！）

その時、体育倉庫から誰かが出てきた。

「まずいッ！！そこの君！！！！逃げろ！！！」

（キンジ！？逃げろったってどこにぃぃぃぃ！！！！）

ズガガガガガガガガガガッ

（ほわぁぁぁぁぁぁぁ！！！撃って――――）

その時俺は死んだと、そう思った。

が、

（ッ！？弾が・・・・見える！？）

俺にはその弾丸が、スローモーションのように見えた。だが

（避けようにも数が多すぎるだろ！？一面弾丸じゃねぇか！？）

まるで弾丸のカーテンでも迫ってくるような光景だった。

（ッ！！そうだ！！俺の銃で弾けないか！？）

その瞬間には銃を取り出していた、が

（どう反射させればいいのかわかんねぇぇぇ！！！ッ！！そうだ！！！！神様！！！！！！願い事！！！！）

『なんじゃー、っておおう！？なんかすごいことになっとるのうｗ』

（わらっとる場合かぁぁぁ！！！まあいいや！！！それより願い事！！！ＨＳＳのキンジと同等かそれ以上の頭の回転の速さ！！！）

『わかった。それ。』

その瞬間、俺の頭にはどこに何発撃てば生き残れるかが一瞬で浮かんできた。

（おお！！これで生き残れる！！！ありがとう神様！！！）

『そうか。よかった。願い事はあと二つじゃ』

（わかった！！よし！！いくぞ！！！）

俺はまず自分の心臓狙って飛んできているうちの一発に向けて撃ち、

その後少し右にさらに一発。

その下に並べて二発ずつ撃った。すると、

キキキキキキキキキキキンッという音を立ててすべてギリギリで俺をかすめていった。

そのあと、続けて俺に向かって撃ってきた、ＵＺＩ１８台に命中し、見事につぶすことができた。

「ッ！！！おい！！！そっち狙ってるぞ！！！」

俺は、キンジがこっちを見て唖然としているうちにＵＺＩに狙われていることを教えた。

「あ、ああ！！」

その直後に――――

ズガガガガガガガッ

――――ＵＺＩがキンジの頭めがけて乱射していた。

～キンジ視点～

（まずいッ！！遅かったか！？）

だがその瞬間、俺にはあの子が一瞬何か考えるように止まったように見えた。

が、そのあと目にもとまらぬ速さで銃を抜き5発撃った。

その弾は見事なまでにＵＺＩの９ミリパラベラムに当たり、さらに跳ね返った弾が他をはじき、あの子に当たる弾だけを弾いた。

（ッ！！！なんて子だ！！ランクは軽くＳか！？）

そして跳ね返りながらＵＺＩ２５台のうち１８台に弾を返し、機能を停止させた。

「ッ！！！おい！！！そっち狙ってるぞ！！！」

突然こっちに声をかけられたためかなりびっくりしたが、今はそれどころじゃなかった。

「あ、ああ！！」

なぜなら、あの子が倒したのは１８台でまだ７台残っていたからだ。

そしてその７台が――――

ズガガガガガガガッ

――――撃ってきた。

狙いはすべて俺の頭。

（なかなかいい狙いだ。）

俺は感心しながら上体を反らし、弾をよけつつ七発発砲した。

見なくてもその弾がどこに行くのかがわかる。

そして――――――

ズガガガガガガガガガンッ

――――――7台のＵＺＩはすべて吹き飛ばされた。

第2話～主人公の力～（後書き）

またまた矛盾点などあったら教えてくださーい

第3話～自己紹介～（前書き）

第3話どうぞ～

第3話～自己紹介～

～ナオヤ視点～

キンジはＵＺＩから弾が出た瞬間後ろに反りかえり、ＵＺＩを見ることなく発砲した。

その弾は一寸の狂いもなく、ＵＺＩの銃口に吸い込まれるように入って行き――――

ズガガガガガガガガンッ

――――すべて吹っ飛んだ。

（さすがＨＳＳモードのキンジは格が違うねぇ・・・・）

するとキンジが、

「そこの君、怪我はなかったかい？」

「ああ・・・一応大丈夫だ。」

・・・男に対しても結構やさしいのな・・・・・。ちょっとまてよ？君？まさか・・・・。

「それにしても君は女の子なのに強いんだね。」

（やっぱり・・・・・はやめに訂正しておくか）

「あのー・・・俺男ですよ？」

「・・・・・なんだって？そうだったのか。勘違いしてごめんな。」

（・・・反応が薄い。まぁＨＳＳだしな。それになんだかんだ言っても結局やさしいのな）

「ああいえ。よく間違われるんで気にしてないです。」

「そうか。たすかるよ。これからもう一人を迎えに行くんだが・・・・一緒に来るかい？巻き込んだみたいだし、送るよ。」

（アリアだな。まぁ会っておきたいし行くかな）

「分かりました。あ、俺は神野ナオヤ。ナオヤって呼んでください。」

「俺は遠山キンジ。キンジと呼んでくれ。それともう敬語じゃなくてもいいよ。」

「そう・・・だな。キンジ、急ごう。もう遅刻だと思うけど。」

「はは・・・そうだな。」

そして俺たちは体育倉庫へ向かった。

そこではアリアが跳び箱のなかから（戻っていたらしい）「なに？どうなったの？」という顔をしていたので軽くキンジから説明があった。

そして――――

「へ～・・・アンタがＵＺＩ１８台を一瞬でねぇ・・・。」

「ああ、彼がさっきアリアが迎撃した時の叫び声の主さ。」

「ああ・・・って彼！？こいつ男なの！？」

「そうだよ。俺も最初見た時は女の子だと思ってしまったけどね。」

「俺は神野ナオヤ。よろしく。」

「わ、私は神埼・Ｈ・アリアよ。よろしく。」

（ふう・・・第一印象はまずまずってとこか）

アリアが跳び箱のなかでごそごそと何かしていた。

「あ！アンタ！！さ、ささささっきあ、あたしの服！ぬ、脱がそうとしてたでしょ！！」

「アリア。それは悲しい誤解だ。」

そういってキンジがベルトをはずして跳び箱に投げ入れた。

「あれは不可抗力ってやつだよ。理解してほしい。」

「あ、あれが不可抗力ですって！？」

アリアは跳び箱からキンジのベルトで留めたスカートを押さえつつ

ひらりと出てきた。

え。

立ってるのか?それで?と思ってしまうほど、やはりアリアはちっこかった。

(うわ・・・さすが本物。かわいいな・・・。)

「うわ・・・さすが本物。かわいいな・・・。」

「ふぇ?な、なな、77なにを言い出すのよあんたはぁぁぁ!?」

「え?俺なんか言った?」

「ナオヤ。たぶんだが思っていることが口から漏れているんだと思うよ。」

「へ?」

(ってことは・・・俺の素直な感想がダダ漏れだと!?)

「ってことは・・・俺の素直な感想がダダ漏れだと!?」

「だから漏れてるって。」

「/////////な、何なのよあんたたちはぁーーーー//////」

あちゃー、俺思ってることが口に出てたらしい。はずかしっ。

「ひ、一人は変態で、も、もう一人はアホなダダ漏れ女！」

「ちょ、俺は男だというのと、そのダダ漏れ女は妙に卑猥だからやめて！」

「それに俺は変態じゃない。さっきのは誤解なんだよ。」

「う、うるさいうるさいうるさい！」

・・・はぁ。まいったなぁ・・・・。アリアお得意の暴走状態に入ったようだ。

「そ、それにアンタはさっきあたしの胸見てた！！これは事実！！立派な強猥よ！！！」

あ、この流れは・・・。

「よしアリア。冷静に考えよう。俺は今日から高校二年生だ。中学生を脱がしたりするわけがないだろう。年が離れすぎだ。」

あ、言っちゃった。・・・逃げようかな？

「あたしは中学生じゃない！！！」

がすんっ

床を踏みつけすぎて木片が散らばった。

・・・・よし。どさくさにまぎれて逃げよう。

「・・・悪かったよ。インターンで入ってきた小学生だったんだな。助けられた時からそうかなとは思ってたんだよ。それにしてもすごいなアリアちゃんは――――」

・・・たぶん勇敢な子だねとでも続けようとしたんだろう。

にしてもどこで逃げよう。

あ、顔を伏せて震えだした・・・俺巻き込まれそうだなぁ・・・・。

「こ・・・こんなやつ助けるんじゃなかった・・・・。」

あちゃー・・・遅かった。

ばぎゅぎゅん

アリアが二回、キンジの足元めがけて発砲した。二丁拳銃で。

「あ・た・し・は・高・二・だ！！！！！！！」

「じゃ・・・じゃあ俺はこれで・・・・」

と逃げようとしたところでアリアが二丁拳銃をキンジに向けた。

その瞬間キンジはアリアにとびかかりアリアの両腕を同じく両腕で挟んで後ろにつきださせた。

アリアは反射的に引き金を引いた。

バリバリバリッ　ガキンガキン

弾が出なかったのでどうやら弾切れのようだ。

そのままキンジとアリアが取っ組み合いのような形になったので俺はさっさと逃げようと外に出た。

すると今度はアリアが柔道で言う跳ね腰みたいな技で体格差をものともせずキンジを投げ飛ばした。

キンジは勢いを殺さずそのまま体育倉庫から転がり出てきた。

なのでまぁ、また逃げ損ねた。

「逃げられないわよ！あたしは逃走する犯人を逃したことは！一度も！ない！――――あ、あれ？あれれ、あれ？」

叫びながらアリアはスカートのなかをわしゃわしゃと両手でまさぐっていた。

弾切れになったから弾倉を探しているのだろう。

（まぁ、原作通りならキンジが持ってるはずだがね）

「ごめんよ」

キンジが、さっき投げられた際にすり取っていたであろう弾倉を掲げて、あさっての方向へ投げた。

ちなみにあさっての方向って結構使われてるけど・・・どの方向

があさってなんだろうねー・・・。

「――――あ」

遠くの茂みに落ちていく弾倉を見てアリアは、無用の長物になった拳銃を上下に振っていた。

やったな！やったな！という表現らしい。たぶん。

「もう！許さない！泣いて土下座して謝っても許さない！！」

そういって拳銃をホルスターに収めるとセーラー服の背中に手を突っ込んで、二本の刀を抜いた。

そして驚異的な瞬発力でキンジの両肩めがけて突きを放った。

が、キンジはそれを背後に転がることで回避した。

「強猥男は神妙に――――ってわきゃっ」

アリアが新種のヤマネコのような声を出してこけた。

そこにはさっきキンジが投げた弾倉のなかに入っていたと思われる弾が散らばっていた。

アリアが何度となく立とうとするもそれを踏んでこけてしまい、その間にキンジは逃げてしまった。

「こ、この卑怯者！でっかい風穴。開けてやるんだからーー！」

それが、遠山キンジと後に世界中の犯罪者を震え上がらせる鬼武偵、神埼・H・アリアの硝煙にまみれた最低最悪の出会いになったのだった。

・・・と原作ではここで終わるのだが・・・・・俺がいるんでもうちょっと我慢してね。

「むきーーーあいつ、絶対捕まえるんだからーーーー」

俺はいまだに弾を踏んでこけ続けているアリアの元へ足で弾を払って道を作りながら近寄った。

「おーい・・・大丈夫？」

「だ・・・大丈夫よ！それよりアンタ！なんで犯罪者が目の前にいたのに手伝わなかったの！？」

「いや、だって現場を見てたわけじゃないからどうか知らないし」

（実は全部知ってるけど）

「それにあのＵＺＩ倒したのキンジじゃん。正直、あの数はやばかったんじゃない？」

「うっ・・・さ、さすがに２５台は多かったけど・・・・ていうかアンタ！そのうちの１８台はアンタがやったんでしょうが！！あれどうやったのよ！？」

「あれ？いや、普通に避けられないから俺に当たる奴だけ弾こうとしたらこうなった。」

「こうなったってあんた・・・・はぁ・・・もういいわ。アンタ、名前はたしかナオヤだったわよね？」

「ああ、そうだけど」

「じゃあナオヤ、アンタ転校生でしょ？一緒に行きましょう。」

「ああ、いいよ」

そうして俺たちは、また問題が発生するであろう教室に向かった。

第3話～自己紹介～（後書き）

たぶん次の投稿まで時間がかかると思います。すいません。
まぁ誰も読まないから関係ないと思うけど・・・。

第４話～クラスメイト～（前書き）

更新遅れました。すいません。やっぱり難しいですね～不定期更新に変更です。

第４話～クラスメイト～

～ナオヤ視点～

今、俺は自分の住んでいる部屋の隣にある遠山キンジの部屋にいた。

が・・・・

「あんたたち、あたしの奴隷になりなさい！！！」

今のセリフでわかったようにここには今、この部屋に住んでいるから当然である遠山キンジと、

なぜか強引に連れ去られてしまった俺、神野ナオヤと、→のようにとち狂った発言をしている

神埼・Ｈ・アリアの三人がいた。

「神様よぅ・・・・何がどうしてこうなったッ！！！」

～今朝の回想・キンジ視点～

「・・・というわけで今日から同じクラスになりました。神野ナオヤです。よろしく。」

そういって自己紹介しているのは今朝、ＵＺＩ２５台に襲われた俺に不幸にも転校そうそう巻き込まれた、

ナオヤだ。そして・・・

「神崎・H・アリアよ。」

俺が襲われたときに助けに来た女の子、アリアだった。

（なんでこうなった・・・・・・）

そう思ったのもつかの間、

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい。」

いきなり俺を指差してそんなことを言いやがったのだ

俺は――――

ずりっと椅子から転げ落ちる。

絶句。ただ絶句するしかない。

担任が「はーい、三学期から転入してきた二人に自己紹介してもらうわよー」とか前置きしていたので嫌な予感しかしなかった。

そして俺の死角にあった席から立ち、教壇に上がってきたのがまさにその神埼・H・アリアだった訳だ。

HSSも解けた通常モードの俺の頭ではどうすることもできず、半分は銃撃されるのも覚悟で震えていたんだが・・・。

神埼は突然俺を指差し、「隣に座りたい。」などといってきたのだ。

「な・・・なんでだよ。」

ようやく喉から出た声で呟く。

（正義の味方として利用する腹じゃないだろう。アイツはＨＳＳに気付いた様子はなかった。気に入った――というのはないな。怒ってたし。じゃあ隣の席に座ってじっくり殺そうということなのだろうか・・・）

「よ・・・よかったなキンジ！！なんか知らんがお前にも春がきたみたいだぞ！！！」

（来たのは春じゃなくて死神じゃないか？）

「先生！俺転入生さんと席代わります！！！」

まるで選挙に当選した代議士の秘書みたいに俺の手を握ってぶんぶん振りながら

右隣に座っていた大男が満面の笑みで席を立つ。

身長１９０？近いツンツン頭のこの男は武藤剛気（むとうごうき）。

俺が強襲科（アサルト）にいた頃、よく俺たちを現場に送ってくれた車輌科（ロジ）の優等生で、

乗り物と名のつくものならスクーターからロケットまで何でも運転できる特技がある。

「あらあら。最近の女子高生は積極的ねぇ。それじゃあ武藤君、席代わってあげて。」

先生はなんだか嬉しそうに言っていた。

（俺はうれしくないッ！！）

～ナオヤ視点～

さっきからアリアとキンジのことで場が盛り上がってる。つまり・・・

（・・・俺のことみんな忘れてない？）

まあそれもそうである。美少女であるアリアが転入そうそうキンジの横に座りたい発言である。

さっきから先生もうれしそうにそっちばかり。

（わぁ～い、俺帰っていい？）

というか何も言わなかったらこのまま帰っても誰も気づかない気がする。

というか俺が転入したことを忘れられそうである。

というか俺（ｒｙ

「あっ！せ、先生！そっちの転入生の席どうしますか？」

キンジがアリアの話題から逃げるように話を変えてきた。・・・うぅ・・・キンジ・・・ありがとう。

「あ、そうねぇ・・・じゃあ・・・」

「先生！こいつもあたしの隣がいいです。」

「「「「「「「「「へ？」」」」」」」」」」

クラス全員＋α（俺）、（一部除く。）から声が上がった。

「な・・・なんだってぇぇぇぇ！キンジ！転入生に負けるなよ！？」

「なんの勝負だよ！？というかなぜ俺に言う！？」

「何言ってやがる！！そんなこと言ってると転入生に神崎さんとられるぞ！！」

「な、なにを言って――――――」

ずぎゅぎゅんッ

キンジが反論をしようとした瞬間、二つの銃声が轟いた。

先生が銃を抜いていた・・・。

（あれ？原作だとアリアが発砲していたはずじゃ・・・）

「はーいみなさん。静かにしてくださいねー」

先生がものすごく黒い笑みで皆に問いかけていた。

「それでは転入生の二人はさっき決めた席に移動してください。」

「「は、はい」」

あの鬼武偵、神埼・H・アリアですらおびえていた。

「それでは授業をはじめるわね～」

先生はいつもの様子に戻っていたが、他のみんなはいまだにおびえ続けていた。

今回の教訓・・・いつも穏やかな人は怒らせてはいけない。

皆このことを心に刻みつけたのだった・・・。

――――放課後

「神野君。」

「あ、はい。なんですか先生？」

俺は担任の先生に呼び止められた。

「神野君は一般校からの転校でしたね？」

「はい。そうですけど。」

「えっとですね。武偵にはランクがあるのは知ってますよね？」

「はい。」

武偵ランクとはその武偵の能力を測定し、能力に応じたランク分けをするというものだ。

E～Sランクまであり、キンジはE（今は。）、アリアはSランクである。

俺は一般校からの転校のため、ランクがまだない。防弾制服と銃だけは先に支給された（らしい。神様談）。

なのでランクを測るために呼び止めたということだ。

「今回はあまり時間がないので、大まかな測定だけするぞ。」

「わかりました。」

おおまかな測定は体力測定、射撃、狙撃、体術などだった。

結果は・・・

「・・・・お前ほんとに一般校から来たのか？」

「・・・・はい。一応・・・・」

強襲科（アサルト）・・・・ランクR

狙撃科（スナイプ）・・・・ランクR

探偵科（インケスタ）・・・ランクR

「・・・お前・・・人間か？」

「・・・・はい。多分・・・・・。」

なんかすごいことになった。

ランクRとはSランクの上を行くランクで世界でも数人しかいないらしい。

「・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・。」

「あー・・・・また今度、残りも測定するからな。」

「・・・はい。分かりました。ではまたきます。」

なかば呆然としながら家に帰宅すると・・・・

「遅い！いままでアンタ何やってたのよ！！」

・・・・なぜか家にいたアリアが文句を言ってきた。

「・・・・いや、ランクの測定に・・・・いやまて、なぜここに？・・・その前にどうやってここに？」

「質問が多いわねぇ・・・。まぁいいわ。アンタちょっとこっちに

来なさい。」

いや、俺がよくないのだが。というか質問に答える気ゼロである。

「だから待てって。」

「なによ。うるさいわねぇ。」

「いやいやいや!!どうやってここに入ったんだ!!」

「あんな鍵、簡単に開けられるわよ。」

不法侵入である。

「・・・じゃあなんでここにいる。」

「家のカギを開けたから中に入ったんじゃないの。」

「ああそっかぁなるほどね・・・って納得いくかぁぁぁあああ!!」

「なかなかの乗り突っ込みね!」

「うるせぇ!もう一度言うぞ!な・ん・で・こ・こ・に・い・る!!!!」

「太陽はなんで昇る?つ――「月はなぜ輝く?」ってなんで分かったのよ!?」

知っているからな!全部!!

「勘だ！！」

「嘘よ！！」

「そうだ！！」

「認めた！？じゃあ何でよ！？」

「勘だ！！」

「嘘だ！！」

「そうだ！！」

「認めた！？って無限ループ！？」

「チッ・・・ばれたか。」

「ばれるわよ！！！！」

「でも引っかかってたよな～。」

「ッ！！うるさいうるさいうるさい！！いいから黙ってついてきなさい！」

「へいへい・・・・」

とりあえずあきらめて俺は付いていくことにした。というかどこに行くのか知ってるし。

「そういえばアンタここに来た時にランク測定してたって言ってたわよね？どうなったの？」

「ああ・・・時間がないから細かいのは省略したって言ってたけど・・・」

「うんうん。」

（なんでこいつこんなに俺のランク気にしてんだ？自分には関係ないだろうに・・・ってまさか・・・）

「どうしたの？早く言いなさいよ！」

「あ・・・ああ、えっと・・・強襲科（アサルト）と探偵科（インケスタ）と狙撃科（スナイプ）だけだったんだけど。」

「うんうん。」

「３つともＲランクだったよ。」

「へぇ～Ｒランクねぇ。」

「そう。Ｒランク。」

「・・・・は？」

「？なに？」

「何言ってんの・・・？Ｒランクは世界でも数人しかいないのよ？

しかもあんたは一般校からきたわけだし・・・アンタがRランクなんてありえないわよ！」

「いや・・・・そう言われてもなあ・・・・ほんとのことだし。」

「う・・・・嘘よ！！そ・・・そんなことあるわけがないじゃない！あ・・・またあたしをからかう気ね！？許さないわ！」

「いや！ほんとなんだってば！おい！聞けって！」

「許さない！貴族を侮辱したことを後悔しなさい！」

そういってアリアは拳銃をスカートのなかから抜いた。

「――――風穴開けてやる！！！」

～キンジ視点～

「はぁ・・・・クソッ。また面倒なのに目を付けられたみたいだ・・・。」

俺は学校が終わって帰宅し、銃の整備を終えてリビングで頭を抱えていた。

もちろん神埼・H・アリアについてだ・・・・。

「どうするかなぁ・・・。来年には一般校に転校するつもりだからあまり面倒事を引っ張って一般校で迷惑かけられないし。」

ずぎゅんずぎゅぎゅんッ

突然、外から銃撃が聞こえた。

「ッ!?なんだ!?なにかあったのか!?」

『待て!!人の話を聞け!アリア!!』

「ナオヤか!?アイツ元一般高だろ!?マズイ!!・・・・って今なんか・・・アリアって・・?」

聞こえてきたのは今日、一般校から転校してきたという神野ナオヤの声と

『うるさいうるさいうるさい!今更泣きながら土下座しても許さないんだから!』

「・・・・・・・・・・・・。」

ちょうど悩みの種になっている神埼・H・アリア本人の声だった。

(転校そうそう災難な・・・合掌。)

俺は心のなかで手を合わせ、なんだか疲れたので寝ようと部屋に戻ろうとしていた。その時、

『一般高から転校してきてRランクだなんて信じられるわけないでしょ!?しかも強襲科(アサルト)、探偵科(インケスタ)、狙撃科(スナイプ)の三つでなんて!!』

「・・・・は?」

『だからほんとなんだってば!!そんなに信じられないなら教務科（マスターズ）にでも聞けよ!!』

「嘘だろ・・・・。Rランクなんて・・・・しかも3つも。」

『むぐッ・・・仕方ないわね・・・・明日聞きに行ってやるんだから!!嘘だったら風穴!!』

『分かったわかった!』

「なんだってんだ・・・・・。」

とはいいつつも危ない騒動が終わったので安心して寝れる・・・はずだったのだが・・・・

～ナオヤ視点～

なんとかアリアの怒り?をおさめて、やっと目的のキンジの家訪問となった。

ピーンポーン・・・・・

ピンポーンピンポーン・・・・

あ、アリアの額に怒りマークが見える・・・・

ピンピンピンピンピンピンピンピンポーン・・・・

おーいせめてポーンの出番も増やしてやれよ・・・・・。

ガチャ・・・・

（やっと出てきた・・・。・・・・・合掌。）

俺は遅くも出てきたキンジに心のなかで合掌しておいた。

「遅い！！！！！！！遅すぎるわよ！！あたしがきたんだからもっと早く出なさい！！！！！！！！」

そう言いながら（叫びながら？）キンジの鳩尾に見事なドロップキック炸裂！！某角川書店の団長さん並みである。（超えたかな？）

「ぐほぁあ・・・・・な・・・・なに・・・しやが・・・る。」

息も絶え絶えにキンジが質問していた。

「アンタが遅すぎるからよ！！」

一部正論である

「ドロップキックはねぇだろ！！！」

もっともである

「うるさいうるさいうるさい！！」

「はぁ・・・」

お？キンジもあきらめたか

「もう・・・いいから中には入れ。近所迷惑だ。」

「いい心がけじゃない。さ、ナオヤも入りなさい。」

(なんで俺命令されてるんだろ・・・・)

「ごめんな、キンジ。」

「いや・・・お前が謝ることじゃないだろ。全部アイツが悪い。」

(・・・・やっぱり事情を知らないとこういう態度になるよなぁ・・・。)

「・・・・キンジ。」

「?なんだ?」

「アリアをあまり責めないでやってくれ。」

「・・・・どういうことだ?」

「・・・悪い。今はまだ話せない。」

今話せばきっと・・・物語が変わってしまう。そのせいでもしかしたら、どこかで原作通りにならず人が死ぬかもしれない。

それだけは・・・何としても避けたい。

「・・・・そうか。わかった・・・・善処しよう。」

「・・・ありがたい。」

「二人とも何やってるの?はやくきなさい!」

(・・・でもやっぱり、この強引さはイラッとくる何かがあるな・・・。)

そして俺とキンジはリビングへ足を運んだ。

「来たわね二人とも。よく聞きなさい。」

それが――――

「アンタ達!」

――――俺たちの――――

「あたしの奴隷になりなさい!!!」

――――――運命の始まりだった。

第４話～クラスメイト～（後書き）

五時だ辻、指摘お願いします～。

第5話～絶対奴隷宣言?～（前書き）

キャラが・・・・キャラが崩壊しました・・・・。

・・・・なにがどうしてこうなった！！！！まだ5話だ！！！！！

第5話～絶対奴隷宣言？～

～ナオヤ視点～

「アンタ達！あたしの奴隷になりなさい！！」

「「・・・・・・・は？」」

（まてまてまて！？キンジは原作通りだからわかるけど・・・俺も！？）

原作ではアリアとキンジが出会ったとき、俺はいなかった。

そしてＵＺＩの数も２５台ではなく7台だったはず。

（原作通りなら俺の出る幕はない。つまり俺が目立つこともなく、奴隷宣言もなかったはず。）

つまり――――

（原作と流れが違う（・・・・・・・・・）・・・・！！）

ということはいつどこで、自分の知っている原作の知識と違うことが起きてもおかしくはない。

つまり、原作では死なないはずの人が死ぬかもしれないのだ（・・・・・・・・・・・・・・・・・・）

（俺というイレギュラーがいる以上、いずれはこうなるとは思って

たが・・・予想以上に早かったな)

気を抜けばいつだれが死んでもおかしくない世界。

そこでのもっとも有効な武器が一つ、無効化された瞬間だった。が、

(それでも・・・俺は生き残ってやる・・・!!誰一人として死なせることなく・・・!!!)

生き残るための強い意志、決意を新たにした瞬間でもあった。

「・・・ナオヤ・・・・現実逃避もそのくらいにして帰って来い・・・」

はい、絶賛現実逃避中でした。

「ちょっと!!聞いてるの!?」

聞いてましたよ。だから逃避したんですよ?わかってます?そこんとこ。

「はぁ・・・アリア。奴隷ってどういうことだ?」

まぁ知ってるけどね?原作読破してるし。

「あたしと一緒に強襲科(アサルト)のパーティーを組みなさい!!」

「俺らに選択の余地は?」

「ない!!!!!」

（即答かよ・・・・）

「もう一度言うわ！アンタ達あたしの奴隷になり「「断る」」なんですってぇ！！」

さすがにイラッときた。原作ブレイク？俺がいる時点でそうじゃないか。ケケケ・・・ぶっ壊す。

「アンタ達に選ぶ権利はない！黙ってあたしの言うことを聞きなさい！！！」

「おいアリア！！いくら・・・なん・・・で・・・・・・・・も」

・・・なぜ、今キンジのセリフが途中で途切れたのかというと・・・

「・・・・おいアリア・・・いい加減にしろよ・・・？」

俺がマジで切れてしまったからである。

「・・・・ぃ・・・・ぁ・・・・・」

「お前・・・ちょっと調子に・・・乗りすぎだよ・・・？」

「・・・・ひ・・・・ぁ・・・・・・・・」

キンジも、あのアリアですらもがくがくと震えている。

俺はよく、女と見間違われることがあるくらい中性的な容姿だが、昔何度か親がいないことでいじめられたことがあった。

どうやらそのときある程度の沸点を超えると、プロの傭兵ですらガクガク言わせるような雰囲気を漂わせるらしい。（自覚なし。）

そして最近いろいろと立て続けに起こりすぎて自分でもかなりストレスがあったらしく・・・・

「少し・・・お話しようか・・・・？」

「「は・・・・はいぃぃぃぃぃ！！！」」

こんな感じに切れてしまったようだ。

ただ、もともと友達（と思っている人。）には沸点がかなり高いため、大きな原因は日頃のストレス、引き金はアリア、といったところだ。

おかげで今回はかなりマシらしい。

と、いうことで数分間アリアとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしてみた。

「ふぅ～・・・・」

「「（ガクガクガクガク）」」

「反省・・・・した？」

「「（コクコクコクコク）」」

「ならよし！」

「「（ふぅ～・・・・）」」

そういえばなんでキンジまであんなに必死にうなずいてるんだろ？

（そうだ、神様。）

『（ビクッ）な・・・・なんじゃ・・・？』

（？・・・なんでそんなにびくびくしてんの？）

『そ・・・そそそんなことはないぞぉぉい！？ななななにを言ってるのやらさっぱりじゃ！？』

（そ・・・そうか？）

めちゃくちゃあわててないか？まぁ・・・・いいや。

（そうそう願い事に関してなんだけど・・・）

『か・・・数か！？数が足りんのか！？百ぐらいかなえればいいかの！？いいかの！？』

（い・・・いやいやいや！？どったの！？落ち着いて！！）

『お・・・・お慈悲をぉ～・・・殺さんといてぇ～・・・・・（ガクガクブルブル）』

（いやいや！？殺したりせんて！何言ってんの！？）

『ひぃ～～～～～お助けぇぇぇぇ！！！！』

（あ、ちょ！！）

ぷつっ

（なんやろ・・・回線落ちしたみたいな音が・・・・。あ、願い事・・・まぁ今度でいいか。）

というか本格的に神様がおかしくなってきた。

（・・・神様のとこにも精神科とかあるんやろか・・・？）

まぁそれは後回しにすることにして・・・・と

「・・・・で。」

「「（ビクゥ）・・・・・・・」」

「結局どうすんの？」

まだ震えてた。キンジとアリア。あ、アリアが立った。

「そ・・・それじゃ・・・・その、あたしのどれ（ビクッ）・・・・・ぱ・・・パートナーに・・・・なってほしいかなぁ・・・・・と」

またアリアが人のことを奴隷とかいいかけてたので軽くそっちを見て「ニコッ」ってしてみたらアリアが（ビクッ）ってなった・・・・。かわえぇ・・・・・。・・・・はっ！いかんいかん・・・。

「そうだなぁ・・・・・まぁパートナーとまではいかんけど、手伝うくらいならいいぜ？」

「本当！？き・・・キンジは？」

「・・・・・・・」

「キンジ？」

「俺は・・・・・できない。」

「な・・・なんでよ！？」

（そうやろなぁ・・・キンジはもう武偵やめるつもりやし。でも、根がお人よしやから原作はああなった・・・でもこれは原作に似ているだけ。俺がいる。俺というイレギュラーが。どうなることやら）

「俺はもう・・・武偵をやめるんだ！！」

「ッ！！いいから手伝いなさい！」

「断る」

「ッ！！！なら！！アンタが手伝うまでここに泊まる！！！！！」

「な・・・なにッ！？」

あっ、と・・・たしかこの後キンジ追い出されるっけ？

「泊まりこむ準備はできてるのよ！！」

「何勝手に決めてやがるッ！！！ここは俺の家だ！！！！」

「うるさいうるさいうるさい！！！」

「・・・・・3回」

「数えてないで何とか言ってやってくれ！ナオヤ！」

「ひ・・・・・・ぁ・・・・これは・・・・・その・・・」

「キンジ、転校するまでなら仕事手伝ってもいいんじゃないか？」

「な・・・・なに！？お前もか！？」

だって・・・ねぇ・・？

「俺は別に仕事手伝うのを断るつもりはないよ？ただ奴隷とかいう（ビクッ）日本の法律無視した呼び方があまりにも気に入らない！！（ビクッ）というだけでね」

「・・・・・・・・・」

途中アリアが一部の単語を聞くたびにビクビクするのがたまらない・・・ハァハァ・・。

おっと思考がヤバいほうに・・・・落ちつけ俺。

俺ならいつでも襲える！！！

（ぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああああああああ！！！！なぜそういう思考になるッ！！！！）

とりあえず落ち着け・・・・・・深呼吸しなきゃ・・・・・スゥー・・・・ハァー・・・・。

よし！これで大丈夫！！！

「・・・・わかった・・・・・」

「本当！？キンジも手伝ってくれるの！？」

ヤバッ！かわえぇぇぇぇぇぇ！あ、鼻血が・・・・・・ティッシュティッシュ・・・。

「ただし！！！「キンジティッシュどこー？」・・・ただし、強襲科（アサルト）には「ねーねーキンジーティッシュはー？」・・・・強襲科（アサルト）には戻ら「キンジー」ぁぁぁぁぁあああもう！人が大事な話してるときに空気を読めッ！！！」

だって鼻血がでるんだもーん。

「この辺血まみれにしていいなら放置するけど？」

「こちらにあります」

「あんがとー」

軽く脅した？瞬間さっとティッシュの箱を差し出すキンジ。・・・

話がわかるわーー。

「・・・・はぁ・・・・・で、俺は強襲科（アサルト）には戻らない。それが条件だ。」

「え?でもアンタは強襲科（アサルト）ではSランクでしょ?なんで探偵科（インケスタ）でEランクなんかでやってんのよ。」

原作ではたしかにキンジが試験の時HSS化して抜き打ちで隠れていた教官含め生徒全員を数分で全員捕縛してSランクになってたはず。

「・・・・今の俺の実力はただのEランクだ。」

「・・・今は（・・）ってことは何かあるのね?強くなるスイッチのようなものが?」

「・・・・さぁな?」

（へぇー・・・さすが。推理力はないのに勘が半端じゃなく鋭いな。）

「・・・・まぁいいわ。」

「・・・ホッ・・・・「ただ、お願いがあるの」・・・なんだ?」

「一度だけ、一度だけでいいから強襲科（アサルト）に戻ってほしいの。」

「・・・・わかった。「本当!?」ただし、次起きた事件だけだ。」

「そのかわり、どんなに大きな事件でも1つよ。」

「ああ、どんな小さな事件でも一つだ。」

なんとかまとまったな・・・・・ってあれ？キンジ追い出されてない？

・・・・原作がぁぁぁ・・・・・・どんどん遠くなっていくぅぅぅ・・・・・。

第6話～現実～（前書き）

今回はちょっとシリアスで短めです。その場のノリで書きましたｗ
まさかそのまま二話連続で書くとは思いませんでした・・・・。

第6話～現実～

～ナオヤ視点～

あれから数か月の時が流れた・・・・。

「アリア！！！キンジ！！！無事か！？」

そこに広がっていた光景に俺の思考は停止した。

そこには・・・・

「ククッ・・・おそかったなぁ。ナオヤ君。今ちょうど片づけたところだよ？」

「・・・おい・・・・キンジ・・・・アリア・・・・うそだろ・・・？」

「ククククッうそではないさ？現実をみるんだ。ほら・・・・そこに転がっているのは誰の頭だい？言ってみなよ。ククククッ。」

そこには、キンジとアリアの頭が転がっていた。瞳孔の開いた生気のない目・・・。

俺はぼうぜんと立ち尽くした。

「ククッ・・・・君のお友達はとても弱かったよ？」

そこにいた謎の男のその言葉を聞いた瞬間何かが俺の中ではじけた。

その瞬間、謎の男の首が中を舞った・・・。

さらに一瞬空中で停止し、粒子レベルで細切れになった。

「・・・ッうぁぁぁぁぁぁあああああああああああああああああああああ！！」

俺は・・・全力で泣いた・・・。

「・・・・ッハ！！ハァ・・・・ハァ・・・・ハァ・・・」

その瞬間目が覚めていた。

「・・・・ハァ・・・ハァ・・・夢・・・・か・・・・」

なんていやな夢を見るんだろう・・・そう思った。

バタンッ

「大丈夫かッ!?ナオヤッ!?」

「どうしたのッ!?」

あわててドアを開けて入ってきたのはキンジとアリア。

ここはキンジの家の部屋の一つ。なぜ俺がそんなところにいるのかというと、

「今日はここに泊まるわ。ナオヤも泊まりなさいね。」

「「はい？」」

「だから荷物をそのまま持って帰るのは面倒だから、せめて今日だけ止まってく。ついでだからナオヤも泊まりなさいということ。」

などと言っていた。俺は別にどうでもいいのだが、この家の主であるキンジの許可がないとどうしようもないのでキンジに聞くと「・・・・もうどうにでもなれ」と、自暴自棄になっていた。

で、結局いいということになり、俺も泊まっていたわけだ。

「だ・・・・大丈夫だ」

俺が軽くびっくりしていると

「よかった・・・ってすごい汗じゃない！？なにがあったの？」

「・・・・寝付けなかったか？」

そんなことはなかった。キンジの余っていた部屋のベッドはあまりにも寝心地が良く、横になった瞬間には寝ていたのだから。

「そんなことはない、とても寝つけたんだ。けど・・・・。」

夢のことを伝えるべきか迷った。あの夢が本当なら伝えるべきだろう。回避の対策になるだろうから。

でも・・・あんな夢、キンジ達には知ってほしくなかった。できるだけ・・・。

そんな葛藤を繰り広げていると

「・・・ふぅ・・・・なんでもないならいいわ。さぁ、起きて朝ごはんにでもしましょ。」

アリアがそう言ってくれた。いいやつだと・・・おもった。

いつもツンツンしていても、やっぱり鋭いやつで人のことを心配している。

そいつが本当に嫌だといったなら、そういうことはしない。

そんなタイプだと思った。

「・・・・そうだな」

キンジもやっぱりお人よしだった。

俺はそんな二人に小さく「・・・ありがとう」と告げ、二人と一緒にリビングへ向かった。

～キンジ視点～

俺は、ナオヤのうめき声で少し早く起きていた。部屋が違っても壁を挟んでいるだけで実は数センチ隣でナオヤが寝ていたりする。だからちょっと大きめのうめき声くらいなら壁越しでもわかるようになっていた。

そして数分するとだんだんとナオヤのうめき声が大きくなっていっ

た。

俺は心配になって、ナオヤの部屋へ行こうとベッドから降りたとき、

『・・・・・ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』

という叫び声が聞こえた。

俺はあわてて部屋を飛び出した。アリアも同じく目が覚めたらしくあわてて飛び出してきた。

そしてナオヤの部屋に一気に入ると、そこでは全身汗まみれで息をあげているナオヤがいた。

どうしたと聞いてもナオヤは一向にこたえようとしなかった。

そしてアリアが無事ならいいと、朝ごはんにしようと、そういった。

そして俺とアリアがリビングへ向かおうとしたとき、かすかに背後から「・・・ありがとう」、そう聞こえたのだった。

俺たちは朝食をとるとすぐ支度をしナオヤは自分の家（隣の部屋。）に戻った。

そして、いつも通りバスに乗って武偵校に向かった。

～ナオヤ視点～

「しまったぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

俺はキンジ達と別れた後、自分の部屋に戻り、学校へ行く支度をしていた。

が、途中で眠気に襲われつい軽く寝てしまった、時間はまだ6時ちょっとなので寝れると踏んだのだった

しっかりと目覚ましをしていたのだがどうやら電池が切れてしまっていたらしく、起きたのは・・・

「は・・・八時二十分!?遅刻ゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥウ!?」

そして猛スピードで家を出たのだった。

・・・・・徒歩で。

～町の住人～

私は朝、9時に仕事に間に合うように八時半ちょっと前に家を出るんだけど・・・その日はいつもと違った。

支度を終えて外に出たら、突然バタンッと音がしてそっちを見ると、女の子?がものすごい勢いでドアをしめているところだった。（玄関から出て鍵をするまでの時間僅か0．4秒）

そしてそのまま通路から飛び降りて（マンションで二階に部屋があったはず）地面に足がついたと思ったら、すでに着地したところから100mくらい離れたところにいた。（人間なのかな?）

その瞬間目の前を恐ろしい突風が吹いて、その女の子?はいなくなっていた。

第6話～現実～（後書き）

最後のとこの女の子？はもちろん神野ナオヤ君です。

第7話～Rランク～（前書き）

書き終わっておもった・・・・今回『も』おもしろくない・・・・・と。

第7話～Rランク～

～ナオヤ視点～

「ハァ・・・・ハァ・・・・・・ま・・・・・間に合わねぇぇぇぇ！！！！」

現在、俺はこっちに転生してから一度も出したことのない本気と書いてマジと読むと言いたくなるくらいの全力で走っていた。

現時刻・・・・8時28分。

武偵校まであと少しある。

「うぅ・・・転入そうそう遅刻とかいやだぜ・・・・・・」

そうぶつぶつと愚痴を言いながら曲がり角を曲がった時、

「・・・ッ・・・・・おい！そこのやつ！隠れてないで出てこいよ！！」

曲がった角の近くからかなりうまく気配を消している奴を見つけた。多分かなり周りに気を配った状態のSランク武偵でも見つけるのは難しいだろう。

そういうレベル。

「・・・・よくわかったね。これでもうまく気配は消せていたつもりなのだが・・・・。」

「・・・うまいってか完璧だったよ。俺じゃなきゃ見つけるのは難しいだろうな。」

（俺の気配察知能力、神様が言うには最高のレベルまで達していたはず・・・。こいついったい何者だ？ってか）

「いつまで隠れてるんだ？」

「・・・・そうだね。そろそろ自己紹介と行こうか。」

そいつは姿を現した。少し前から何となくわかってはいた。こいつが誰なのか。なぜあんなにも気配を消して俺を付けていたのか。

・・・だがこの予想は正直当たってほしくなかった。

「僕の名前は――――」

その男はとてもよく見憶えのある奴だった。そして――――

「――――シャーロック・ホームズ。君を迎えに来たよ。神野ナオヤ君？」

――――アリアのもっとも尊敬する人物であり、敵だった。

～キンジ視点～

俺は強襲科（アサルト）の死ね死ね団とあいさつを（おもに、「俺より早く死んでくれ！」みたいな死ねという挨拶だ。こっちではこれが当たり前の挨拶だ。）して

強襲科（アサルト）を抜けた。夕焼けのなか、門のところに背中をついて待っていたちびっこがいた。言うまでもなくアリアだ。

そして、不機嫌に歩き始めた俺の横をアリアが付いてきた。

「アンタ・・・・人気者だったのね。」

「あんな奴らに好かれたくはないな」

本音である。

「あんたって人づきあいも悪いし・・・ネクラ？な感じもするけど、ここのみんなはなんかあんたに一目置いてる感じがした。」

たぶん、それはきっと、入試のことを覚えているからだろう。ヒステリアモードの俺のことを。

俺たち強襲科（アサルト）の志願者たちは、全員１４階建ての廃屋に散らばり、武装したうえで自分たち以外の受験生を捕縛し合うという実戦形式のものだった。

そして俺は自分以外の受験生を全員倒し、または縄で縛りあげた――――抜き打ちで潜んでいた教官五人も。

「あのさキンジ。」

「なんだ。」

「ありがとね。」

「何をいまさら。」

そう俺にうれしそうに告げてくる。

（そりゃお前はうれしいだろうよ。俺はうれしくないがな。）

俺はもう、武偵を辞めるんだ。厄介事には首を突っ込みたくなんかない。

「勘違いはするなよ？俺は一度だけこっちに戻ってきただけだ。一軒だけ解決したらすぐ探偵科（インケスタ）に戻る。」

「分かってる。でも強襲科（アサルト）のなかを歩いてる時のキンジ、皆に囲まれてかっこよかったよ。」

「・・・・」

なんでそういうことを言う。

本人にそんなつもりはないだろうが、女子に――見た目だけはとにかく可愛い奴にそういうことを言われると言葉に詰まる。

「ここでは皆、私に近寄ってこないのよ。実力差がありすぎて・・・。まぁ、あたしは『独唱曲（アリア）』だからいいんだけど。」

「・・・？」

「アリアってね。オペラの独唱曲っていう意味もあるんだよ？一人のパート。一人ぼっち。」

「それで?俺と組んで『デュエット』にでもなるつもりか?」

アリアのほうを見ずにそういうと、アリアがクスクス笑っている。

横目で見るとほんとに楽しそうに。

「あんたもおもしろいこと言えるじゃない。」

「おもしろくないだろ?」

「おもしろいわよ。」

・・・どこがおもしろかったのだろう。

「お前のツボは分からん。」

「やっぱりキンジ強襲科(ここ)に戻ってから活き活きしだした。ここに来るまではなんだか無理してるみたいで苦しそうだったよ?」

「そんなこと・・・ないッ」

また恥ずかしいことを言う。

俺はアリアの話を聞きたくなかった。

何か本当のことを言われている気がして――――

「俺はゲーセンに寄って帰る。お前はさっさと帰れ。」

「バス停までは一緒ですよーだ。」

アリアはベーと舌を出して笑う。

相変わらず憎まれ口をたたいてはいるが、俺を強襲科（アサルト）に連れ戻したことが本当にうれしいのだろう。顔に出ている。

「ねぇ・・・ゲーセンって何？」

「ん？ゲーセンもしらねぇのか。」

「仕方ないでしょ。まだこっち来たばかりなんだから。」

それもそうだ。

「ゲームセンターのことだ。」

「んーじゃああたしも一緒に行く。パーティー組んでくれるお礼。」

「来なくていい。それはお礼じゃなくて罰ゲームだ。」

俺は少し早足に歩いていく。

するとアリアはニヤーと笑って、俺の真横を付いてくる。

俺はさらに大股で歩く。

アリアもスカートひらめかせて付いてくる。

「ついてくんな！今はお前の面なんて見たくない！」

「あたしもあんたのアホ面なんて見たくない！」

「じゃあなおさらついてくんな！！！」

「ヤダ！！！」

そうしていつの間にか全力疾走でゲームセンターの前まで来ていた・・・・。

「ハァ・・・ハァ・・・・これ・・・なに？」

「ハァ・・・・ハァ・・・・ＵＦＯキャッチャーだ・・・・。」

「ＵＦＯキャッチ？なんか子供っぽい名前。まぁどうせアンタが行くようなところだからくだらないんでしょうけ・・・ど・・・。」

「・・・どうした？」

スタスタスタビタンッ

突然アリアが歩きだしてＵＦＯキャッチャーのガラスにへばりついた。

身長の低さも相まって本物の小学生みたいだ。

こんな恰好でここにいたら警察に補導されるんじゃないだろうか。

「・・・・・おい。」

「・・・・・・」

「そんなに珍しいのか？」

「・・・・・・」

「おい。」

「・・・・・・・・かわいー・・・・・・」

ズルッ

ものすごい勢いでこけそうになった。

（あの双剣（カドラ）双銃のアリア様がＵＦＯキャッチャーのぬいぐるみ見てかわいーかよ・・・）

「ほしいのか？」

「とれるの！？」

「あ、ああ。幼稚園児でもできるようなもんだ。」

「すぐにできる？」

「ああ。やってみるか？」

「（コクコクコク）」

アリアがこっちをみて首を縦に振っている。

（なんだこのアリアは・・・。調子が狂う。）

そうしてやり方を教えたが・・・・・

「い、今のは練習よ！」

カチャ　ポチ　ポチ

（狙いが悪い。あれじゃとれん。）

ウィーン・・・・ぽと

「キィ――――」

「お、落ち着け！壊れるなアリア！」

そしてアリアが３０００円くらい浪費したころ・・・

（いかん・・・・アイツギャンブルとかにはまってたいへんな目にあうタイプだ・・・。はぁ・・・仕方ない）

「どけ・・・俺がやる。」

カチャ　ポチ　ポチ

アームにはライオンらしきものが一匹、しっかり挟まれている。そして・・・・

ウィーン・・・・

アームにはさらに同じくライオンらしきもののタグが引っかかっている。

（一匹目は確実に取れる。二匹目は運が良ければいけるか・・・・？）

ウィーン・・・・ポトポト

「よし！！」

二匹のライオンらしきものはうまく穴に落ちてくれた。

「やったー！」

パチン

俺たちは無意識のうちにハイタッチしていた。

「・・・あ」

「・・・・ハッ！いまのは・・・そのう・・・」

・・・気まずッ！！！

「えっと・・・・ほれ。」

「え？くれるの？」

「そのために取ったんだろうが。」

そういってアリアに二匹押しつけた。

「・・・・ありがと」

「・・・・・・・あぁ」

「そうだ。これ一匹アンタにあげるわ。アンタの手柄だからね！」

アリアはさっきとったライオンのようなものを一匹俺に渡した。

「お、おう」

「かぁーーわぁーーいぃーーー」

チクショウ・・・そんなうれしそうな顔しやがって・・・。

それにしても・・・・アリア。

人形に抱きつくのはいいが・・・・レオポン（この人形の名前らしい。タグに書いてあった。）破裂しそうだぞ。

そして俺はこれが携帯ストラップになっていることに気がついた。

俺は携帯を取り出し、ストラップをつけようとしているのだが・・・・

「・・・・クッ・・・・はいらん・・・・・」

「うーん・・・・・」

どうやらアリアも気づいたようだが苦戦しているようだ。

「そうだ。キンジ、どっちが早くつけられるか競争よ！」

「なんだそりゃ。ガキかお前。」

「やったわ。入りそうよ」

「こっちも・・・お前なんかには負けねぇ・・・。」

その時、

「よう！二人とも！楽しそうだな！」

ナオヤがやってきた。

～ナオヤ視点～

「よう！二人とも！楽しそうだな！」

なんだなんだ～？おそろいのストラップ・・・ああ、あれか。

アリアがうまく取りきらんでキンジがとってやったってやつか。

どうやらここまでちゃんと原作通り見たいだな。

「あ！ナオヤ！！あんた今までどこにいたのよ！？学校にも来てなかったらしいし！！」

「・・・なんかあったのか？」

「そうだなぁ・・・・」

あったっちゃあったな。なんせ伊・Ｕーのボスがお出ましになったんだから。

俺は朝、シャーロック・ホームズに会い、その後やつと少し話した。

やつは、

「君にお願いがあってね。」

「・・・なんだ？」

「伊・Ｕーに来ないかい？」

「・・・なぜ俺なんだ？」

「君がこの世界の人間とは思えないくらい強いからさ。」

「率直に言おう。断る。」

「ふむ・・・なぜだい？」

「めんどい。」

「・・・・・・なんだって？」

「いやだから、イ・ウーはめんどくさいからヤダ。」

だって無原罪のブラドとかいるじゃん？キンジたち敵にまわっちゃうじゃん？めんどくさくね？

「・・・プッ・・・ハハハハ。そうか・・・めんどくさいか。」

「ああ、それに今の生活もなかなかに面白いんでね。」

「ならしかたない。・・・ここは引くとしよう。」

「・・・戦わないのか？」

「君には勝てないよ。君のほうが圧倒的に強い。」

「そうかい。過大評価だと思うがね。」

「君は自分を過小評価しすぎだよ。・・それでは僕はそろそろ行くよ？」

「・・・ああ。いずれまた会うだろうしな・・・。」

そういった瞬間、やつの気配は消えた。

その後は学校に行き授業を受けようと思ったのだが・・・

「おい神野。ちょっとこい。」

「はい？なんですか？」

担任の先生に呼び止められた。理由は・・・

「神野。今日中に残りの試験をする。」

「はい？今日ですか。うーん・・・・授業はいいんですか？」

「ああ、特別免除だ。」

「というわけだよ。キンジ、アリア。」

説明したのは後半の試験のとこだけだけどね！！

「ふーん・・・・・で？どうなったの？」

「あぁー・・・・・えっとその・・・・・」

「？早く言いなさいよ。」

「・・んぶ・・・ンク・・・・・」

「は？なに？」

「全部・・・・・Rランクだった・・・・。」

「「・・・・・・は？・・・・・・・・・・・・はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああああああああああああああああ！？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

「全部Rランクですって!?あんたふざけてんの!?ケンカ売ってんの!?ありえる訳ないでしょうが!!!!!」

いやだってほんとなんだもん!!

「なに!?アンタ超偵なの!?使えるの超能力!?」

「ああ・・・なんか使えたよ。えっと・・・・G42(グレード)・・・だったっけ?」

「はぁぁぁあああああああああ!!?42!?人間が出せる数値じゃないわよ!?アンタ本当に何者なのよ!!!!」

いや・・・そういわれても・・・・ねぇ?

でも確か・・・白雪がG17で世界に数人しかいないって・・・・。

じゃあ42ってなんなの?っていう・・。。

神様ぁぁぁぁぁああああ俺の能力どこまでチートなんですかぁぁぁぁぁぁ。

「ま、まぁまぁ落ち着いて!」

「これが落ち着いていられるわけないでしょぉーーーーーーーーーーー!!!!!!!!!!!!!」

「ここゲームセンターだから!!!」

「はっ！！！！・・・・・・・・・・・・・・ッ・・・・・うぅ・・・・・・・・・！！」

アリアはここがゲーセンだということを忘れていたらしい。

気づいたとたんに顔を真っ赤にして静かになった。

そしてとりあえず家に戻り、詳しく説明することになった。

～一通りランクの説明～

「つまり、アンタ一人で回復、武器などの整備、情報収集、近中遠距離戦闘、狙撃まで何でもこなせるわけね・・・。」

「そういうこと。」

「はっきり言って信じられない。」

ですよねぇ・・・・・

「だから私と勝負しなさい！」

「へ？」

「あんたがRランクであることを証明しなさい！」

「・・・・・はぁ・・・・わかったよ・・・・。」

「じゃあ行くわよ。」

「はいはい・・・・。キンジも来るか？」

「ああ・・・Rランク、見てみたいからな。」

「そうか。」

そして俺たちは、武偵校のグラウンドを教師の許可をもらって、使わせてもらうことにした。

ちなみに、教務科（マスターズ）も興味があるらしく、何人か立ち合うらしい。

「それでは模擬戦を始めるぞ！神埼！神野！用意はいいか？」

「「はい！」」

「始め！！！」

その声とともにアリアが突撃してきた。

武偵校の制服は防弾、防刃性になっていて銃は決定打にはならない。なので銃を打撃の武器として使う。

「はぁ！」

掛け声とともにアリアが右足でけりを放つ。が・・・・

アリアのけりに合わせて左手で受け止め、そのまま足をつかみ、鉛筆削りのような感じで一回転。（わからなかったらアニメ、日○をみてくれ！○常のみ○ちゃんが使っているぞ！）

アリアはその回転にあわせ自分からジャンプして威力を落とし、その勢いで上から左足でかかと落としを放ってくる。

（さすがに・・・強いなぁ。）

そのけりをアリアの足から両手を離して白刃取りの構えでつかむ。ふりをして、アリアが足を振り下ろした瞬間バックステップ。一度距離をとる。

アリアは体術だけでは無理があると判断したのかガバメントを抜いた。

ババンバンッ

三連射。距離が近く、俺が動かなかったので不意を突いて撃ったのだと思っているようだ。アリアは当たることを確信している。

俺は・・・・

スッ・・・・と体を少し動かし、弾を避けた（・・・）。

「・・・ッ！！」

さすがに驚きを隠せないらしい。教師陣も唖然としている。

アリアは、

バババババババンッ

とかなりの連続射撃を開始する。狙いはすべて別。すごい精密射撃

だ。

一発目は左足。少し内側にずらして避ける。二発目と三発目は右足。
今度は外がわの後ろへ少しずらす。

四発目は鳩尾、はさっき横に動いたので当たらない。五発目は右、
六発目は左腕、腕を少し上にあげる。

すると、

ヒュン・・・・・・

すべての弾が俺に当たらずに反対側へ飛んでいく。

「なっ!!!!・・・・・・」

アリアはびっくり、教師は唖然としている。まぁそりゃぁねぇ・・・
・素で銃弾見極めて完璧に避けるとかｗｗｗ

よし!あれをやろう!そうおもって俺が右手を左にもってきて後ろ
に思いっきり引く。

アリアがよくわからないけどチャンス!とでも思ったのか残ってい
た最後の一発を撃ってきた。ラッキー!

バンッ

そして俺は弾に合わせて全力?で腕を振る。その時銃弾に合わせて、
指を動かし、挟む。そしてそのまま一回転し、方向をずらす。

そう、これは原作でＨＳＳのキンジが使う技だ。そして・・・・・

ガキィンガキィン

「キャッ・・・！！」

アリアが持っていたガバメントの片方にあてた。さらにその跳弾でもう片方を弾く。

そしてアリアが銃を離した瞬間に一気に詰めより、首にポケットから出したナイフを添える。

「そこまで！」

それで決着はついた。

「うっ・・・・たしかに強いわね・・・。」

「そりゃどーも。」

にしても単調な技しか使わなかったなぁー・・・アリア。まぁいいけどね。

「さて、神野。あとでもう少し聞きたいことがある。いいか？」

「？わかりました。あとで職員室に行きます。」

そうして勝負は俺の勝ちとなり、解散となった。

第8話～前触れ～（前書き）

なんだか最近アイデアが出た後それを劣化して再現することが多いです・・・・。
そんなわけで今回も面白くなりませんでした。はいすいません・・・。
ですが次回からが一番盛り上がるッ！！！はずッ！！！というわけではい。
調子に乗ってすいませんでした・・・・・・。
第8話、どうぞ～

第8話～前触れ～

～ナオヤ視点～

「・・・・で、神野。」

「はい。なんですか？」

「お前・・・・アレ・・・・どうやったんだ？」

「アレ？」

アレ・・・あれ？あれって何ですかねぇ・・・・心当たりがありすぎて困るぜ！！！

あ、もしかして

「あの鉛筆ｋ・・・じゃなくて・・・ドラゴンスクリューですか？」

あれってつなぎの技なんだよな―・・・まぁ途中で反撃されたからつなぐも何もなかったけど・・・

「違うわぁ――――！！！あれは他の奴にもできる！！！」

「そんな！？みんな頑張ってるんですよ！？」

「その答えはさっきの質問の答えにはなってない！！！！それやなくて！最後につかってた「あぁ・・・」・・・・・・わかってくれたか？」

「はい！あれですね？」

「そうあれや！」

「うーん・・・あれかぁ・・・・・」

「あれや！！」

「あれねぇ・・・・・」

「いいから早く！！！」

「はいはい・・・・・・」

ふーむ・・・・・

「あれってなんです？」

「なめとんのかおんどりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

うぉ！？先生がキレたｗｗｗ他の先生がめっちゃ焦ってなだめてるｗｗｗｗ（爆

「笑ってないで！！早く教えてください！！！」

「ああ、えっとですね。」

「ほら！先生落ち着いて！話してくれるみたいですよ？」

「うぅ・・・・・」

「わかりません！」

満目の笑みで宣言してやりましたｗ

ブチッ（何かの切れる音）

「うふ・・・うふうふふふふふふふうふふふふっふふふふふふふふふっふふふ」

先生が壊れましたｗｗｗ

「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ガンッ

「落ち着け！！！！！」

あ、他の先生に殴られた

「ぐ・・・・・・・」

「ふぅ・・・・おい神野！！！！」

「はい？」

「はい？じゃない！！教師に向かってその態度！どうなるかわかってるのか！？」

「知りませんよ。そんな・・・・こ・・・と・・・・・」

「お前・・・知りませんだと!?「ドサッ・・・・・・」・・・って
おい!どうした!?」

(あ・・・れ・・・?意識・・・・・が・・・・・・と・・・・お・・・・
・・く・・・・・)

そこで俺は意識をなくした。

~アリア視点~

「はぁ・・・」

あたしは、キンジの家へ戻る途中、ずっと考えていた。

(あの時、私の銃を弾いた技・・・どうやったのかしら?)

あの時アイツは突然腕を後ろに引いて止まった。何がしたかったの
か全然わからなかった。

でも何かされる前に撃ったのだけど・・・その瞬間、アイツの腕が
見えなくなって、気づいたら元の位置に戻ってた。

その瞬間、私の銃は二丁とも弾かれてた・・・・。

(腕を高速で振って風をおこして弾いた?でも風であんな衝撃は来
ない・・・と思う。それにアイツ・・・弾を避けたようには見え
なかった・・・ッ!?まさか!?)

アイツは腕をいっぱいに引いていた。そして銃を撃った瞬間、腕は元の位置にあった・・・つまり腕を振ったことになる。そして撃ったはずの弾が当たらない。相手は避けた様子もない。

つまり飛んできた弾に腕を振った時に何かした・・・ということになる。

そしてアイツには弾が当たらずあたしの銃が弾かれた・・・つまり、

（アイツは何らかの方法で弾を弾き返した!?素手で!?）

だけどそれしかあり得ない。

アイツほんとに何者なのよ・・・・。

～ナオヤ視点～

（う・・・・ん・・・・？）

暗い・・・・とても暗い所にいる・・・・・。

（俺は・・・・・？）

『・・・・聞こえるか？』

どこかから声が聞こえる・・・・誰の声・・・・？

『聞こえるようじゃな・・・』

聞こえる・・・でも分からない・・・・・俺は誰なんだ・・・？

ここはどこなんだ・・・・・？

『ここはお主の意識のなかじゃ・・・・。手ひどくやられたのう・・・・』

俺は・・・俺の意識・・・・・？

『ふむ・・・まずは自分のことを思い出して貰わんといかんのう・・・それ。』

・・・・ッ！？・・・ああああああああああああああ痛い！！！

頭が・・・割れるように・・・・・！！！

『少しじゃ・・・・我慢してくれぃ』

ああああ・・・・・・ああ・・・・・おさまった・・・・・・。

『少し・・・休め・・・・・』

また・・・・意識が・・・・・・・

『ふぅ・・・・いかんのう・・・・・治癒！！！』

あたたかい・・・・なんだろう・・・・？やさしい光が・・・・・

疲れが取れるようだ・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『やっと目が覚めたか・・・・。』

「・・・・？神様？」

『おう、そうじゃ。』

「へ？ここどこ？なんで神様が目の前に・・・？・・・・あぁ・・・・また死んだのか・・・で？こんどはどこに転生すんの？」

『違うわ！お主はまだ死んどらん。』

「へ？じゃあなんでここに？っていうかなんで俺がこっちに？」

『いや、ここはお主の意識のなかじゃから、『こっち』よりも『こっち』のほうが合うと思うぞ？』

「あ、そうなの？」

『そうじゃ。でな？ちと問題が起きた。』

「？・・・どういうこと？」

『最近、お主全力で戦ったことあったか？』

「？・・・えーっと・・・戦ってはないけど全力で走った時はあったよ？」

『その時のせいじゃな・・・・いやのう・・・・その時の力が膨大での？次元に歪ができてしまってのう・・・。地獄のやつらに介入されたのじゃ。この世界に。』

「・・・・・つまりどういうこと？」

『しばらくわしからそっちに干渉できん。つまり会話や願い事がダメになる。』

「マジ？」

『マジ。それでの・・・・・今のうちに願い事を叶えておかねばならんのじゃ。』

「うーん・・・・ってかそのまえに！俺どうなったの！？たしかアリアと戦ったあと・・・・あれ？思い出せない・・・」

『その時じゃ。地獄のやつらが介入したのは。その時にお前に干渉したらしくてのう・・・。少しの間の記憶が消えとる。』

「・・・・俺何やった？」

『あのあと教師についていって、最後の技について聞かれたがのう。アホみたいなギャグ連発して教師の一人がキレて、そのときわしがこっちに連れてきて気絶したというわけじゃ。』

え？つまりあれですか？教師が俺がやった技が気になって聞いたところ、まじめに答えずギャグ連発して教師がキレた？

『ところどころ会話が成り立っておらんかったなぁ・・・』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・死にたい・・・・・・。」

『・・・・・・で、願い事はどうする?』

神様にスルーされた・・・。まぁいいや・・・・

「・・・・・うーん・・・・今のところないんだよなぁ・・・・・・。」

『・・・はぁ・・・・・珍しいくらい欲がないのう・・・』

「まぁ十分生活できてますし」

『仕方ないのう・・・わしが決める』

「え!?ちょっとm『そうじゃのう・・・見たことのある技や能力はすべて使える、デメリットのありなし切り替え可能、身体能力強化。限界突破はすでにあるからいいの?』

「マジ!?もうチートキャラじゃん!」

『もとからじゃろ?』

「それもそうか」

『それから”王の財宝(ゲート・オブ・バビロン)”も付けとくかの。』

「え!?いいの?」

『いいんじゃよ。おまけじゃ。・・・ではそろそろ起きるぞい。が

んばるんじゃぞ』

「ありがとう!!」

そこで俺の意識が途切れた。

・・・・・・・・・・

(う・・・・ん・・・・?)

「知らない天井・・・・」

「ん?起きたか。」

「あれ・・・・?先生、どうしたんですか?」

「いや・・・・どっちかというとお前がどうした?っていう状況なんだが・・・。」

え?

「どういうことでせう?」

「お前・・・覚えてないんか?教師バカにして突然気絶したんだぞ?」

「へ?・・・・先生・・・俺なんて言ってました?」

「えーっとたしか・・・・・」

～説明中～

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「先生」

「なんや？」

「俺の制服とってもらっていいですか？」

「ほれ・・・なんや結構落ち着いｔ「さようならみなさん。俺は次の世界へ逝く！」ってまたんかい！？」

俺は・・・・・とりあえず先生に制服をとってもらってそこに仕込んであったバタフライナイフで死のうと首にあてたところ、先生に取り押さえられてしまった・・・・。

「HA☆NA☆SEッ！！！！」

「やめんか！こんくらいのことで死のうとするな！！！」

「・・・・・・・・」

「たのむから！自殺に失敗したからってそんな悲しい顔せんといて！！マジで！」

「はぁ・・・・・」

「ため息つきたいのはこっちや・・・・。まあとりあえず、記憶ないみたいやし、疲れがたまっておかしくなったとでも報告しとくか

らあんしんせい。」

この人は・・・なんてやさしいんだ!!!

「・・・ありがとう・・・ございます・・・(泣」

「ちょ!?その歳でなくなや!!はぁ・・・・で?結局あの技はどうやったんや?」

あぁ・・・結局気になるんだ。

「あれはですね・・・・」

~説明~

「・・・・・お前ほんとに人間か?」

「・・・はい。多分・・・・」

最初はおもしろそうに聞いていた先生だったが、途中からなんか変な表情になって最後には人かどうか疑われました・・・。

まぁ俺も自信ないけどね!!

「まぁええわ・・・とりあえず少し安静にしとれ。しばらくしたら帰ってええぞ?」

「はい。わかりました。」

そして俺はもう少し寝てから武偵校を出て家に帰ったのだった。

――――数日後――――――

～キンジ視点～

「おい理子。これでいいのか？」

俺は理子に頼まれたもの、

「そうそれそれ！！」

エロｇもといギャルゲーを理子に渡しているところだった。

「はぁ・・・・で？なんかわかったのか？」

「うん。いくつかあるよー？」

俺は理子に、ギャルゲーを買う代わりにアリアについて調べてほしいと依頼した。

「まず、アリアは貴族（デイム）だよ。」

「アイツ・・・本物だったのか・・・」

確かに・・・何となくそんな感じはしたなぁ・・・・荷物から。

「Ｓランク武偵で強襲科（アサルト）。いままで犯罪者をすべて一人で、一度で捕まえているんだって。９９回連続だってさ」

さすが・・・ふつうは数人で組んで少しずつ追いつめてやっと捕ま

えるのにそれを一発、しかも一人でか。

「今はそのくらいだねー。うふふふふふふさぁーー帰ったら早くこれしなきゃ――――!!」

そういって理子はテンションをめちゃくちゃ上げて腕を振っていた。

バシィィ!!

が・・・その腕が運悪く、俺の腕時計にクリンヒットしてしまった。

「あぁ!ご・・・ごめん!!!ちょっとみせて!!」

理子はあわてて腕時計を確認するが・・・・

「あぅ・・・ごめん!こわれてるみたい!貸して!修理するから!!」

「いや、いいよ。これ安物だったし。」

「だめ!!依頼者のもの壊したなんてあたしの信用にかかわる!!!」

そういって理子はおれの腕から腕時計をむしり取った

「明日には直して返すから!」

「・・・わかった。たのむ。」

そして理子はすぐに時計をもって帰って行った。

が・・・・

（アイツ・・・ギャルゲー忘れてやがる・・・・・・。）

理子は依頼の報酬（ギャルゲー）を忘れて帰っていた。

（今度渡すか・・・はぁ・・・・学校に持って行きたくねぇ・・・）

俺はそのまま、袋に入ったギャルゲーをもって家に帰るのだった・・・・。

第8話～前触れ～（後書き）

なんだか最近他の話とコラボさせたいと考えています。
ネギまとかテイルズとか？？
ほかの人のかいた二次創作でもいいかなぁ・・・・・誰かに頼もうかな？

第9話～事件～（前書き）

あぁ・・・やってしまった・・・・。キャラ崩壊。レキのキャラが崩壊しました

第9話～事件～

～???視点～

ここはとある部屋・・・・そこにはただ一人の少女がいるだけ・・・。

「くふっ・・・・これでアリアとキンジがくっつく・・・・そうすればあたしは・・・・・・」

少女は一台のパソコンを見つめる。そこには今、ある場所の監視カメラの映像が映っていた・・・。

「あの神野ナオヤには要注意してっと・・・・さーて・・・・これから忙しくなるぞぉ・・・・」

少女はパソコンの電源を落とし、準備を「アイタッ」・・・・準備を「もうっ！誰よこんなところに薬きょう置いたやつ！！！」・・・準備を「あ、あたしか」・・・・・・。

～ナオヤ視点～

「べ、別にめんどくさかったわけじゃないんだからね！？」

「「・・・・・・・」」

はっ！電波を受け取ってしまったようだ。

「・・・キンジ。」

「・・・分かってる。大丈夫だナオヤ。すぐ来るからな?」

そういってキンジはおもむろにポケットから携帯を取り出し・・・

『ピ、ポ、パ・・・PRRRRR・・・ガチャ・・・はい。こちら○×□病院です。』

「っておい!?俺はまだ大丈夫だ!!!!まだアレな子じゃないッッッッッ!!!!!!!!!!」

「・・・すいません。こちらの勘違いだったようです。」

『そうですか。では、お大事に。』

「はい。すいません。」

どうやら何とかしてもらえたようだ・・・・。

「はぁ・・・お前のせいで余計な恥かいたじゃねえか・・・。」

「俺のせいか!?・・・いや俺のせいか・・・・」

「ったく・・・で?今のは何なんだ?」

「ん?あれはただ何となくそうしたほうがいいという意思を感じただけだ。」

『ピ、ポ、・・・・』

「やめぇぇぇい！！！！！」

あ、あぶねぇ・・・また電話されそうになった・・・。

『・・・パ・・・・・ｐｒｒｒ』

「ストォォォォォォォォォォォォォップ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「チッ・・・なんだよ？」

舌打ちッ！？

「一回やめろっっつったのになぜ続けるかッッッッッッッッッッッッッ！？」

「だってお前がやめねぇから・・・・」

『ｒｒｒガチャ・・・・はいこちら○×△総合病院です。』

「だからなぜ続けるッッッ！！！？しかもさっきと違うところ！？さらに総合病院にＬＶＵＰしているッッッッッ！！！！ッて言うか切れよ！！！！！」

「・・・すいません・・・・どうやらこちらの勘違いだったようです。」

『そうですか。ではお大事に』

ブツッ

「はぁ・・・お前のせいで余計な恥かいたじゃねぇか・・・。」

「俺のせいか!?っていうかデジャビュ!?」

「てか何の話してたっけ?」

「えっとたしか・・・・。」

俺は倒れた後、少し休んでから武偵校を出ることにしていた。

けど、出る前にアリアがキンジを連れてあわてて戻ってきたのだ。

どうやら俺と戦った時のが原因になったと思っているらしい。

適当に理由をでっちあげている間に、日が暮れ始めたのでそろそろ帰ることにし、アリアたちと帰宅したというわけだ。

そして今後の話をしている最中に俺が突然叫び、キンジが電話、そして現在に至ると、いうわけだ」

「キンジ。」

『ピ、ポ「やらせるか!!!」』

どうやら途中から口に出していたらしい。俺は、また電話しようとしているキンジの携帯を没収し、とりあえず話を続ける。

「で・・・結局どうすんだ?」

「とりあえずは事件が起こるのを待って、キンジといっしょに参加

する。その後はあとで話し合い。」

「一回だけだぞ？」

「分かってるわよ・・・・。」

「じゃ・・・とりあえずそんくらいで今日はお開きにしますか。」

そんくらいというか、それ以外に話しあうことがないという事実・・・・はぁ・・・。

「それじゃ俺は戻るぜ？また明日な―」

「「おやすみー」」

そして俺は自分の家に（隣の部屋）にもどり銃の整備、明日の準備をすませ、晩御飯をくってすぐ寝た。

めざまし時計の電池が切れていることに気づかずに・・・・。

～キンジ視点～

「さて・・・俺もそろそろ寝るぞ？」

「そう・・・あたしはもう少し整備しておくわ。」

「そうか」

ナオヤが帰った後、俺たちはとりあえず晩飯をすませ、明日の準備や銃の整備に取り掛かっていた。

俺は一足早く終わったので先に寝ることにした。が・・・

『ピーンポーン』

「誰だ?こんな時間に・・・」

俺が玄関へ向かいドアを開けると・・・

「ヤッホー―キーくぅーん!時計返しに来たよー?」

「り、理子!?なんでこんな時間に、別に明日でよかったんだぞ?」

「いーのいーの!信用にかかわるんだからできるだけ早く!」

「そうか。まぁいいか。ありがとよ。」

「いいのいいの!それじゃまったねぇー」

そういうと理子は結構な勢いで走って帰って行った・・・・。

「ねぇ―キンジ。今の誰?」

「ん?理子だ。あいつに頼んでた時計の修理が終わったんだと。で、今返しに来た。」

「ふーん・・・?ま、いっか。」

「じゃ、俺は寝る。おやすみ。」

「うん、おやすみ。」

俺は部屋に戻って明日に準備を軽く確認し、寝た。

～ナオヤ視点～

「ふぁ～あ・・・・・・・ん？」

あれ・・？おかしいな・・・

「・・・眼科に行くか・・・・・。」

時計に表示してあった時刻は・・・・7時57分・・・武偵校へのバスは7時58分。

軽く頬をつねってみる。

「いたたた・・・・・・あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁちぃぃぃぃぃぃぃこぉぉぉぉぉぉくぅぅぅぅぅぅ！！！！！！！！！！！」

俺はあわててとび起き着替えて、銃を携帯、朝飯を食べ、荷物を持つ・・・・ここまでにかかった時間計32秒。（ちなみに朝食は昨日のうちにパンを買っておいたんだよ？）

時間を確認するも・・・・58分・・・

「遅かったァァァァァァァァァ！！！！！」

※実は頬をつねっている間に58分になってました（笑）

～キンジ視点～

俺は少し早めに起きて準備をすませていた。

アリアはどうやらどこかへ出かけていたらしい。起きたらすでにいなかった。

昨日理子から返してもらった時計を見るとまだ少し時間がある。

「お茶でも飲んで時間をつぶすか・・・。」

おかしい

別にのんびりしすぎて遅れたというわけじゃない

ちゃんと時計を確認して時間に合わせて家をでた

なのに・・・

「やった！乗れた！よっしゃあああ！おうキンジ！おはよう！」

7時58分のバスはすでに来ていて生徒たちが押しあいながらバスに乗り込んでいた。

「おい武藤！俺も乗せてくれ！」

「そうしたいとこだが無理だ。もう満員。お前チャリで来いよ！」

「無理だ！俺のチャリはぶっ壊れてんだよ！」

俺の自転車はチャリジャックのときに爆弾で吹っ飛ばされている。
このバスに乗れないと雨のなか徒歩で行かねばならない。この時間からだと確実に遅刻だ。

「無理なもんは無理だぜ？男だろ！一時限目フケちゃえよ！じゃあな！二時限目に会おう！」

二時限目に会おう！じゃねーだろ！

薄情者の武藤の声を最後にバスは無情にもドアを閉めてしまった。

バスの中から聞こえてきた笑い声やおしゃべりがうらや・・・・うらめしい。

時刻は８時２０分。

もう授業が始まっているだろう。

『ｐｒｒｒｒ・・・』

突然携帯が鳴ったのでレオポンのストラップをひっぱって携帯に出る。

『もしもしキンジ？今どこ？』

（おいおい・・・授業はどうした？）

「ん？強襲科（アサルト）の近くだが？」

『丁度いいわ。そこからC装備で女子寮の屋上に来なさい！』

「なんだ？強襲科（アサルト）の授業は5時限目からだろう？」

『授業じゃないわ！事件よ！！できるだけ急ぎなさい！！』

「！わかった。」

『ブツッ・・・』

（これが約束した最初の事件か・・・面倒なのじゃないことを祈ろう・・・。）

俺は携帯をしまうと急いで女子寮へと向かった。

そして屋上に出ると俺と同じC装備のアリア達がいた。

～ナオヤ視点～

「遅刻遅刻遅刻ッッッッ！！！！！」

俺があわてて家を飛び出し、（残念ながら雨なので自転車ではない）バスはもう行ったはずなのでそのまま武偵校へ向かった。

（クソッ・・・晴れていれば自転車で・・・・あれ？雨・・・・ッ！？確かバスジャックってそろそろじゃなかったか？）

キンジがレオポンのストラップを持っていた。たしかそのあとすぐの雨の日にバスジャックだったはず。

（やっぱり・・・多分今日だな。）

『ｐｒｒｒｒｒ・・・』

電話？アリアだな

そう思ってすぐさま電話に出る。

「どうしたアリア？」

『事件よ！アンタ今どこ？』

「家から出たとこ。」

『間に合わないわね・・・。じゃあ「場所は？」え？』

「集合場所はどこだ？」

『間に合わないわ「いいから」・・・女子寮の屋上よ。Ｃ装備で来なさい。』

どうやら気休めに呼んでくれたようだ。こっちとしては授業に遅れた理由を作るチャンスでもある。

「分かった。間に合わなかったら先に行ってくれてかまわん。」

『分かってるわ。じゃ。・・・・・ブツ』

「さぁて・・・・行きますか。」

俺は全力で女子寮へ向かった。

～アリア視点～

「さて・・・と。」

今現在、集めることができたのはレキ、ナオヤ、キンジ。

ナオヤは遠すぎるから多分間に合わない。

レキはSランクで経験もかなりあるから大丈夫。問題はナオヤ。

いくらRランクといっても経験が少なすぎる。もともと一般校なんだから当然なんだけど。

キンジはきっとあの力を使ってくれる。

あたしの予想では多分二重人格だと思う。

突然口調が変わったと思ったら、強くなる。

何が原因でそうなるのかはわからないけど・・・

「なんとかなる。きっと何とかなるわ・・・・。」

ガチャ・・・・

突然ドアが開いた。キンジにしては早すぎる。ナオヤは・・・論外。

（じゃあいったい・・・・？）

「ようアリア！来たぜ？」

ナオヤだった。

「は？アンタなんでもう来たの！？ていうかどうやって！？」

「いや普通に全力疾走してきた。」

「・・・・は？いやアンタ・・・あのマンションからここまでかなりあるわよ？走ったとかそういう問題の前に間に合うはずがないんだけど・・・」

「まぁまぁ気にすんな！現に間に合ってるからいいだろ？」

「・・・なんかもういいわ。」

ほんとになんなのかしらこいつ。

「で？どういう事件なんだ？」

「バスジャックよ。７時５８分の武偵校行きのバスが乗っ取られたわ。」

「なるほど・・・で？何人呼んだ？」

「あたしとキンジ、ナオヤ、レキの四人よ。アンタはまだ素人だからレキといっしょに後方にいて。」

「わかった。」

「レキ。こいつ、腕だけは確かだからレキが指示して狙撃を二人でやって。」

「（コク）」

「ナオヤ、絶対半径（キリングレンジ）何Mある？」

「？何それ、おいしいの？」

「・・・はぁ・・・・・絶対半径っていうのは狙撃のできる範囲のこと。レキなら２０５１mよ」

「へ～・・・・よくわからん！！！」

「はぁ・・・・・じゃあちょっと調べるわ。レキ、確認よろしく。」

「（コク）」

「どうするんだ？」

「ここからあの発電機のプロペラを手前から順に狙って。」

「わかった。」

発電機の数は二十。一番近いのはここから８００m。そこから順に

３００ｍずつ離れている。つまりレキが狙えるのは五個目まで。
最大で約６２００ｍ。６キロ離れたプロペラの羽根まで狙撃できるか。

（ふつうは出来ても３つ目くらいが限界ね。銃にもよるけど。）

「じゃあ行くぞー」

そういってこいつは・・・突然何もない所に手を突っ込んで!?やたらと表面積の大きい見たことのない銃を取り出した。

「ってあんた今どっから出した!?っていうかその銃なに!?拳銃で狙撃する気!?ていうかそれ拳銃!?」

「ん?気にすんなｗｗ」

「気にするわよ!!!!!!・・・はぁ・・・なんかもういいわ。」

「んー・・・・ハーディスの使い方いまいちわかんね。今度練習しとこっと。」

そういってこいつはまた何もない所に銃を戻してまた別の銃を取り出した。

今度は・・・メ、メタルイーター!?あの２０００ｍ先の戦車を破壊したという伝説のある狙撃銃!

威力が強すぎて大人でも扱うのは難しくて、安物のヘルメットなら

撃った反動で砕け散るというのに・・・・。

まぁ・・・・こいつだからだいじょうぶね・・・・。

というかさっきからあのロボットレキが目をまん丸に開いて唖然としている・・・。

「・・・・あ、あの・・・・ナオヤ・・・さん?」

あのレキがびっくりしすぎてはっきりと喋れてない!?

「ん?なんだ?レキ。」

「今のは・・・・いったい?」

「気にすんな!体に悪いぜ?」

「は、はぁ・・・・・」

あのレキが・・・・・・・これはある意味おもしろいわねぇ・・・・・・

「じゃあ撃つよー」

そういうとあのメタルイーターを拳銃のように片手で構えて・・・・って!?

「ちょっm『ドンッ』!?」

ナオヤは拳銃のように鋼鉄破り（メタルイーター）を構えたと思っ

たらスコープものぞかず裸眼でしかも片手で撃った。
ふつうならそんなことすれば衝撃で体は吹っ飛ぶし腕は確実に折れる。しかも弾をあてるのは無理なはず・・・・なのに。
「・・・・・レキ。」
「・・・・・ちゃ、着弾しています。・・・・・・」
あのレキが・・・・・あわてている・・・・・・というか!?
「ナオヤ!?アンタ腕大丈夫なの!?」
「ん?いやなんともないが?」
・・・・・・はぁ・・・・・・なんかもう・・・・
「アンタ・・・・狙撃銃の使い方しってる?」
「えっと・・・これ狙撃銃なのか?」
「「・・・・・・・・・・・・」」
なんかもう・・・いいや・・・・
「・・・じゃあ次、撃って。」
「ほいほーい。連続でいい?」
「いいわ。」

「じゃ、フルオートで～♪」

『ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ』

「「・・・・・・・・・・・・・・」」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・ねぇナオヤ？アンタ・・・・・今何発撃った？」

「ん？十九発。残りの弾全部撃ったぞ？」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

こいつは・・・・・・そういや全部Rランクだったわね・・・・・整備も改造も一人でできたわね・・・・。

今この男は立ったまま片手でスコープものぞかずに肉眼でしかも20発も連射して最大で6200m先のプロペラまで狙撃したと言っているのだ。

鋼鉄破りは詳しくは知らないけれど・・・・・たしか20発も入ってなかったはず。つまり改造銃。いや・・・・・マガジンだけいじったのかもしれないが・・・。

「・・・・・・レキ。」

「・・・・・・・・全弾着弾しています。しかもすべてプロペラのまったく同じところに・・・・・。」

「・・・・・・・誤差は？」

「・・・・・・・・・・・・スコープを使って確認できるもので誤差・・・・・・・・・・・・ッ！？・・・・すべて・・・０です。」

「・・・・・・・・・・・・・・なんかもういいわ・・・・・ほんと・・・・・。」

なんかレキが・・・・目がうるうるしてきた・・・・・。あの子も結構頑張ってきたものね・・・・・それを目の前で素人があっさり撃ち破ったからね・・・・・・・。

「・・・・・ほら・・・レキ・・・・今だけ・・・私の胸貸してあげるから・・・・思いっきり泣きなさい・・・・・。」

「・・・・・・・（コク）・・・・・・ぅ・・・・・ぅう・・・・・」

つらかったね・・・・レキ。泣いていいよ・・・・・。・・・・・あたしもいっしょに泣こうかしら・・・・。

「え！？なに！？どうしたの！？なにかあった！？」

「（キッ）・・・・・」

「え！？なんで！？なんで俺睨まれてるの！？俺なんかしたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

・・・・あのレキが・・・泣いてさらには睨むなんて・・・・・珍しいこともあるもんね。

ガチャ

「おいアリア！事件・・・って・・・・ナオヤ・・・なにしたんだ？」

「え！？俺か！？やっぱ俺なのかぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ！？」

・・・キンジ到着・・・・・。

はぁ・・・・これからどうなるのかしら・・・・・。

第9話～事件～（後書き）

レキを泣かせてしまいました・・・・。あだ名はロボットレキだったのに・・・。
今後レキの変化に注意です！

第１０話～バスジャック～（前書き）

あれ？アリアの態度が緩和している・・・・
今回はちょっと短くなりましたー
では第十話、どうぞー

第10話～バスジャック～

～キンジ視点～

「はぁ・・・・はぁ・・・・はぁ・・・・」

息を切らしながら階段を開け上がり、屋上へつながるドアを開ける。
そこには・・・

「おいアリア！事件・・・って・・・」

「・・・・・ぐすっ・・・・・」

「お、おぉ！やっと来たかキンジ！！」

「・・・・はぁ・・・」

なぜかアリアの（ない）胸を借りて泣いているレキ。妙におろおろしているナオヤ。ため息をつくアリア。

「・・・・・なにしたんだ？ナオヤ。」

「やっぱり俺か！？俺が何かしたのか！？」

・・・・・・はぁ・・・細かいことはこれが終わってからきこう。
それよりも・・・

「おいアリア！事件だろ？早くしないと。」

「そ、そうだったわね。」

アリアがこのタイミングで事件のことを忘れるなんて・・・・いったい何があったんだろうか・・・・。

「ん、んん。事件はバスジャック！7時５８分発の武偵校行きのバスがジャックされたわ。」

「なに！？」

そのバスって俺が乗り損ねたやつか・・・クソッ・・・。

「それじゃ行くわよ！「待ってくれ！」なに？」

「情報が少なすぎる。もう少しないか？犯人とかの情報は・・・・」

「それはヘリのなかで説明するわ！早く乗って！・・・ほら、レキも。事件だからいつまでも泣いてないで。」

「（コク）・・・・」

「・・・・・・・」

あのレキが泣いている・・・・・。

レキは狙撃科（スナイプ）のＳランク武偵で、あまりにも感情と呼べるところを見たことがないので「ロボットレキ」というあだ名がついたほどだ。

そのレキが泣く程とはいったい・・・本当に何やったんだ、ナオヤ・・・？

～ナオヤ視点～

「で？犯人に関しての情報は？」

「今のところほとんどないわ。ただ、相手は武偵殺し。そしてやつのことだから、あのバスには乗ってないわね・・・。」

「じゃあどうやってジャックしているんだ？」

キンジが言う。まぁ俺は誰が犯人でどうやってるのかも全部わかるがな！キンジの疑問も最もだろう。普通、〇〇ジャックと言ったら、犯人が数人の仲間をひきつれて拳銃やらなにやらで脅して言う通りにさせるからジャックとなる。

その犯人が乗っていないなら・・・・

「いつもの手口よ。爆弾を仕掛けて、機械音声でどこからか指示を出しておどす。武偵殺しはそういう方法でジャックする。」

やっぱりな。ここまでは原作とほとんど変わっていない。俺がいること以外は・・・。

「・・・・アリア。お前、そのでこは好きか？」

「な、なによ、突然ね・・・。このでこはお気に入りよ！このよさがわからないならまだまだだね！」

まだまだとは何がまだまだなのだろう。

だが、あのでこがお気に入りというところも変わってなかった。しかしこのままいけばそれは・・・・

「・・・そうか。俺個人としては前髪おろしてもかわいいと思うんだがなぁ・・・・。」

俺はどっちかというとアリアの髪は下ろしたほうが好みではある。

「な、ななな、ななに言ってるのよ！こんな時に！！！」

「ん？お前の髪型の感想。」

「ふ、ふん！そそこまで言うならおろしてやってもいいけどね！」

「へ？あぁ、ありがとう？」

「ッ・・・・・・／／／／／／」

なんかアリアが真っ赤になった・・・・・・。

「ジ――――――・・・・・」

な、なんだろう・・・・レキがめっちゃこっち見てる・・・・・。あ、もしかして・・・。

「レキはその髪型で十分かわいいぞ？」

「ッ・・・・・・／／／／／／」

なんかレキまでアリアと同じ反応を・・・・もしかして雨にぬれて

風邪でも引いたのか？いや・・・・早すぎるだろ・・・。

「こ、この話はここまで！今は事件が優先よ！！」

あ、そうだった・・・武藤たちの命かかってるの忘れてた・・・・

やべぇ・・・

「とりあえず今からレキとナオヤは一度現場の近くに下ろすわ。そこから狙撃ポイントへ向かって！」

「分かった」

「（コク）」

そして俺とレキは近くのマンションの屋上に降りた。

正確には止まる時間がもったいなかったので俺がレキを抱えて飛び降りた。（といっても高さは５０ｍくらいあった）

レキがめっちゃ嫌がってたなぁー・・・・首振ってかわいかったなぁ・・・・・。あ、まだちょっと震えてる。

「レキ。バスを探そう。」

「・・・・・（コク）」

それから俺たちは街中を眺めてバスを探した。

が、はたから見ると二人ともただ突っ立って町を眺めているだけなのでまじめに探しているようには見えない。

と、レキが・・・・

「見つけました。」

というので俺もその方向をみると・・・・

「おぉ・・・あったあった。」

『何も見えないぞ?レキ、ナオヤ。』

キンジの声が聞こえてきた。

「あれだろ?今ホテル日航の前右折したやつ。中に武偵校の生徒が見える」

「(コク)」

『・・・アンタ達視力いくつよ

「左右ともに6.0です」

「左右ともに測定不能。」

『『は?』』

「?」

「だから測定不能。どこまで行っても見えるから教師陣があきらめた。」

『『・・・・・・』』

「・・・・・・」

「な、なんだよ」

『レキ、キンジ。気にしたら負けよ。』

『ああ、俺もそう思う。』

「・・・・はい。」

「？」

まあいいや。

『じゃあ行くわよ、キンジ！ナオヤ、レキ、後方支援頼んだわよ？』

「分かってる」

「はい。」

～キンジ視点～

俺とアリアを乗せたヘリはさっき報告があった通りのバスへ向かい、とりあえず、屋根の上に着地することができた。

「キンジ！乗客の確認！あたしは爆弾を探すわ！アンタも中で探して！あたしは外を探してみる！」

「わかった！！」

俺は窓から中に入った。

「き、キンジ！」

「よう、武藤。二時限目になる前に会っちまったな。」

「くそう。こうなるんならお前に席ゆずっときゃよかったぜ。」

「・・・・無事でよかった。」

「・・・・へへ。お前らしくねぇな。」

「お前は一応親友だぜ？心配しないほうがおかしいんだよ。」

「ありがとよ。」

「アリア、乗ってるやつはとりあえず全員無事だ。」

『そう、わかった。じゃあそっちで爆弾を探して・・・いや、いいわ。こっちにあった。』

「本当か！？じゃあ俺は・・・ッ！！！！みんな伏せろぉぉ！！！！！」

そこまで言ったところで俺は叫んだ。

ズガガガガガガガガガガガガガガッ

ズガガガガガガガガガガガガガガガッ
ズガガガガガガガガガガガガガガガッ
外に三台のオープンカーがＵＺＩを乗せて並走し、こちらに銃口を向けた。
「くっ・・・・・みんな大丈夫か！」
「キンジ！俺たちは一応全員無事だ！けど、運転手が肩をやられた！」
「くそ！！！！」
運転してたため伏せることができなかったんだろう。
バスは左車線に大きくずれていく。
避けた対向車がガードレールにぶつかって火花を散らしていた。
（クソッ！わからない、今の俺にはどうすればいいのかが・・・！！！！）
「む、武藤！運転を変わってくれ！」
俺は防弾ヘルメットを脱いで武藤に投げ渡した。
武藤はヘルメットを受け取りざまにかぶると傷ついた運転手を他の生徒たちと協力して床に下ろし、運転席に座った。

「いいけどよ！俺こないだ改造車がバレてあと一点しか違反できないんだぞ！」

「そもそもこのバスは通行帯違反だ。よかったな武藤。晴れて免停だぞ？」

「落ちやがれ！轢（ひ）いてやる！！」

ぐちぐち言いながらも運転してくれているところをみるとやはり武藤だ。肝心な時やってくれる。

俺は窓から外に出ていわゆるハコ乗りの状態で揺れに耐える。

急カーブの時一瞬片輪走行になったがどうやら中で武藤が生徒に指示を出して片方に寄ってもらったようだ。さすが車輌（ロジ）科優等生。

「アリア！大丈夫か！？」

「キンジ！」

アリアがワイヤーを伝って屋根に上ってきた。

「アリア！ヘルメットどうした！」

「さっきのＵＺＩの弾にブチ割られたのよ！あんたこそどうしたのよ！」

「運転手が負傷した！今武藤に代わってもらっている！その時に渡した！」

「なんでそんな無防備な状態で出てきたのよ！早く隠れ――――バカ！！後ろ！！！！伏せなさいッッ！！」

アリアが突然二丁拳銃を抜き、真っ青な顔で突進してきた。後ろを振り向くと今度はバスの前に位置取ったルノー（さっきのオープンカーの名前）がＵＺＩをこっちに向けてぶっ放すのが見えた。

銃弾が俺の顔めがけて飛んでくる。

（死んだ――――）

俺はそう思った。

第１１話～きっと！まだばれていないさ！～（前書き）

あれ～？キャラが崩壊していますね。・・・・はいすいません、もともとですね。
シリアスが書けない・・・・・。
では第１１話どうぞ～

第11話～きっと！まだばれていないさ！～

～ナオヤ視点～

「おっ！どうやら着いたみたいだな。しっかし・・・・」

俺とレキは屋上でいつでもサポートできるように見張っていた。

「何だあのルノーは・・・・なんでＵＺＩ積んでやがる。しかも無人て・・・・・。」

武偵校のバスの後ろには三台のルノーが迫っていた。しかもＵＺＩ付きで・・・・・。

「ちっ・・・・おいアリア、キンジ！」

『ザッザ――ザッ・・・・・ザザッ』

「？どうした？アリア！キンジ！！」

「どうやらジャミング（電波妨害）されているようですね。」

何！？いったい誰が・・・・ってアイツしかいねぇか・・・・。でも原作ではその時ジャミングされたなんて言ってないし・・・・。やっぱり原作と変わっているのか？

「・・・とりあえず様子見だ。危なくなったら援護するぞ。」

「わかりました。」

さぁて・・・あちらさんはどう出るか・・・・。

ズガガガガガガガガガガガッ

「あ」

ＵＺＩが撃ちやがった。

ババババンッ

俺は一瞬でメタルイーターを構え、狙撃で銃弾弾きを行おうとしたが・・・・

「ちっ・・・・数が多かったか。」

銃弾を反らせたのは数百発程度。四分の一ぐらいしかない。

しかも次々撃つせいで弾が本体まで届かなかった。

「・・・・・・・・今、なにをしたのですか？」

ん？わかんなかったかな？

「んぁ、えっと、今の五発で今ＵＺＩが撃ったうちの・・・・えと５００か６００くらい？を撃ち落としただけさ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まぁ気にすんな。どっちにしろ、たった四分の一ぐらいしか落と

せなかったんだ。お前にもいつか・・・ッ!?しまった!」

俺はのんきにレキに言いながらバスのほうを見ると、バスの後方にさっきのルノー以外で同じ車が１０台ほどついていた。

しかも半分はＵＺＩ、もう半分は・・・・

「なんで車にＲＰＧ（ロケットランチャー）３本ずつ積んどんじゃぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

そう、一台につき３本ずつＲＰＧを積んでいたのだ!!!

「レキ!お前はあとから来た５台のＵＺＩねらえ!俺はＲＰＧ落とす!」

「わかりました。」

俺は今持っていたメタルイーターともう一つ、同じくメタルイーターを取り出した。もちろん王の財宝から。

またレキがびっくりしてる。まぁそりゃそうだろうよ。一つですら大人が扱えないんだ。二つなんざありえんだろよ。

あ、深呼吸してる。あれか?俺だからとかそういう感じで納得しちゃった感じですか?

「ま、いいや」

俺はメタルイーターを両方構え・・・

「いくぞ!レキ!」

「はい。」

ズドドドドドドドドドドンッ

メタルイーターを同時に連射した。

～レキ視点～

（私は風の指示に従って動く。）

「私は一発の銃弾」

（いつものようにただ指示に従うだけ。）

「銃弾は人の心を持たない」

（なのに・・・）

「故に何も考えない」

（なのに・・・）

（なぜ・・・）

「ただ目的に向かって――――」

「――――飛ぶだけ。」

（なぜこうも心が動くのだろう。）

タァーン・・・・・タァーン・・・・・タァーン・・・・・

（気になる・・・・でも今は先に）

タァーン・・・・・タァーン・・・・・

一度弾倉を取り換える。

（こちらを片づけなければ）

タァーン・・・・・タァーン・・・・・タァーン・・・・・タァーン・・・・

（この疑問を片づけるためにも・・・・！！！）

タァーン・・・・・・・・・・

一台につき二発の要領で発砲し、すべての銃を破壊しつつ、タイヤをつぶして動きを止める。

「ふぅ～こっちは終わったぞー。レキーそっちはできたー？」

「目標、すべて無力化完了。こちらもすべて終了しました。」

私はこの人に会うまではなんの考えも持っていなかった。なんの感情も持っていなかった。心がなかった。

なのに、さっき会ったばかりなのに、ただ屋上で少し会話しただけなのに、私は変わった。

最初に会ってあのどこからともなくあの鋼鉄破りを取り出して、立ったまま、片手で、スコープをのぞかず、６ｋｍさきのプロペラに弾を当てた。

たしかに羽が大きいから当たりやすいかもしれない。偶然じゃないのかな?そう思った。きっとそのとき疑問を持ったから、

心が生まれた。そう思った。そしてよく見ると弾の着弾地点に関連性があるように思えて、調べてみると着弾地点がすべて同じだった。

つまり羽を取り外して重ね合わせたらまったく同じ位置に穴があるということ。しかも聞いてみたら狙撃銃を知らなかったらしい。・・・本当にこの人は何者なんだろうと思った。突然一般校から転校してきて、行きなりＲランクなんて言われて、しかもすべての科で。

私はこの人に興味を持った。それと同時に嫉妬した。今まで頑張ってきた。いろんな仕事を受けてきた。そして腕を磨いてきた。それなのに一般校から転校してきた素人に技術で負けた。悔しいと思った。すごいとも思った。

そのとき私はこれが感情だと知った。だんだんと目が熱くなって、何かがあふれそうになった。その時アリアさんが「泣いていい」と言った。泣くとは何なのかわからなかったけど。

アリアさんの胸を借りて、抱きしめられて、目から何かがあふれた時、（あぁ・・・これが涙なんだ。泣くということなんだ）とわかった。

ヘリのなかで髪型をかわいいと言ってもらった時、なんだか心がふ

わっとなった。これがうれしいってことなんだ。そうおもった。

私は心を手に入れた。まだまだ小さな心だけど・・・。きっとこの人といればもっとわかる気がする。そう思った。

風の命令には従う。けれども、私の”意思”でこの人について行ってみよう。そう決心した。

きっと私は・・・人になる。

～ナオヤ視点～

「ただ目的に向かって――――飛ぶだけ」

レキがそう言って引き金を引いた。

レキは標的を弾く時、詩のようなものを歌うらしい。というか原作で狙撃する前に言っていたやつだな。

まさか生で聴ける時が来るとは・・・・。

タァーン・・・・

どうやらすべて撃ち終わったようだ。ん?俺?とっくに終わったさｗｗｗ。

なんせ二つともフルオートだからな!!

「ふぅ～こっちは終わったぞー。レキーそっちはできたー?」

「目標、すべて無力化完了。こちらもすべて終了しました。」

よーし！あとは観察だ！っとそのまえに、たしかここでアリアは額に傷を負う。そして俺はそれを阻止できる。

なら当然、

「アリアに怪我、させたくねぇよな！！！」

「？」

まぁレキにはわからんだろうな。このあとどうなるかなんて。っとそろそろか・・・

「お？」

バスの上にキンジが出てきた。どうやらアリアの返事がなくて見に来たらしい。

アリアはバスにへばりついて・・・いや今上がってきた。

（来るか・・・・）

アリアが何か叫びながらキンジに突っ込んでいく。

キンジが振り向くと、バスの前方のルノーに乗っているＵＺＩが発砲する瞬間だった。

俺はそれに合わせて引き金を引く。

ドンッ

キンッ

どうやらうまくはじけたようだ。

ＵＺＩはアリアがかばいながら撃って倒したようだ。

「さぁてキンジ・・・あとはお前ががんばりな。レキ、爆弾を頼む。」

「わかりました。」

『ザッ・・・オヤ・・・・ナオヤ！』

「落ちつけキンジ！」

『アリアが撃たれた！！』

「証拠は？」

『へ？』

「アリアは撃たれてないぞ。俺が狙撃で弾を弾いたからな。多分、気絶しているだけだろう。」

タァーン・・・

ドカーン・・・・

レキが爆弾を狙撃ではずして、離れたところで爆発した。うまくいったようだ。

「ほれ。爆弾もどうにかなったぜ？」

『ま・・・マジか。』

「大マジだ。」

『た・・・助かった・・・・。サンキューな。』

「気にすんな？俺達は後方支援だからな。」

『・・・・あぁ。それじゃ、武藤たちに知らせてくる。』

「おう！」

そういってキンジは窓からまたバスの中へと戻って行った。

「さてっと・・・・俺たちも戻るぞ。」

「はい」

～きっとまだ正体がばれていない・・・・と思う人視点～

「くふっ・・・これであとは・・・・くふっ・・くふふふっ」

少女は笑う。

「あはッ！あはははははッ！！！これで・・・・これで理・・・

あぶないあぶない。つい癖で言っちゃうところだった・・・。」

少女はドジる。

「これであたしはあたしになる・・・・・！あたしは4世じゃない・・・あたしはあたしだ・・・・！！！！あはッ！あははははははッ！！」

少女は笑う。自分が自分になるために。自分であることを証明するために。笑い続ける。「アイテッ！」・・・・ドジも続く。

第１２話～後始末～（前書き）

今回ちょっと短くなっちゃいました。
では第１２話どうぞ～

第１２話～後始末～

～ナオヤ視点～

爆弾の解除?が終わった後、キンジは武藤たちにこのとこを告げ、バスは停車。負傷した運転手はすぐに病院へ行き、生徒は全員無事だったのでそのまま武偵校へ向かった。

が、アリアは気絶していたので一応病院へ行った。といっても検査をするだけなので特に何もないだろうが・・・。

どうやら結構衝撃が強かったらしく、なかなか目を覚まさなかった。検査の結果は問題なし。しばらくすれば目が覚めるだろうということだった。

俺とキンジとレキはそのまま武偵校へもどり教務科(マスターズ)へ報告をすませてきた。その後、普段通り授業を受けていたのだが・・・・

「・・・キンジ。いい加減元気出せ。アリアには外傷もなかったし大丈夫だろ。」

「・・・あぁ・・・わかってはいるんだが・・・。」

キンジが授業中・・・いや、戻ってきてからずっとこの調子で・・・・・・あぁぁぁぁ鬱陶しい!!!

「確かにあの時、お前が無防備に出てきたせいでアリアは気絶した。最悪死んでいたかもしれない。」

「うっ・・・・」

「でもなぁ、今の（・・）お前じゃ仕方ねぇだろ？」

「ッ！？お前！？いったいどこまで・・・・」

「まぁまぁ・・・人間失敗ぐらいいつでもすんだよ。それで誰かが傷つくかもしれない。自分が傷つくかもしれない。でもなぁ、一回経験しないとわからねぇだろ？どうして失敗したのか、どうやったら失敗しないのか、今回はそれがわかったろ。」

「・・・・・・」

「なら努力しろよ。いつまでもへこたれてんな。へこたれてたから時間がなくて努力できませんでした―はねぇだろ？俺も手伝ってやる。今回みたいにサポートもしてやる。」

「・・・・・・」

「一回経験しないとわからない、でもその一回の経験が危険、なら危険じゃなくなるようなサポートができるやつ連れてこいや。じゃなきゃお前自身が何とかしろ。」

「・・・・そうだな。」

「ふぅ・・・あれ？俺ってこんな説教系の説得キャラだったっけ？」

なんか最初はもっと違ったような・・・

「知らん。・・・まぁ、サンキュー。とりあえず俺は俺なりにやっ

てみるわ。」

「ん、そうかい」

「ところで」

いやーよかったよかった。丸く収まーーー

「俺のことどこまで知ってるんだ?」

ってなかったですねはい。

「えぇ~なんのことかなぁ~?」

「とぼけるなよ・・・さっき今の（・・）俺って言ってただろうが。」

「・・・・・・ん~~~~~」

はてさて、ここで俺のことに関してネタばれするべきかどうか。

きっとキンジのことだ。本気で嫌がれば多分引いてくれるだろう。

ただ・・・なんか隠し事って俺あんまり好きじゃないんだよねぇ・・・疲れるし。

でもこれいってもなぁ・・・・信じるかなぁ・・・

「・・・言いたくないなら無理には聞かないんだが・・・」

「ちょっと待ってねぇ～・・・・・むぅ～～～～～・・・・・」

悩む・・・悩みどころ過ぎる・・・・

・・・よし！めんどくさい！言っちゃおう！！！

「あーそうだな。実は――」

『ブツッ・・・あー・・・神野ナオヤ。ちょっと職員室に来い・・・・ブツッ』

「「・・・・・・・・・・」」

・・・ここの先生は礼儀とか知らんのかね。

まぁいいや・・・

「じゃぁこの話はまた今度～♪」

「あ、あぁ・・・急がないとしばかれるぞ？」

「大丈夫大丈夫！そんじゃ、またあとでね～」

「おう。」

そういって俺たちは別れた。

にしても・・・

「はてさて・・・用件は何でしょうなぁ・・・」

とりあえず俺は職員室へ向かった。

～キンジ視点～

ナオヤと別れてから俺は教室に戻り、普通に授業を受けた。放課後、特にやることもなく、考え事をしながら校内をうろうろしていた。

「はぁ・・・・」

俺はナオヤに助けられてばかりな気がする。

最近はいろいろと物を借りたりとか、武器の改造とか。

というか・・・

「アイツ本当に何者なんだ・・・」

一般校から来たかと思ったらすべての科でＲランク。超偵であり武偵でもある。身体能力や空間把握能力も尋常じゃないらしい（本人談）。

どこからともなく銃を取り出したり、大人ですら扱いに困る鋼鉄破り（メタルイーター）を片手で、立ったまま、しかも二丁も両手に持って、スコープものぞかず、６キロ先の羽根に命中させて、あまつさえ他の羽根の着弾地点と比べても全く一緒の位置を撃つとか・・・・あいついつから人間やめたのかなぁ・・・。

・・・・なんかほんと何者なんだ。俺のＨＳＳのことも知ってるみたいだったし。

・・・・・・・・・・なんかもう・・・いいや。アイツだからってことで納得しよう。

今は放課後で、人の気配などほとんど残っていない。

「そろそろ、見舞いにでも行くか・・・。」

アリア・・・もう起きているだろうか。

～ナオヤ視点～

「はてさて～俺になんの用があるのやら」

俺は職員室に呼び出された後、キンジと別れてそのままっすぐに職員室に向かっていた。

休み時間なのでそこそこひとが廊下にいる。

「おうナオヤ！」

今声をかけてきたのは髪の毛が重力に逆らっているであろうツンツン頭の武藤剛気。

「よう、にしてもよく生きてたなぁ、お前。俺バスがジャックされたって聞いた瞬間、線香と花を用意しようとしてたのに。」

「ヒドッ！なんで助けるとか無事を確認するとかじゃなくてまず葬式の準備しようとしてんだよ！」

「まぁそんなことよりさぁ。」

「そんなことあつかいかよ!?」

「・・・なにやってんだ?峰・理子・リュパン・４世?」

「ッ!?・・・・いつ気づいた?」

おー怖い怖いw突然武藤の声から理子の（・・・）声に変って低く話しかけてきた。

「いつって・・・最初から?」

「ふん・・・お前、何者だ?お前の過去の経歴については何も出てこなかった。存在自体が。」

まぁそりゃそうでしょう。こっちでの過去なんて何もないもの。

「さぁ?なんでだろうね~。」

そういった瞬間、理子がワルサーＰ９９を抜いてこっちに向けた。

が・・・

「遅いよ?」

向けた時にはすでに理子の後ろで銃を当てている。

「ッ!!・・・・・いつのまに!?」

「無理無理。この距離で撃たれても俺にはかすりもしないよ?」

「クッ・・・・・何が望みだ?」

「・・・・望み、ねぇ・・・?俺はみんなを助ける。お前も含めて(・・・・・・・)な。」

「ッ!?どこまで知っている?」

「全部!」

「・・・・・・・・・・・・・」

そろそろ行かんとしばかれるかなぁ・・・・・しかたない。

「じゃあこの話はここでお終い!俺呼び出し食らってるから。」

「え!?あ、ちょ」

「じゃ、次は飛行機で会おうか。理子。」

「・・・・プッ・・・・あはははははは!そっか!そうだね!じゃあまたね!ナオヤ(・・・・)!」

そして理子は最後に大笑いして帰って行った。

「さて、急ぐかな」

俺が急いで職員室へ向かうと・・・

「おそいわ!!いつまで待たせる気や!!」

先生がキレていた。

「すいません。いろいろとあったもんで。」

「まぁいいわ・・・・」

「それで?用件はなんですか?」

多分、今回の事件に関してじゃないかと思うんだけどなぁ・・・・

「そうそう、お前、退学。」

「・・・・・・・・・は?」

「だから、退学。」

第１３話～チート万歳～（前書き）

更新が遅れてすいません。
学校が始まったのでまた遅くなるのかと思います。
不定期更新ですが。

さてさて、ちょっと短いかな？と思ってしまった第１３話、どうぞ
ー

第１３話～チート万歳～

～ナオヤ視点～

「お前退学。」

「・・・・・は？」

「だから、お前退学。」

・・・ふむ・・・・・・

『ピ、ポ、パ・・・・・・ｐｒｒｒｒ』

「ん？どこにかけてんだ？」

「いえ。ちょっと先生の頭がアレになったみたいなんで精神科に「やめんか！！！」あ・・・」

先生に携帯を取られてしまった・・・これでは先生が助からない！！！！

「まだ大丈夫や！！！！アレな子やない！！」

「先生・・・やつらはみんなそう言うんです・・・」

そういって肩にポンっと手を置く。

「だからまだアレな子にはなってない！！！私はまだ大丈夫なんや

ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

先生・・・・・・

「認めたくないのはわかります・・・・。でもッ！！ここで認めないと助からないんですッ！！！」

「だぁぁぁかぁぁぁぁらぁぁぁぁぁぁぁぁ違うっていっとろうがッ！！！！！」

そんな・・・・・

「もう・・・・手遅れだったのか・・・・・。」

「キシャァァァァァァァァァァァァァァァァ」

「イヤーーーー本格的に頭が逝っちゃってるよう！！！」

「こらこら・・・・そこまでにせんか。」

他の先生が見かねて入ってきた。・・・よし。

「で、先生？退学と言うのはどういうことですか？」

「なんで私の時と態度が全然違うんだぁァァァァァァァァァァァァァァァァ」

そりゃあ・・・・ねぇ？おもしろいしｗ

「お前いつか絶対殺す！！！！」

「・・・・で？どういうことでせう？」

「・・・・ああ。それは」

「それはお前を試そうとしたんだよ！！！！」

・・・・つまり

「一般校から突如として入ってきた、実力が人間離れしすぎていてここ（・・）を一人で落とせそうなくらいの強さを持つ俺が、この学校をどういう風に思っているのか、敵対したりしないか、それを確かめるために退学の話を持ち出してどういう反応をするか確かめたかった、ってとこですかね？」

「そ、その通りだ・・・・・・」

おおぅｗｗおもしろいくらいに唖然としている。

まぁそれもそうだろう。突然退学といって混乱させ、どう思っているのかを聞き出そうとしたのに調子を崩され、たった一言「お前を試す」の一言だけでここまで当てられたなら信じられるまいｗｗｗくっくっくｗｗｗ

やべぇ・・・おもしろい！

「・・・・そこまでわかっているなら率直に聞こう・・・。お前はここと敵対する気はあるのか？」

？

「なぜに敵対せねばいけないんですか？こんなに楽しい学校で、キンジたちみたいな友達もいるのに敵対する必要がどこにあります？」

「・・・・・お前がイ・ウーのボス、シャーロック・ホームズと接触したのはわかっている。」

・・・シャーロックがそこらへんの人間にばれるようなへまはしないだろうから大かた、わざと見つかるように仕組んだな。

「お前はイ・ウーに入ったのか？」

「いいえ。入ってません。速攻で断らせていただきました。」

「？なぜだ？あそこにいればもっと強くなるかもしれんのに・・・。」

「いったでしょう？俺はこの学校が楽しいんです。ここの友達が好きなんです。わざわざ敵対なんかして失いたくないものがたくさんあるんです。」

それにやろうと思えばイ・ウーの技全部使えるしね？

「だから俺はここではっきりと言っておきます。俺はキンジたちやこの学校に敵対する気はありません。」

「・・・・・そうか・・・・よかった。」

なんだか先生たちが心底安堵したような、うれしそうな顔をしている。やっぱり教師は教師だ。嫌な奴だっているときはいるけれど・・

・・ここはいい学校だ。こんなにも生徒のことを考えてくれるいい教師がたくさん集まっている。

「それじゃ！俺はそろそろ行きますね？」

「ああ。」

ガラガラ

職員室のドアを開け外に出る。

「さぁて・・・・本格的におもしろくなってきた・・・・・」

誰にも聞こえないように・・・小さく小さく呟いた。

～教師～

「ふぅ・・・・・よかった。あんなのが敵じゃなくて。」

「おいおい・・・・敵じゃないんだから、あんなの呼ばわりはないだろう。生徒だぞ？」

「嫌です！！！あんなに弄ばれて・・・・・私のほうが年上なのに・・・。」

「素のしゃべり方が出るくらいだもんなｗｗ」

「うるせぇです！！！」

それにしてもあの子は本当に何者なんだろうか・・・・

Sランク武偵を軽くあしらい、人間離れした運動能力、たった一言漏らしただけで目的を見抜く鋭さ。

あのイ・ウーのボス直々のお迎えを断れる意思の強さ。あの時の盗聴では断った理由がめんどくさいだった・・・あの超人にめんどくさいって・・・・・はぁ・・・。

「本当に味方でよかった。」

きっとあの子が本気でここを落とそうとすれば数分で制圧できるだろう。一日あれば日本が落とせるはずだ。

「ですが、イ・ウーの行動には、今後、もっと気をつけねば・・・。あの子はとても優しい。きっとこちらの誰かが人質になればあちらにつくだろう。」

「そう、ですね・・・。それだけは何としても避けないと。あの子たちのためにも。」

今のところ、イ・ウーがどんな組織なのか、どのくらいの人数いるのかなどはわかっていない。どんな手段で来るかわからない以上、用心に越したことはない。

「私たちは今やれることを頑張りましょう」

「そうですね・・・・」

そうして私たちは自分たちの仕事に戻って行った。

～アリア視点～

「・・・・う・・・ぅん・・？」

あたしが目を覚ますとそこは知らない天井だった。

「・・・ここは？」

あたしは確かバスジャックで・・・・・

「ッ！？そうだ！？キンジ！？キンジはどうなったの！？」

たしかバスの上でキンジが無防備に出てきて・・・そしたらバスの前方・・・キンジの後ろにルノーが居て・・・・・ＵＺＩの銃口をこっちに向けてて・・・・キンジが気づいてなくて・・・・キンジに向けて・・・・・・・発砲を・・・・

「ッ！？・・・・ヤダ・・・・ヤダよぅ・・・・キンジぃ・・・・どこぉ・・・・？」

キンジがＵＺＩに撃たれてもし・・・・もし・・・死んじゃってたら・・・・

「あたしのせいだ・・・・無理やり連れ出したあたしのせいだぁ・・・・ヤダよぅ・・・・キンジぃ・・・・・」

そのときだった

すーっと音もなくドアが開いてそこから

「・・・アリア？よかった・・・・もうおきて「キンジぃ！！！」うぉ！？」

キンジが出てきた。ぱっと見どこにも怪我はなく、いつも通りのキンジが出てきた。

「ど、どうし「よかった！生きてたぁ・・・・キンジが生きてたぁ・・・・」・・・・心配掛けて悪かった。」

ほんとによかったぁ・・・

「よかったぁ・・・これであたしが罪悪感感じずに生きていけるわぁ・・・・」

「え！？そっち！？おい！ひどくねぇか！？」

「ひどいのはそっちよ！！！あんな無防備な状態でバスの上に出てきてッ！！！死んだらどうするつもりだったの！？」

「・・・それは悪かった・・・でもッ！お前もそうだ！あんな状態で飛び込んできて！！！弾が当たったら死ぬぞ！？」

「何よ！？助けたのにその言いかたは！？」

「・・・・そう・・・だな。悪かった。助けてくれてありがとう。」

「ッ！？・・・・なによ。素直ね・・・。」

いつもならさらに怒ってひどいこと言うくせに。

「でも、それでもだ。俺は無名の探偵科（インケスタ）、お前は有名なSランク武偵だ。期待のされ方が違う。それにお前にはあんな危険なまねはしてほしくない。」

「・・・はぁ・・・そうね、期待のされ方がちがうわね。正直、期待ならあたしよりもアンタのほうがされてるのよ?元Sランクの強襲科（アサルト）さん?」

「そんなわけないだろう・・・・」

・・・・自覚なしなのね・・・・・まぁいいわ

「まぁそんなことより・・・・痛むところはないか?」

「ん、特にはないわ。・・・っていうかあの後どうなったの?」

「ああ・・・それはなぁ」

――――――説明中――――――

「・・・・・はぁ・・・・つまりあの時の弾はナオヤが弾いてくれたのね?それでレキが爆弾をドラグノフで落としたと・・・・。」

「まぁそういうことだ」

「はぁ・・・・ほんと、いよいよ人間じゃなくなってきたわねぇ・・・・ナオヤ。やけにＵＺＩの撃った数と当たった数に差があると思ったら・・・数百発を撃ち落としたですって?・・・・なんなのよ、アイツ・・・・・」

「まぁ・・・ナオヤだからな。」

「そうね。ナオヤだしね」

もう他の人が何やっても驚かない気がするわ・・・。

「他の人が何やっても、もう驚かない気がするぞ・・・・」

おんなじこと考えてたみたいね・・・。

「「はぁ・・・・」」

ほんとにどうなるのかしら?

第１４話～お見舞い？～（前書き）

前回からかなり更新さぼってました。すいませんＯＴＺ
それでは遅れに遅れた１４話、どうぞ～

第１４話～お見舞い？～

～キンジ視点～

「さて・・・そろそろ帰るか。」

俺は放課後にアリアの見舞いに来ていたがだんだんと日が落ちてきたのでそろそろ帰ることにした。

「・・・じゃあアリア俺はそろそろ・・・」

「ちょっと待って。」

ん？まだ何か用事があったのか？

「・・・結局ナオヤはこなかったんだけど・・・なにかあったの？」

「あー・・・なんか先生に呼び出されてたぜ？」

「え？・・・あいつなんかやらかしたのかしら・・・」

「さぁ・・・・・？」

～ナオヤ視点～

「ふぅ・・・・・」

結局先生の退学発言はただ俺を試したかっただけか・・・あ、キン

ジにメールしとこっと・・・

にしても・・・

「イ・ウー・・・ねぇ・・・？・・・・めんどくせー・・・」

何であんな人外集団に入らなきゃいけないんだよ・・・・

「さて・・・次は確か・・・飛行機のジャックだったけか？うーん・・・・止めるべきか・・・・・」

でも止めるとなぁ・・・・原作の進行の妨げになるしなぁ・・・・

「でも・・・飛行機の中でアリアは死にかける訳だし・・・出来ればあんなめにはあってほしくないしなぁ・・・・」

俺なら止めれるけど原作とは違う方向に進んじゃうし、そうなると俺の原作知識が当てにならなくなるかもしれないし。

「・・・仕方ない。流れに任せよう！！！」

俺は知らなかった。この選択が悲劇を生むことになるなんて・・・。

～キンジ視点～

『ｐｒｒｒｒｒ・・・』

「ん？・・・おいアリア。ナオヤからメールだ。」

「なんて？」

えーっと・・・・

「『俺、なんか退学になるところだったらしい。』・・・・は？」

「へ？」

「「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」」

「ちょ！？なんだ！？どういうことだ！？やっぱあいつなんかしたのか！！！？？？」

「え！？ナオヤが退学！？ちょっとキンジ！！！他に何か書いてないの！？」

「他には『ｐｒｒｒｒｒ』またきた！？」

詳しいこと書いてなかったら直接会いに行かねぇと！！！

「えっと・・・『なんか試されたらしい。』・・・分かるかッ！！！！！」

「一体何があったのよぉぉぉぉぉ！！！！」

「くそッ！！こうなったら直接『ｐｒｒｒｒｒｒ』またきた！！！」

「で！？なんて書いてあるの！？」

「えっと・・・・『合格したみたい。退学せずにすむ』・・・早く

言えよ！！！！」

「はぁ・・・結局大丈夫だったのね・・・なんかもう良いわ・・・めんどくさい。」

何で先に言わねぇんだよ・・・あいついろいろと特別なんだからホントに退学になるのかと思ったじゃねぇか・・・・。

「まぁとにかく・・・退学にならなくて良かった・・・。」

「はぁ・・・何でこんなに疲れてんだろう・・・俺見舞いに来ただけなんだが・・・・。」

「あたしも・・・・たしか病院で休んでただけなんだけど・・・はぁ・・・・」

「「はぁ・・・・・・」」

なんかあいつがきてからため息が増えた気がする・・・・。

「とりあえず・・・帰るか」

「そうね・・・あたしももうすぐ帰れるみたいだし」

～ナオヤ視点～

「へっくしょんッ！！・・・・誰か噂してんのかな？」

うーん・・・風邪でも引いたかな？

「ていうかくしゃみの原因として先に噂が出るのはおかしいんじゃね？俺、自意識過剰？結構傷つくぜ・・・・」

用事も終わったしそろそろ・・・・

「アリアのお見舞いに行くか！！！」

・・・・ん？まてよ？

「たしか原作ではこのお見舞いの時にキンジとアリアがけんかしてたよな・・・・？」

そのせいで一回離れるけどキンジがアリアの傷を思い出してなんか悩んで、そして飛行機の時にまたくっつくんだったよな？

「俺が、アリアの額に弾が当たる前にはじいたから・・・・ここでけんかしてるともしかして絆復活イベントなし？アレ？俺フラグクラッシュ？もしかしてこれゲームオーバー？」

・・・・ふむ。

「やべぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？これでけんかしてたら絆復活なし！！飛行機でアリアが死ぬ！？俺が何とかしなくちゃ！！！っとその前に確認だぁぁぁぁ！！」

俺は病院へ全力で、そう全力で向かった。

つまり・・・・・

「着いた・・・・・はぁ・・・・・はぁ・・・・」

約３０秒くらいで着いた。

「ふ・・・ふはは・・・・さすがチートだぜ・・・・・」

「あ、あんたなにやってんの？」

「・・・？・・・おぉ・・・アリアか・・・・はぁ・・・いや、今学校から全速力で来たからな・・・・」

「ってあれ？あんたさっきまで学校にいたんじゃないの？学校からメールしたんでしょ？」

「そうだぞ？で、いろいろあって今急いで来たわけだ。」

「・・・・・はぁ・・・・そうね。ナオヤだもんね・・・・」

「・・？？まぁいいや。キンジはどこ？」

「えーっと・・・そろそろ来るんじゃない？さっき飲み物買ってくるって言ってたし」

「そっか・・・・アリア。おまえキンジとなんかあった？」

「・・？特には何もなかったわよ？」

「・・・・そっか」

どうやら俺の存在が結構影響してるみたいだな・・・。バスジャックの時もそんなに言い争ってなかったし、奴隷呼ばわりもしてない

し。

「・・・・？なにかあったの？」

「・・・いや、なにも。」

「・・・・あんたって一体何者なの？なにを隠しているの？」

「・・・・どういう意味？」

「いや・・・・なんだかこう・・・・特別な・・・そう、先の事を知っているような雰囲気があるのよ。」

「ッ！？・・・・気のせいだろ？」

「うーん・・・・気のせいじゃないような気がするのよねぇ・・・・今の反応とか？」

「・・・・おまえなら・・・・いいのかな・・・？」

「ん？なにか言った？」

「いや、なにも。それよりも戻ってきたみたいだぜ？」

どうやら話している間に戻ってきたようだ。向こうからキンジが走ってきた。

「ん？ナオヤも来たのか。もうちょっと早かったらおまえの分も買ってきたんだがな。」

そういってアリアに買ってきたジュースを一本投げ渡す。

「えー今から買ってこいよー。」

「自分で行ってこいよ！」

「えー・・・・めんどくさい」

「俺もだよ！つうか俺二度手間じゃねぇか！俺はパシリか！？」

「おう！」

「おまえ奴隷扱いすんなって言ってたじゃねぇか！！」

「奴隷とパシリは別物だッッッ！！！」

「ぐっ・・・・に、似たようなもんだろ！！」

な・・・・なに・・・？

「おまえ・・・誰かをパシるとき・・・奴隷のつもりだったのか・・・」

「え？・・・キンジ・・・そんな風に考えてたの・・・？」

「ちょ！？ちがッ！！アリアも信じるなよ！？」

「キンジ・・・・大丈夫よ？」

「よ、よか「あたしがちゃんと教育（ちょうきょう）してあげるから！！」いや！？

だから違うっていってんだろ!?なんで信じてんだよ!?」

「キンジ・・・今ならまだ間に合う。教育(ちょうきょう)してもらうんだ!!」

「なんでだよ!?俺が何をした!!!」

「さてアリア・・・今後のことなんだが・・・」

「無視か!?無視なのか!?」

「そうねぇ・・・・・とりあえずこの外見を・・・」

「俺の意見は反映されないのか!?てか外見は変える必要があるのか!?」

「そうだな・・・整形して・・・・性格も改変して・・・・性別も変えるか」

「もはやそれは俺と言えるのか!?いやだぁあ!!!女にはなりたくないッ!!根暗で昼行灯な女なんていやだぁぁぁぁぁぁぁああ」

「大丈夫だ!!!性格も教育(ちょうきょう)し直すから根暗も昼行灯も消えるんだ!!!!」

「そういう意味じゃねぇぇぇぇぇぇえええ!!!!」

ふぅ・・・・

「あーおもしろかった。」

「そうね。でももう飽きたわ。」

「そうだな」

「俺で遊んでんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇええええええええええええ！！！」

今日一番の心からの叫び声でしたとさ。

「でもおもしろかったよな？」

「そうね。おもしろかったわ。もう飽きたけどね、玩具(キンジ)で遊ぶのも」

「玩具と書いてキンジと読むなぁぁぁ！！！！」

「おぉ・・・・小説にでもしないと分からない表現を確実に読み切るとは・・・・おぬしやるな！？」

「何で俺こんなにいじられなきゃいけないんだよぉぉぉぉぉぉぉぉおおおお！！！」

あ、今日一番を更新した。

「やっぱりこれおもしろいな」

「そうね。これおもしろいわね」

「これとか言うなよぉぉぉぉぉおおおおおおお！！！」

うーん・・・・2番目・・・いや、3番目かな？

「なんの順番だ!?」

「おぉう!?つっこみキャラの特技、心を読む、が発動したようだな?」

「なんの能力だよ!?」

「うーん・・・なんかそろそろ飽きた。」

「そうね。そろそろホントに飽きてきたわね。」

「勝手に遊んで勝手に飽きたとか言うなよ!!!」

「うーん・・・なんか上手くオチがつけられ「ダメだ!!それ以上はいけない!!」・・・そうだな。なんかかなりメタな発言した気がする。」

「ねぇ?」

「「?なんだ?」」

「そろそろ帰らない?だいぶ暗くなってきたんだけど。」

「「・・・・・・・」」

どうやら玩具(キンジ)で遊んでいる間に「だから玩具って書いてキンジって読むな!!」・・・キンジで遊んでいる間に日が落ちてしまったようだ。

「キンジェ・・・心の中で話している間につっこみを入れるのはやめてくれないか・・・・」

「誰がキンジェだ!!なんとなくどう使いたかったかは分かるけどな!!!」

「わかるならそこにつっこまんでくれ!!」

「・・・そうだな。」

「いや、あのね?帰ろうっていう話なんだけど・・・・」

「「・・・・・・すいません・・・・」」

「いや・・・いいから帰ろう」

「そうだな。じゃ、帰るか。」

「ん、そうすっかな。」

そうして俺たちはやっと帰ること（オチをつけること）が出来たのだった・・・・。

オチが遅くなったのもぐだぐだなのをつけたのも作者だけどね!!!

作（ごめんなさい!!!ｏｒｚ）

・・・・あれ?今なんか変な電波を受信した気がする・・・・。

第１５話～冤罪～（前書き）

キャラ崩壊が進みました・・・・・
さて、それでは第１５話、どうぞ～

第１５話～冤罪～

～ナオヤ視点～

「ふぁ～あ・・・・よく寝た。」

今は朝７時。今日は日曜なので学校もない。そして・・・

「することもないっと・・・・」

暇なのでこっちに来てからのことを思い出して整理することにした。

「たしか初めてこっちに来た時は朝の８時過ぎだったっけ？キンジがＵＺＩに襲われる時間だったよなぁ・・・・」

最初は焦ったがアリアが助けることを思い出し、そのままスルー・・・・するつもりだったのだが。

何をどう間違えたのか神様が転生した時の設定に『今日から武偵校の転校生』というのが入っていたらしく・・・いや、それはよかったのだが時間がなかったという・・・。

そしてあわてて学校へ向かったはいいが、道端でＵＺＩ２５台の一斉射撃の対象にされるというまぁなんとも恐ろしい目に遭い、その瞬間神様が来て願いをかなえてくれたため、何とか生き残ることに成功。・・・したのはいいが願いのおかげで無駄にハイスペックになった・・・・。

そして何気にアリアに目を付けられた。キンジといっしょに奴隷扱

いもされた。・・・まぁちょっとアリアとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしたら治ったけどね！！

そのせいでさらなる原作ブレイクだ・・・多分これのおかげでキンジたちの仲が過剰に悪くなることはなかったのだろう。

そしてバスジャック事件。バスを追うルノーは１台のはずなのに３台まで増えていた。そしてアリアの額を掠るはずだった銃弾は俺が弾いた。よってアリアの額には傷がなく。どうやらそれによるケンカもなかったようだ。つまり仲違いすることがなく原作が進む。普通ならこれでいいんだがなぁ・・・・。

「とまぁ・・・・こんなところかな？」

うん・・・・もう終わっちゃった。

「神様からもらっちゃったからなぁ・・・・ＨＳＳモードと同等かそれ以上の頭脳・・・・・」

ちなみにこの思考、全部で約０．０２秒である。会話文除く。

「・・・・よし。外をぶらぶらしてこよう！！！」

普通は今後の対策とか練るんだろうけど・・・・俺はそんなことはしない！！！なぜならめんどくさいからだ！！！！

ということでとりあえずぶらぶらすることにした。

――――――そして現在俺はかなえさんと面会していた。

え？なんでお前が面会できるのかって？それはちょっと前にさかのぼる。

俺はとりあえず外に出てなんとなくで行く方向を決めてぶらぶらしていた。するとある曲がりかどを曲がったところでなんと・・・！！！

「・・・なにやってんのキンジ？」

「（ビクゥ）・・・・・な、なんだ・・・・ナオヤか」

キンジがストーカーをしていたんだ！！！！

「・・・・・・・キンジ、交番はこの先にあるから・・・・俺も付いて行くから・・・・な？」

「待て！？とりあえず話を聞け！！！お前絶対勘違いしている！！！そんな諭すような口調で言うなぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「本当に俺が勘違いしているのか・・・・？もし俺の予想があったらお前今度なんかおごれよ？」

「あぁ・・・！！」

「じゃあ俺の予想な、ふむ・・・休日、曲がり角でこそこそしているキンジ、その先にはアリア、・・・大方、お前がぶらぶらしているときにどっかでアリアでも見かけたんだろ。で、その後、だいぶ前にアリアに言われた『武偵なら自分で調べる』という言葉にでも影響されたかなんかでストーカーまがいの行動をとり、今に至る・・・とかじゃねぇの？」

「な・・・なんでそこまでわかるんだ?お前心を読む力でもあるのか?」

「ふっふっふ・・・・・企業秘密だ」

というか実際は原作知識である。せこい?HAHAHA何を言っているんだ。知っているから知っているんだ。第一、すでに原作がかなり壊れている以上、どこまで・・・と言うかどのくらいキンジたちが原作と同じ心境なのか調べておきたかったしな!!

「っていうか当たってるんだな?よし!約束だぞ?おごれよ?ちゃんとおごれよ?」

「クッ・・・わかったよ。」

「――――っていうかお前普通にストーカーじゃねぇか。」

「・・・・・・・ハッ!!」

「今気づいたのかよ!!・・・とりあえず俺いい医者知ってるから、な?大丈夫だ・・・絶対助かる・・・クッ・・・」

「やめろ!そんな変なフラグを立てるんじゃねぇ!!俺が手遅れになるじゃねぇかぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!」

いやね?キンジ君?きみ、もうすでに現在進行形で手遅れだからね?

「嘘だ!!!!」

「勝手に心を読まんでくれるかな？そしてそのひぐ○しネタは男が使うんじゃないッッッ！！！！」

はぁ・・・なんでこんな残念な奴になってるんだろう？いや・・・・まだ大丈夫だ！まだ教育すれば助かるはずだ！！！

「っていうかアリアを見失っちまうぞ？」

「あぁ！？しまった・・・・・！！」

はぁ・・・なんでこんな残念なやつ（ｒｙ

「しゃあないなぁ・・・ついてこい案内してやる」

「へ？お前どこに行ったか知ってんの？」

「あぁ・・・何の目的かも知ってるよ」

そういえば・・・今日がかなえさんとの面会日だったのか・・・・

～アリア視点～

「ん？・・・・・・」

おかしい・・・さっきまであたしの後をつけていたキンジの気配がなくなった・・・・。

いくらＥランクとはいえ、尾行くらいはできるはず。あたしが本気でキンジを撒く気だったのならいざ知らず・・・あたしはキンジを案内するくらいの気持ちで尾行を許していたはず。

「・・・・まさか事件にでも巻き込まれたんじゃぁ・・・・・？」

・・・・最近かなり物騒になってきているためか、すぐ考えを事件に結び付けようとしてしまう・・・・とはいえ本当にその可能性も捨てきれない。

まだ武偵殺しもつかまってないし。

「はぁ・・・・仕方がないわねぇ・・・・ちょっと戻ろうかしら？」

あたしはちょっとだけ来た道を戻って行った。

～ナオヤ視点～

「さて・・・と、本命も来たみたいだし俺はここまででいいかな？」

俺は先に進んでいくうちに近づいてきたアリアの気配に気づき、道案内もここまでにすることにした。もともと、アリアたちといっしょにかなえさんと面会する気もなかったのだし。

「じゃぁキンジ。俺はここまでだ。」

「は？」

「ほれ前を見らんか！」

そういって前を指差した。キンジがそれにつられて前を向いた瞬間、俺はキンジの前から姿を消した。

「?前ってどういうことだ?っておい?ナオヤ?どこに行ったんだ?」

お前の後ろにいるんだけどね!!そう、前からは消えたのだ!!前からはね!

つまり極限まで気配を消して、後ろに回り込んだのだ!!皆はやったことがないか?友達の後ろに回り込んでこっちを振り向こうとするたびにその動きに合わせて反対方向へ回り、常に相手からは見えない位置に動き続けるという遊び!!!それを俺は今、現在進行形でかつ、俺の持てる力をすべて使ってやっているわけだ。ぷぷぷ・・・・俺を見失って不安になってるキンジ(笑)・・・・ぷくく・・・・。

っとそろそろアリアが来るな。俺は退散するとしま「・・・キンジ、なにやってんの?」・・・やべ引くのが遅かった。

「いや・・・さっきまでナオヤがいたんだがなぁ・・・・突然消えたんだ」

「何言って(シー・・・・・・!!!!)・・・・・はぁ・・・いいわ」

俺はキンジにはばれないように、しかしアリアには気づいてもらえる位置からみなさんよく使う人差し指を立てて唇にあてる『黙ってて』のジェスチャーを全力で行う。

その甲斐あってかなんとか黙ってもらえたらしい。

「ん?どうしたんだアリア、そんなに後ろばっかり見て」

そういってキンジが後ろを振り向くとそれに合わせて俺が前へ移動する。

「・・・・・はぁ・・・・・よくわかったわ。」

「?.?.?」

ぷくく・・・・・キンジ（爆）おもしれぇ・・・ぷぷぷ・・・・

「っていうか何やってんのよこんなところで?」

「へ!?いや!?何となくぶらぶらしていてな!」

「・・・・はぁ・・・・どうせあたしの後をつけてきたんでしょ?」

「げ!?」

「・・・・・いいわ、見せてあげるからついてきなさい。」

「・・・・わかった。」

「あとそこのナオヤも」

「は?」

げ!?なぜにばらした!!!

「さっき言わなかったじゃん!!なんで今になってばらすんだよ!!」

「さっきのはきまぐれよ。・・・・それにアンタにも知っておいてほしかったしね？」

「俺は知ってるぞ？」

「は？なにをよ」

「かなえさんとの面会だろ？」

「ッ！なんであんたが・・・！！・・・・・はぁ・・・・そうね・・・・そうだったわね・・・・ナオヤだもんね。」

「・・・・なんかすっごく不愉快な納得のし方してないか？」

そして俺たちはかなえさんのいる刑務所へ向かった・・・・。

そして着くや否や面会が始まり、原作通りかなえさんを乱暴に扱った警察官にアリアがキレて、かなえさんがなだめ、アリアは泣きながら走って行き、キンジはそれを追いかけた。

俺はと言えば・・・・・・

「・・・・そういえば俺、見たことのある能力が使えるんだったよな。遊〇王のカードも効果があるのかな？『洗脳ブレインコントロール』発動。」

すると突然、目の前の警察官二人が止まった。

「え？え？え？」

かなえさんはびっくりしてうろたえてばかりである。・・・・やべぇ・・・かわいい。

「おぉ効いてる効いてる。・・・・そのままやさしくこっちに連れてこい。」

警察官二人はさっきの扱いとは打って変わってやさしく丁寧にかなえさんを連れてきた。

「かなえさん・・・・でいいですかね?」

「え?えぇ・・・・いいですけど・・・・あなたは一体何を?」

「ちょっとだけ、この人たちを洗脳しただけです。」

「へ?え、えぇ?・・・・・」

「それでですね?あなた、イ・ウーのメンバーに冤罪着せられてますよね?」

「え?えぇ・・・・ってなんであなたがそのことを!?」

うーんやっぱり怪しまれるよなぁ・・・・・そうだ!

「まぁ俺ですから。」

「意味がわからないです!!」

あれ?おかしいな・・・・

「アリアたちはいつもそれで納得しているんですけどねぇ・・・・・？」

「あ、あぁ・・・・・あなたが・・・・ナオヤさんですか・・・・・なるほど・・・そうですね。はい、納得しました」

「へ？・・・・・そうっすか」

なんだかまたすっごく納得のいかない納得の仕方された気がする・・・・俺がいいだしといて何だけど

「・・・・・まぁいいや、それであなたはどうしたいですか？」

「え？どう、とは？」

「だから、このまま刑が執行されていいのか、それとも無実を証明したいのか。」

「・・・・今は、まだ・・・・・」

「ですよねぇ・・・・・」

大体この返答が来ることはわかっていた。なぜなら彼女は、アリアのためにも今、冤罪がなくなるのはよくないからだ。

アリアはSランク武偵で、勘も鋭く戦いのセンスも素晴らしい。だが、まだ弱いのだ。一人では戦えない。イ・ウ―のメンバーとやり合うなんてできないのだ。

アリアは体内にヒヒイロカネがある。だからこそ、イ・ウ―のメンバーに狙われやすい。今はまだ、シャーロックがいるから大丈夫だろうが、時間がたてばアイツはイ・ウ―からいなくなるだろう。そしたら今度はアリアが狙われ放題になる。だからこそ、今アリアを鍛えなければいけないのだ。だからここで、イ・ウ―を利用する。かなえさんに冤罪を着せたのはイ・ウ―のメンバーだ。当然アリアはかなえさんの無実を証明するためにイ・ウ―を捕まえようとするだろう。だが一人では厳しい。そこで面会する時に言うのだ。『パートナーを見つけろ』とな。パートナーが見つかれば、アリアは今よりももっと力を引き出せるだろう。そしてそのパートナーがキンジなのだ。かなえさんは知らないだろうがイ・ウ―にはカナがいる。カナはキンジの兄、詳しいことはここでは割愛しよう。そしてシャーロックのほうはかなえさんの考えも知っているだろう。だからカナを引きこんだ。すべてあの原作の通りに収めるためにな。

「・・・あなたはどこまで知っているのですか?」

突然の質問、考え事をしていた思考は現実に引き戻される。

「どこまで、ねぇ・・・さぁ?それはわかりません。けど、とてもたくさんのことを知っています。」

「そう・・・ですか。」

「はい。」

「アリアを・・・あのキンジと言う人といっしょに守ってはくれませんか?」

「?なにをいってるんです?」

「・・・・？」

そんなこと・・・・・・

「言われなくても守るにきまってるじゃないですか！」

「ッ！！／／／／・・・・・ハッ！！！・・・・わ、私は何を・・・・相手は女の子いくらボーイッシュでも女の子・・・・・ぶつぶつぶつ・・・」

ふむ・・・・最後のところが途中まで聞こえてしまった・・・・・・

「あのー・・・・・」

「ひゃ、ひゃい！！あぅ・・・な、なんですか？」

ブハァァァァァァアアア！？

ヤバい・・・これはヤバい・・・可愛い・・・マジで可愛い・・・は、鼻から・・・・愛が・・・・溢れる・・・・・

「だ、だいじょうぶですか？」

「は、はい・・・なんとか。グフ・・・そ、それでですね？」

「はい」

「俺、男です。」

「・・・・はい？」

「だから、女の子ではなく男の子です。」

「Ｏｎｅ　ｍｏｒｅ　ｐｌｅａｓｅ？」

「なぜ英語なのですか？しかもＯｎｅ　ｍｏｒｅ　ｔｉｍｅ　ｐｌｅａｓｅ？のほうがいいと思いますよ？そして俺は男です。」

「・・・・・そ」

「そ？」

「そうだったんですか！？よかった～わたしそっち系の趣味に芽生えたのかと思ったじゃないですか・・・・もう！！でもよかった～わたしノーマル！！！」

「？？？なんの話です？」

「い、いえ！なんでもないんです」

・・・まぁいっか。※主人公は鈍感と呼ばれる部類に所属しています。

「それじゃ、俺はそろそろ」

「わかりました」

「最初の位置に最初のポーズで戻れ。」

そういうと警察官二人がやさしくかなえさんを連れて、俺が洗脳するまでの位置に、元の態勢で戻った。

「それでは、あ、そうだ。時間はさっき止めてあったので怪しまれることはないですよ？」

「え？・・・・そう、ですか」

そう、実は最初にテイ○ズのミ○トの技である『タイムストップ』を使っておいたので時間については問題ないのだ。しかもデメリットの対象を選べないというのもなくしたのでかなえさんにだけ、効かないようにしていたのだ！！

「それでは戻しますね。ではまた。『オフ』」

俺がそういうとかなえさんはまた引きずられていった。

さっきのオフと言うのは俺が使っていた能力をすべて無効化、つまりそのままのとおりオフにしているわけだ。

ただしこれはオフにする効果が選べない。といってもまぁ選んでオフにしたけりゃそういう風に操つりゃいいのだがめんどくさいときに有効である。・・・やべぇ俺最強（笑）。

そして時間も洗脳もオフにし、俺は帰って行くのだった。

外伝～テイルズオブファンタジア～（前書き）

いやぁ～・・・・なんとなく書きたくなってしまいついやってしまいました。
それでは初！外伝、どうぞ～

外伝～テイルズオブファンタジア～

～ナオヤ視点～

「ふぁ～・・・ん？・・・・・あれ？」

俺が起きたのは知らない場所だった。

「・・・・・あれ？俺・・・確か昨日・・・かなえさんに会って、家に帰ってそれで・・・」

寝たはず、という言葉は続かなかった。なぜなら・・・

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ドスンッ！！

「ぐえっ・・・・・・」

ペショッ・・・

上から何か？が降ってきて俺は潰されてしまったからだ・・・・

「あいたたた・・・・・もう・・・また飛ばされちゃった・・・・・」

「・・・・あの」

「へ？・・・・・あ、ご、ごめん！！」

そういって上から降ってきた人はあわてて俺の上からどいてくれた。

「ごめんね～、全然気づかなくってさ～」

「い、いえ・・・大丈夫です。・・・って、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！」

「へ！？な、なに！？」

「あ、ああ、あなたは・・・もしかして？ロンドリーネさん？ロンドリーネ・E・エッフェンベルグさんですか！？」

「え、えぇ・・・そうだけど・・・・どこかで会ったことあったっけ？」

「あ、い、いえ・・・・ちょっと風のうわさで。」

そう、この人はロンドリーネ・E・エッフェンベルグ。テイルズオブファンタジアで出てくる（正確には本家の後から出た作品）キャラクターの一人だ。・・・・ということは。

「まさか・・・・なぁ・・・・？」

「？何か言った？」

「あ、いえ、こっちのことですのでお気になさらずに。」

「うん？・・・・そうだ。まだあなたの名前を聞いてなかったね。」

「え?あ、俺は神野ナオヤといいます。」

「ジンノ・ナオヤ?変わった名前ね。」

「あ、こっちだとナオヤ神野になるんですかね?多分。」

「ってことはナオヤって呼べばいいかしら?」

「はい。・・・それで?なぜに空から?」

「あー・・・えっとねぇ・・・。」

そして俺はあらかたの事情を聴いたのだが・・・・

「つまりそのダオスに会いたいけど会う前に飛ばされてしまうと。」

「うん。」

「ふむ・・・・」

といって悩むふりはしているけど正直、原作をプレイしたこともあるし、ほとんど知っている。

「・・・じゃあ俺も一緒に旅してもいいですか?」

「え?・・・・うーん。」

「だめ・・・ですかね?」

「えっとね、ずっとは無理かなー・・・あたしはダオスのところに

行くわけだし。かなり危ないからね。」

「あ、それなら大丈夫です。俺、相当強いですから。」

「へー・・・・」

「む、信じてないでしょ。」

「まぁ・・・そりゃねぇ。その見た目じゃ・・・ねぇ?」

ですよねー・・・思いっきり女っぽい見た目に出会ったばかりで信じるに値する情報も足りず、しかもここはそう強い魔物もでないからどのくらいの強さかもわからない・・・うーん逆の立場だったら俺も信じねぇだろうなぁ・・・

「んー・・・じゃあ、とりあえず様子見ってことでどうですか?」

「・・・いいけどなんでそんなにあたしとの旅にこだわるの?」

「えー・・・それはですねぇ・・・あまり人にはお話しできない諸事情が・・・」

「ふーん・・・・まぁいっか。わかったわ。じゃあこれからよろしくね、ナオヤ?」

「はい、ロンドリーネさん」

「あたしのことはロディでいいよ。あと敬語も。」

「わかり・・・わかったよ、じゃあ改めてよろしく。ロディ。」

「はいはーい♪」

こうして俺は帰り道を探すべく、ロディと旅を共にすることにしたのだった。

実際問題、俺一人では通貨もわからず、土地勘もない（ゲームを眺めるのと実際に中で生活するのはかなり違うのだから）。そこでラッキーなことにロディに出会った。

「うん！ラッキーラッキー♪」

「ん？何が？」

「いや、こっちの話だよ」

うん、ロディにかなり怪しまれてる。

「ねぇロディ。」

「ん？なに？」

「ここからどこに行くの？ていうかここどこ？」

「え？ナオヤは場所知っててここにいたんじゃないの？」

「あーそれがね、なんかロディと似た状況。」

「え？」

「いろいろあって俺も飛ばされたんだ。しかも全然知らないところだよ？ここ。」

「ふーん・・・じゃあこの辺でいちばん近い町にでも行く？」

「・・・そうする。」

「多分ここはあたしの知り合いが住んでる町の近くの森じゃないかなぁと思うのよ。」

「へぇー・・・そりゃまた運がいいな。」

「そうね。とりあえずそこで宿を確保して、あなたの実力でも見せてもらおうかしら。」

「へいへい。」

そういうと俺たちは森の出口？へ向かって歩いて行った。

～クレス視点～

「チェスター！！！そっちに行った！！」

「任せろ！！！食らえ！”紅蓮”！！」

チェスターが特技の紅蓮を放ち、近くに迫っていた、チャイルドボアの一匹を仕留めた。

「クレス！！そっちにでかいのが行ったぞ！！！」

「はぁぁ！！！”魔神剣”！！！」

僕のほうに向かってきた、チャイルドボアの親と思われるボアに特技の魔神剣を放ち、一気に突っ込む。

「はぁ！！てや！！せい！！”飛燕連脚”！！！」

そのまま三連撃をたたきこみ、とどめの飛燕連脚。

ドスンッ・・・・

ボアをなんとか仕留めることができた。

「ふぅ・・・大物だな。」

「そうだな。これだけあれば、きっとみんな喜ぶ。」

「あぁ、それじゃそろそろ――――」

『カーンカーンカーン・・・・』

「ッ！！これは！！！」

「俺たちの村のほうからだ・・・・！！！」

「急いで戻ろう！！！」

「あぁ！！！・・・無事でいてくれよ・・・！！！アミィ・・・・！！！」

～ナオヤ視点～

『カーンカーンカーン・・・』

「ッ！！！これは！！！」

「・・・村のほうで何かあったみたいだね・・・どうする？」

この鐘の音は・・・まさか！！！

「ちょっと・・・？」

「ロディ・・・今、何年かわかるか？」

「え？え、えっと・・・多分アセリア暦４３０４年だとおもうよ？」

「・・・・しまった・・・・。」

この年代にクレスの村の人たちはすべて殺されるんだった・・・・！！！

「させるか・・・・・！！！」

「え？何？」

「ロディ・・・俺は行く。どうする？ついてくるとかなり危ないぞ？」

「・・・行くよ。クレス達の故郷だもん。助けなきゃ。」

「わかった。」

「じゃあ急いで「いや、待って。」どうしたの？」

「ロディ、手をつないでくれ。」

「へ？何を言ってるの？」

「いいから早く！！時間がない！！！」

「わ、わかった」

俺の能力のなかにある一度見たことがある力を使えるという能力。
これなら・・！！！

「いくよ。『テレポート』――――」

「え？――――」

ヒュン！！！

その音とともに俺たちはその場から消えた。

～クレス視点～

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・・」

「はぁ・・・・はぁ・・・・はぁ・・・・」

僕たちはひたすらに森のなかを走っていた。

さっきの鐘は何か非常事態が村に起きた時になるように準備していたはず、つまり今、村で何かたいへんなことが起こってる!!!

（無事でいて・・・・父さん・・・母さん・・・・!!!）

「・・・・はぁ・・・アミィ・・・・無事でいてくれ・・・・!!!」

アミィっていうのはチェスターの唯一の肉親である妹さんで、チェスターにもよくなついている。だからこそ、本当に無事であってほしい・・・!!!

「はぁ・・・はぁ・・・・見えてき・・・・ッ!!!」

そこで見たのは・・・・

「なんだ・・・・こりゃ・・・・・ッッッ!!!!アミィ!!!!!」

村が・・・・燃えていた。

チェスターは一目散に駆け出した。

「父さん!!!母さん!!!!」

そういう僕も父さんと母さんが心配で仕方なくて、走り出していた。

そして村の近くまで行くと

「誰かまだいる！！！」

「行くぞ！！クレス！！」

急いで村のなかに入ると道場のところにたくさんの人が集まっていた。それを取り囲むようにさらにたくさんの黒い鎧を着た騎士のような人たちがいた。そして武器を構えてものすごい形相でその黒い騎士たちを見据える父さんと、その隣にはこの村では見かけない格好の二人の剣士がいた。

～ナオヤ視点～

ヒュン！！

「着いたか！！」

「え？な、何今の・・・！？」

「後で説明するから・・・今は一刻も早く・・・！！！」

俺達は村の中、道場の前に出ていた。

『クッ・・・卑怯な・・・』

『クックック・・・これならお前も手が出せないだろう？なぁ、ミゲール・・・。』

『クソッ・・・マリアを放せ！！！』

『クックック・・・無理だな・・・行け！！！！』

やばい・・・！！！もうクレスの母さんが人質に取られているらしい！！このままだと抵抗出来ずに殺される・・！！！！

「さぁぁぁぁぁせぇぇぇぇぇるぅぅぅぅぅかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

俺は全力で叫びながら道場のなかに突撃した。

「誰だ！？」

「くそがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

俺は即座に王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）を開き、中からエクスカリバーを取り出す。

「チッ・・・邪魔をするなぁぁぁぁ！！」

敵が一人飛びかかってくるが・・・遅い。

相手が剣を振り上げた時にはすでに俺はエクスカリバーを振りぬいており、切られたほうは血しぶきを上げ絶命する。

「なっ・・・！！くッ引けぇ！！村の人間を人質にしろ！！！」

「させるか！！”オーバーリミッツ”！！！！」

やはり見たことがあるものは使えるらしく、無事にオーバーリミッツもできた。

その瞬間、騎士の全員が切りかかってくるが・・・無駄。

「閃け！鮮烈なる刃！！」

俺は一人に切りかかり、振りぬいた瞬間その場から消え、また別のところから現れる。

「無辺の闇を鋭く切り裂き！！仇為すものを微塵に砕く！！」

また消え、他のやつを切り裂き、さらに別のものを切り裂く。

「決まったぁ！！！漸毅狼影陣（ざんこうろうえいじん）！！！」

そのセリフと共にその場にいた騎士をすべて切り裂く。

ちなみにこれはテイルズオブヴェスペリアの主人公の技だ。

「・・・・な、何が起こった・・・？」

「大丈夫ですか！！！」

「あ、ああ・・・・なんとか。助かった、礼を言わせてもらう。」

「いえ、それよりもさっきのがボスですか？」

「あぁ・・・しまった！！奴め・・・村の人を人質にするつもりか・・・・！！！」

「ッ！！クソが・・・・！！」

どうする・・・・・・そうだ!!とあるシリーズの超能力なら・・・・!!!

「人質は何とかできます。それよりも避難を・・・!!」

「いや、マリアは避難させるが私は戦う!!これでも剣の腕には覚えがある!!」

うーん・・・原作のミゲールさん確かに強いし・・・・心強いな!

「わかりました。それではまずそちらの方を奥に連れて行っておいてください。俺は外へ向かいます。」

「わかった・・・!頼んだぞ・・・旅の方よ!!」

そう言ってミゲールさんはマリアさんを連れて奥へ行った。

「クソが・・・覚悟しろよ・・!!!」

俺はとてつもない怒りを覚えながら急いで外へと向かった・・・。

外伝～テイルズオブファンタジア～（後書き）

気が向いたら・・・というか結構な確率で続き書きます。

外伝？～テイルズオブファンタジア～（前書き）

前回の続きで～す。
では、どうぞ～

外伝？～テイルズオブファンタジア～

～マルス・ウルドール視点～

「クソッ・・・なんなんだやつは！！！」

突然、私たちの前に現れ、あと少しで仕留めることができたミゲールを助け、人間とは思えない速度で私が連れてきていた半数の騎士をすべて倒した。

「あと少しだったのに・・・・・！！！」

私は急いで道場を出て残りの騎士の元へ向かった。こちらへ来る前に先に建物を破壊させ、村人を一か所へ集めるように指示していたのだ。

「おい！村人はどこだ！？」

「こちらに集めています！」

「早く案内しろ！」

「はっ！」

騎士のひとりに指示し、急いで村人を集めていた場所へ案内させる。

そして広場のようなところへ着いた。

そこには数十人の村人が集まっていた。

「これで全員か？」

「はっ！村のなかにいるのはこれだけと思われます！」

「わかった。持ち場へ戻れ。」

「はっ！」

騎士は駆け足で元来た場所へ戻って行った。

「おい！貴様ら！村の人間はこれだけか？」

『・・・・・・・・・』

「答えろ！！」

「・・・・こ、これだけだ」

「他はアンタが向かったところにいるはずのミゲールさんとマリアさんだけだ！！」

「・・・・そうか。」

そういうと私はおもむろに近くにいた子供を一人捕まえ、首筋に剣を当てた。

「・・・今のは聞かなかったことにしてやる。村人はここにいるやつだけか？」

そんなはずはないのだ。さっき戦ったやつがいるはずなのだから。

『・・・・・・・・』

「ここに黒髪の剣士はいないかと聞いてる!!」

『・・・・・・・は?』

「は?」

「・・・いや、黒髪の剣士はいないが?」

「そ、そんなはずはないだろう!黒髪の凄腕女剣士がいるはずだ!!」

「いや・・・え?でも・・・・・やっぱいないなぁ・・・?」

・・・どういうことだ?今の反応は明らかに本当に知らないやつの反応だ。

ならやつはどこから現れた?私の騎士団の監視の目をくぐってあの道場の中にまで到達できるようなやつがそうそういるはずがないのだが?

ならやつは別の村から来たということか?それとも旅のものか?いや、このあたりに他の村はない。あったとしても遠すぎてあんなに早くこれるはずがない。

旅人だとしてもあんなにも強ければ噂になるはずだ。

「・・・・・どういうことだ?」

私は思いもしなかった。空間も時間も超えてこの時代のこの近くに来る輩がいるなどとは。

～ナオヤ視点～

「ロディ！！」

「ナオヤ！？大丈夫だったの！？」

俺は道場の入り口で突入の機会をうかがっていたロディに声をかけた。

「ああ！！さっきそこから黒いよろいのやつが出なかったか？」

「うん。さっき一人出たよ？追って後ろから襲おうかとおもったけど、村の人が人質になってるみたいで手が出せないんだ・・・。」

「ちっ・・・やっぱりか。ロディは中にミゲールさんとマリアさんがいるから守ってて！そしてここから離れないで！！」

「わかった。」

「俺はこのまま人質を救出してくる。その時にこっちに来るときに使ったアレをやって皆をここに飛ばすから事情を話して置いて！！」

「わかった。・・・気をつけて。」

「わぁってる！」

俺はそこまで用事を伝えると全力で村のなかを走りまわって人を探し始めた。何度か黒騎士に見つかったけど、声を上げられる前に気絶させた。

ちなみにさっき相手を斬ったけど誰も殺してないよ?

そしてある広場に出るとそこには・・・

「・・・・・どういうことだ?」

小さな女の子を人質に取ったまんま、首をかしげているマルス・ウルドールがいた。

「・・・・なにやってんだ?」

わざわざ人質を取って首を傾げ続けるマルス。

だが突如、マルスは剣を振り上げた。どうやら、他にもいろいろと聞きたかったが嘘をついている・・・と思ったらしい。

「・・・・・・」

俺は無言で鋼鉄破り（メタルイーター）を”王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）”のなかから取り出し、マルスの持っている剣に照準を合わせる。

マルスが剣を振り下ろそうとした瞬間、１０Ｍあるかないかぐらいの近距離から撃ちだされた弾丸が正確にマルスの剣を弾き飛ばし、マルスは衝撃でしびれた手をさすっている。

そしてその瞬間、小さな女の子はマルスの股間を落ちていた石で殴

った。普通なら鎧を付けているので問題ないのだがどうやら女の子は股を鎧がカバーしていない下から殴ったらしい。

マルスが股間を抑えて悶えている。かなりのクリンヒットらしい。
俺も無意識のうちに内股になっていた・・・・。

そしてマルスが立ち直り、女の子に掴みかかった。

俺はそのタイミングで座標移動(ムーブポイント)を使い、村人全員を道場の前にテレポートさせた。

そして・・・

「な、何が起こった!?」

「はっはっは・・・・いい様だな!!」

「お、お前はさっきの!!」

俺は軽く罵倒しながらマルスの前に登場する。

「き、貴様・・・!!何をした!!」

「教える訳ねぇじゃん?そいじゃな!」

俺は元来た道を少し戻り、隠れて転移、道場の前に戻った。

どうやらちゃんと全員移動できたらしく、さっきと変り映えのない人たちがそこでロディの説明を受けていた。

そこへ・・・・

「おい！！貴様ら！そこで何をしている！？さっき広場に連れて行ったはずだ！！」

招かれざる客がやってきた。

「うわぁ！見つかった！」

村の人たちはどうやらおびえている。

そこで俺の登場！

「いやね？あなたたちトイレに行かせてくれないからね？トイレに行ってただけだよ？」

「トイレなら一人でいいだろう！？」

「いやね？みんな我慢してたんだよ？だから連れションだよ～。終わったら戻るから。」

「そうか、ならいい。だが気をつけろ！そんな人数で行くから他の人たちに迷惑がかかるんだぞ？今度からちゃんと数人に分けて行きなさい！」

「は～い、気をつけま～す。」

「よし、ならいい。」

「「「「「「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・いいのかよ

！？」」」」」」」」」」

皆唖然としていた。

外伝？～テイルズオブファンタジア～（後書き）

・・・あれ？なんかおかしくなった。

第１６話～転生者～（前書き）

初めて？少し？卑猥な表現が出てしまいました。
こういう表現が好きではない方はすいません。

では久しぶりの本編、第１６話、どうぞ～

第16話～転生者～

～???視点～

「・・・・ここは？」

俺が目を覚ますとそこは見たことのない天井だった。

「・・・・生きているのか？」

ちょうど数分前に俺は車にひかれて死んだはずなのだ。

「・・・・・夢か？」

だとすると今のこの状況は何なのか。死んだのが夢だとするとここは一体どこなのだ。

それともこれも夢なのか？

「いや、違うぜ？ケケケ・・・・・」

考えているといかにも悪魔ですとでも言いたげな笑い方をする男が出てきた。

「ここは生と死の狭間・・・つまりアンタは一度死んでいるわけだ。」

・・・・・ってことは？

「テンプレのごとく俺がミスして死んだとかそういうのじゃねぇぜ？」

えぇー・・・・

「俺が故意にやったんだ」

「何してくれる！！！！？？？」

まだ！ミスしたとかならまだ！！！妥協できる！！でも

「故意にやったとかこの野郎！！！！」

「ケケケ・・・細かいこと気にすんなよ」

「気にするわ！！！てか細かくねぇよ！！！」

俺はまだやりたいことがたくさんあったんだよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！

「たとえば？」

「まだ小説やアニメを最後まで見てない！！ゲームをクリアしてない！！！！付き合ったこともない！！！！×××したこともない！！！！せめて！！！！せめて俺の息子を一度でいいから使ってみたかったッッッッ！！！！」

俺はまだ２４だ！！！！！童貞なんだ！！！！せめて３０まで生きて魔法使いになってみたかった！！！！

「ふーん・・・・・じゃあ転生してみる？」

「ふーんて・・・・・ってえ？」

「だから転生してみる？」

ＷＨＡＴ？？？

「転生したくないの？」

「するーーーーーーーーーーーーーー！！！」

「はいはいじゃあどこがいいの？」

「緋弾のアリア！！！！」

「ほいほい、能力もいいよ？チートがいいんでしょ？」

さすが！！よくわかってらっしゃる！！

「しんた「あ、ごめん身体能力とかは少し上げるとかが限界なんだわ。特殊能力もあんまりなのは難しいかな。」・・・・先に言ってくれ」

となると・・・そうだ！！！俺はまだこの息子を使ってないんだ！！！！！！

「精力強化！！！！！」

「ぶっ！！！」

あ、悪魔が吹いた。

「な、なんてことを願うんだい・・・・まぁいいか」

なんかよかったらしい

「じゃあ催眠術！」

「うーん・・・あんまり強いのは期待しないでね？」

さすがにきついのか・・・・

「じゃあそれに加えて俺の意思で相手を欲情させる能力！！」

「・・・・まぁいいけどさ。できるのは触っている相手のみね。」

「そして快楽の虜にする能力！！」

「・・・・もう最低だね」

何とでもいえ！俺はアリアやレキたんとむふふなことをするんだッッッ！！！

「・・・・もういっそ悪魔にでもなってみるかい？」

「いろいろとめんどくさそうなんでいいです。」

「そうかい。で、他にはいいのかい？」

「オッケーさ！・・・・これでアリアたんとレキたんを・・・・むふ・・・・・むふふふふふ・・・」

「・・・ノクターンに乗せたほうがいいかな？」

「ん？なんかいったか？」

「いや。それじゃ送るよ。」

「おｋｗｗ」

「それ」

・・・・・・・・・・

「ここはテンプレ通りなんかいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃいいい！！！」

穴から落ちました。

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

目が覚めると白い天井だった。

「う・・・ん？」

「お、目が覚めた？」

「・・・ここは？」

「病院さ。あんたが道端に倒れてたから運んできたんだ。」

「へ？」

話を聞く限りどうやら人気の少ない道に俺は倒れていたらしい。そこを偶然通りかかったこの人が助けてくれたとのこと。

「すいません、助かりました。」

「いいって、気にしなさんな！ところでなんであんなところに倒れてたんだい？」

「それは・・・」

俺は少し気の毒に感じたが本当のことは話さず、適当な嘘をでっちあげておいた。

「なるほど・・・で？これから行くあてはあるの？」

「ええ、まぁ一応。」

「そう。」

他の人のところで厄介になるとあまり自由が利かなくなりそうだからなぁ・・・・・

「わかったわ。それじゃ、あたしはこれで帰るわね。あ、お金はもう払ってあるから気にしないで。」

「すいません、ではお言葉に甘えさせていただきます。」

そして特に体に異常が見られなかった俺はそのまま退院し、武偵校へと向かった。

（ぐへへ・・・・・礼儀正しくするのは社会の常識～）

そう、礼儀正しく見えたがこの男、実は話している間じゅうずっと卑猥なことばかり考えていたのである。

ようはさっきのはうわべだけで感謝など一切していなかったのだ。

（ぐへへ・・・・アリアたんレキたんまっててねー・・・・すぐに俺が堕としてあげるからねー・・・・・）

俺は結構あっさり武偵校を見つけるとまず、

「かわいい女の子を探そう！」

（そして本当に性奴隷にできるのか試さないと・・・・でへへへ・・・）

屑な思考を始めた。

そして目の前には早速かわいい女の子が！！！

（結構かわいい子見っけ・・・・）

原作では見たことがない子なのできっとモブキャラだろう。

（早速一人目だ・・・・えへへ・・・・）

「あのー・・・・ちょっといいかな？」

俺はその女の子に話しかけた。

「はい。なんですか？」

「ここらへんでちょっとコンビニ探してるんだけど・・・・迷っちゃって。」

「あぁ、それでしたら・・・・」

彼女と眼が合う、その瞬間催眠術をかける。

「ぁ・・・・・ぅ・・・・」

「ちょっとついてきてくれる？」

「・・・・・はいぃ・・・・・」

どうやらうまくかかったらしい。

（げへへ・・・・このままおいしくいただくか。どうせ小説のなかのキャラだし、モブだし、一人や二人どうでもいいよなぁ）

俺は裏路地に行き、調教を始めることにした。

～ナオヤ視点～

「ん～・・・・あれ？ここは・・・・」

俺は確かかなえさんとの面会の後、家に戻って飯食って寝たはず。

寝ているということは夢か・・・・もしくは

「ひさしぶりじゃのう・・・・」

「やっぱりか。久しぶりですね。神様。」

やっぱり神様と会う時の特別な空間だった。

「でも、たしかこっちに干渉できないんじゃ？」

「いや、それは何とか直したんじゃが・・・・ちょっとな」

「・・・なにかあったんですか？」

「いままでの干渉できなかった間に、どうやら悪魔の一匹がこっちに干渉したらしくての。」

え？最高神と呼ばれる人が干渉できないところに悪魔が干渉できちゃうの？

「いや、今回は特別な例でな。まぁ詳しいことは話せんのじゃが・・・。」

「いえ、いいです。それで？なにがあったんです？」

「それがの・・・」

神様の話によると、神様陣営が干渉できなくなっている間に悪魔が干渉してしまい、別世界で人を一人殺してこちらに連れてきたらしい。

しかも・・・

「そいつはの・・・特に犯罪は犯してないんじゃが・・・・心と考え方が腐っておっての・・・・最悪、人を人とも考えないやり方を平気でやるようなやつなんじゃ。」

「でも、まだ手を出してないんじゃ？」

「元の世界ではまだ良心があったようじゃがの・・・こっちに来た時に、小説だからいいや、とかいう作りものとしてとらえる考え方になってしまっての。」

・・・・・・

「しかももらった能力は・・・・精力強化と催淫効果、催眠術じゃ・・・」

「！！！！」

「どうやらそいつはこの世界に生きているものを性奴隷にでもするつもりらしい。しかも二次元だから、作りものだからと思っているからの・・・・最悪なんじゃよ」

「・・・・それで？」

「そいつが何かしたら捕まえるか・・・最悪殺してもらいたい。」

「・・・・・・」

「大丈夫じゃ・・・・殺したのであればそいつがこっちに来たことからなかったことにする。」

「・・・・・・」

「・・・・・・・頼めるか？」

「・・・・あぁ。アリアたちに手を出したら・・・・ただじゃおかねぇ・・・・・・！！！！」

「そうか・・・捕まえた場合は心のなかでわしに呼び掛けてくれ。対処する。」

「わかった。」

「・・・気をつけるんじゃぞ・・・・」

「あぁ・・・・」

そこで俺の意識は途絶えた・・・。

～クズ野郎視点～

（本当にうまくいった・・・・・）

今俺の目の前には生まれたままの姿で部屋に突っ伏しているかわいい女の子が一人。

目はうつろでかなり興奮しているようだ。

俺は催眠術をかけた後、路地裏に連れ込み、強姦。その後、何かに取りつかれたように俺を求め始め、さすがに不味いのでこのこの部屋に来たというわけだ。

「もっとぉ・・・・もっとほしいよぉ・・・」

（ぐへへ・・・・本当に人形みたいだな。）

今日はここに泊まり、一晩中しっかりと調教してやった。

（次は・・・・アリアたんとレキたんを・・・・あんなふうに俺のものに・・・・げへへ）

朝になり卑猥な妄想にふける。

そして女の子に朝食を作らせ、それをたべて外に出る。

すると・・・・アリアたんと遭遇した！！！

（何たるキセキ・・・このまま調教するか・・・げへへ）

「あのー・・・・すいません、ちょっといいですか？」

昨日と同じ手口で話しかける。

「え？あ、はい。何かご用ですか？」

（こっちを見た・・いまだ）

「実はですね・・・」

そのタイミングで催眠術を使う。

「・・・？・・・・ぅ・・・・・・ぇ・・・・？」

かかった。

「ちょっとついてきてもらっていいかな？」

「はいぃ・・・・」

そういうとアリアたんがうつろな目で付いてくる・・・・・やばい・・・興奮する！！！

俺はアリアたんをそのまま家に案内しようとしていた。

～ナオヤ視点～

「ん～・・・・・朝か・・・・・」

俺は起きてすぐに支度をすませ、外に出る。まだ7時にもなっていないので軽く見周りのようなものだ。

「他の転生者ねぇ・・・・・」

俺のように基本的に原作を見守る気はないんだろうなぁ・・・あんな能力もらってるわけだし。

「さて・・・」

俺は軽くランニングをしながら住宅街を走っていた。そして約４０分後、アリアを見つけた。正確には・・・どこかうつろな目をして見慣れない男の後をついていくアリアを。

「・・・まさか！！」

俺はすぐに気付いた。あれが転生してきた男だと。そしてアリアは催眠術をかけられている。かなりマズイ・・・・！！！

俺はあとをつけた。そして男は家についたのかカギを取り出し、ドアを開けてアリアを連れ込んだ。

「くそ・・・!!!やっぱりか!!!」

俺はすぐさまその男に飛びかかった。

「まて!!!アリアをどうするつもりだ!!!」

~転生したクズ野郎視点~

俺はアリアたんを家の前に連れてきて、鍵を開け、中に入れようとしていた。その時、

「まて!!!アリアをどうするつもりだ!!!」

邪魔ものが現れた。俺はすぐさま飛びのき、相手を確認する。

「・・・知らない顔だな。モブか?」

いや、モブにしてはなんだか親しい呼び方だったな。

「アリア!!こっちに!!!」

その男が呼びかけるが反応がない

「無駄だ。聞こえやしない。」

「やっぱりそうか・・・一応聞く。アリアをどうするつもりだ?」

「調教して俺の性奴隷にするにきまっているだろう？」

「・・・ッ！！てめぇ・・・・」

「・・・どうやらお前も転生者のようだな。なんで好きなようにこいつらを使わない？」

「・・・・使う？」

「お前ほどの力があれば犯すも奴隷にするも簡単だろう？」

「・・・・ギリッ」

「けっ・・・偽善者かよ。こんな作り物の命。いくらでも壊せばいいじゃねぇか。どうせ二次元なんだしよう。」

「・・・・・屑が・・・・・」

「あん？」

「屑がっつってんだよ。作り物の命？何言ってやがる・・・・こいつらは正真正銘生きてんぞ・・・！！！！今を必死に生きてんぞ！！！！！作り物なんかじゃねぇ！！！確かに小説で作られた物語かもしれねぇ・・・・・けどなぁ・・・・こいつらはしっかり生きてんだよ！！！！！自分でちゃんと考えて・・・・自分で答えを出して、選んで、悩みながら・・・・！！！！必死に生きてんだよ！！！作り物なんかじゃねぇ！！！こいつらは本物だ！！！！！」

「はっ・・・・さすが偽善者。そういう言葉を並べるだけならいっちょまえか・・・。」

俺はそのタイミングで催眠術をかける。

「・・・・？」

「気かねぇよ。」

「・・・・なに・・・！？」

ちっ・・・・いくら女顔とはいえ男をやりたくはねぇな・・・・・

「しかたねぇ・・・死ね」

俺は一瞬で駆け出す。どうやらやつもチートと呼べる能力をもらっているようだがかんけぇねぇ・・・俺の世界ではこいつらがチートと呼ぶ部類の強さは普通だからな。

「・・・・・」

俺は連続でパンチや蹴りを繰り出すが・・・・

男は無言で、避ける避ける避ける・・・・

「ほう・・・・やるじゃねぇか。」

「・・・・俺を本気で怒らせたことを後悔しな・・・・・・！！！」

そういうと男は突然、ＮＡＲＵＴＯが使う印のようなものを両手で結んだ。

～ナオヤ視点～

・・・・今回は本当に頭に来た。

人を人とも思わない行動、考え方。

ゆるせない・・・・・・！！！

「ほう・・・・やるじゃねぇか。」

この男、どうやらもともと身体能力がチート並みのようだ・・・・・・

なら・・・！！！

「・・・・俺を本気で怒らせたことを後悔しな・・・・・！！！」

俺はアニメＮＡＲＵＴＯで使う忍術、多重影分身の術を使った。

するとあたり一面に俺俺俺・・・・・・

こりゃまずいな・・・

「〝封絶〟」

と、突然周りの時間が止まった。

「うまくいったか・・・・」

そして俺は・・・・・・

「多重影分身の術。」

分身した状態でさらに分身した。

原作のほうではやっているとこは知らないがどうやら俺はできるらしい。

しかもＭＰやチャクラ、魔力と言ったエネルギー的なものを俺は無尽蔵に生み出せるらしく、限界がない。

先に１０００人ほど呼び出していた分身がさらに分身。つまり・・・・１０００×１０００＝・・・・１０００００００人である。

そして俺が編み出したオリジナルの技。

「”フルショット・パーティー”」

これはアサルトライフルや拳銃、サブマシンガンや狙撃銃をすべて呼び出し（ひと種類につき１００丁はある）、一斉射撃を行うというものである。そしてそれは一人当たりの人数で、今は・・・１０００００人はいる。つまり・・・

「・・・うそだろ？」

１０００００×１００×約５０＝・・・５０００００００丁の銃がすべて一人に向いているのだ。

しかもご丁寧にすべてかさなる位置には配置されていない。

そして放たれる弾の合計は・・・・めんどくさいからもういいや。

「・・・・アリアたちを作りもの扱いした罪・・・・・払え。」

そして一斉射撃が始まる。

「あ、ちなみに非殺傷設定って知ってる？死なないけど痛みだけがある奴。この銃ぜーんぶ・・・非殺傷だからね？楽しんでね〜♪」

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああ」

うわ・・・・俺が考えといてなんだけどこの技・・・・鬼畜すぎるわ・・・・・もう弾が多すぎてあの男がどこにいるか全然わかんない♪黒いカーテンだね♪あはは

「・・・・・・やめ」

俺がそう声をかけると真ん中で男が倒れていた。

俺は王の財宝のなかに手を突っ込み、鋼鉄破りを引っ張りだした。

「最後にしんで償え。」

俺は引き金を引こうと・・・・・して引けなかった。

「やっぱり・・・・殺したくはねぇなぁ・・・・・」

俺は銃を下ろし、神様に呼び掛ける。

（おーい、捕まえたよ）

『おー、よくやってくれた』

そう聞こえた瞬間、男は消え去った。

『これでやつは地獄に落ちたぞ。・・・それとすでにひとり被害にあっておったが、なかったことにした。』

（そうか・・・ありがとう）

『気にするな。じゃが・・・今回は地獄に落としたせいでなかったことにはできんぞ？』

（いいさ・・・そんなに時間がたったわけでもない。）

『そうか。ではわしは戻る』

（はいはーい・・・）

そこで神様の気配は消え去った。

「さて・・・」

俺は分身をすべて消し、封絶を解く。

「アリア・・・おーい。」

「ん・・・？あれ？あたしなんでこんなところに？」

「いや、知らんけど・・・遅刻するぞ？」

「へ？・・・・あぁ！！じゃ、あたしは先に行くわね？」

そういうとアリアは走り去って行った。

「・・・俺も行きますか。」

こうして日常は無事に守られていく。

第17話～ルパンルパーン・・・・あれ？ザ・サードだっけ？～（前書き）

更新遅れました・・・すいません。試験があるので時間がとれませんでした。
というか風邪ひいた・・・はい、どうでもいいですね。

ではでは17話、どうぞ～

第17話～ルパンルパーン・・・・あれ？ザ・サードだっけ？～

～？？？視点～

「お宝はいただいていくぜ！じゃぁな～とっつぁ～ん！」

「くそう！！まてぇ～！！」

「次元！たのむぜぇ！」

「任せろ！」

次元が帽子を押さえて車の窓から上半身を出し、後ろから追いかけてくる車のタイヤを狙って発砲する。

「のわぁぁぁぁ！おのれ次元！逮捕してやる！」

「俺だけかよ！」

するとさらに周りには大量のトラックが囲んできた。

「くぅ・・・この数は無理だ！」

「五ェ門！」

「招致！」

五ェ門が車から飛び出し（走行中なんだけどね）トラックに切りかかる。

「てぇぇぇやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

一瞬でトラックはばらばらになり、後ろへと転がって行った。

「また・・・・つまらぬ物を切ってしまった。」

「いいから戻ってこーい！」

そして数分したころには追いかけてくるのは銭型のとっつぁんの運転する車だけになった。

「まてぇぇぇ～～～～！」

「しつこいぜ！とっつぁん！」

その時、

「お、おいルパン！！！前・・・前見ろ！！」

「ん・・？なんだぁ？」

数十メートル先の地面が光っていた。

「なんか・・・・やばくね？」

「あぁ・・・・俺もそう思う。」

今走っているのはトンネルで、しかも一方通行で道が狭く、車が一台通るのがぎりぎりなんていうトンネル。

その一本の道を端から端まで埋め尽くすように丸く光る地面。

「しかたねぇ！！！このまま突っ込むぜ～！」

「っておい！！」

そしてその光る地面の上を通ろうとした時、

「・・・ってあれ？なんで止まってらっしゃるの？」

車が光っている部分の真上で停止したのだ。

ブレーキを踏んだ訳でもないし、そもそもブレーキを踏んだ瞬間完全に停止するようなつくりにはなっていない。

「・・・どゆこと？」

「・・・・・さぁ？」

その瞬間、突然の浮遊感。

さっきまで光っていた地面がなくなっていた。つまり・・・・

「・・・・・・落とし穴？」

「・・・・・・マジで？」

「「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？？？」」

ちなみに五ェ門は無言で落ちて行った。

～ナオヤ視点～

今日の授業も終わり、すでに放課後。

「さぁてと・・・・なにをするかなぁ・・・・・」

暇なのだ。こっちに来てから結構暇なのだ。面倒事が何もないのはいいんだが・・・・・

「なにもないのもなんだかなぁ・・・・」

「じゃぁなにか事件でも起こそうか？」

「・・・・やめてくれ・・・・・お前が起こすとめんどそうだ。理子」

理子が現れた。

「ぶぅ～ひどいよ～」

「ていうかお前、まだやることがあるんじゃないのか？」

「・・・・やっぱりお前は危険だ」

驚いた顔をしたかと思ったら突然裏の顔になる理子。

「・・・いったいどこまで知っているんだ？」

「ん～・・・・だいたい？」

「・・・・お前はいったい・・・・」

「まぁ・・・・俺だからな。」

「ナオヤだから・・・・ねぇ・・・・・」

そして理子はまた表の顔に戻ると

「くふふ・・・・そうだね。ナオヤだもんね」

アリアたちがよく使っているなんだか不愉快な納得の仕方をしているときに使う言葉を言った。

「ブルータス・・・・お前もか」

「だれがブルータスよ。」

「お前だ理子。」

「なんでよ」

そんなたわいのない会話をしながら歩くこと数分。

「な、なにあれ？」

突然目の前の空間が丸く光りだした。

そして・・・・

「うわぁぁぁぁぁあ」

「ぎゃぁぁぁぁぁ」

「・・・・・・・・・・」

車に乗った変な三人組が出てきた・・・・・って!!!!

「・・・・アンタらがなんでこっちに!!!!!」

「あいててて・・・・ん?なんだ坊主。」

「いてて・・・・どうした次元・・・ってあれ?ここどこだ?」

「無事か?」

「おう五ェ門。俺の車以外は何とも・・・・あぁ・・・・また壊れちまった」

「な、なに?なんなの?今の・・・ねぇ、ナオヤ?」

「・・・・なんで理子といっしょにいるタイミングで・・・・狙ってやってんのか?」

「ねぇったら!!」

「お、おあ?なんだ?」

「おい、アンタら、ここがどこかしらねぇか?」

「理子、ちょっと待っててくれ。・・・・えーっと・・・・・アンタは次元大介さんだったかな？」

「なんで俺の名前知ってんだ？」

次元さんが身構える。

「そう警戒せんでくれ・・・・で、そっちが石川五ェ門さんで・・・・最後が・・・・ルパン三世さんであってるよな？」

「なっ！！！」

理子がめっちゃ驚いた顔してる・・・・お前の祖先ではあるんだがな・・・・ちょっと違うんだよなぁ・・・・。

「なんで俺たちの名前知ってるかわ知らんけど・・・・とりあえずここどこ？」

「ここは、日本の東京だ・・・・っていってわかるか？」

「なっなに！！！それは本当か！？」

「俺たちはさっきまでロサンゼルスにいたはずだぞ！？」

「ふむ・・・・」

この驚きようから多分嘘はついてない。そして名前に間違いがなかった。こっちのルパン三世はルパンじゃないリュパンなんだ。つまり・・・・俺のもといた世界にあった、―ルパン三世という物語か

ら《・・・・・・・・・・・・》来たということになる。あいにくそっちは原作知識がないから詳しくはわからんが多分あってるだろう。そしてさっきロサンゼルスにいたという。そしてここは東京。でもこの世界では一瞬で長距離を移動することはできんだろう。となると別世界から飛ばされたという考え方のほうがいいだろう。俺という実例がいるんだから。つまり何らかの方法でルパン三世の世界から緋弾のアリアの世界に飛んだということだろう。・・・・にしても・・・・

「なぜにこの三人なんだ・・・」

「なんかいったか?」

「いや、こっちの話です」

「それより坊主。今の話本当なんだろうな?ここは本当に日本なんだな?」

「えぇ・・・・でもあなた方の知る日本ではないです。」

「?どういうことだ?」

「えっと・・・・すまん理子。ちょっと待っててくれ。」

「わ、わかった」

「えっとですね・・・・まず、あなたの名前はルパン三世で間違いないですか?」

「あぁ・・・あってるが?」

「この世界はたぶんあなた方のいた世界よりもかなり後の世界になります。」

「は?なんだ?ってことはここは未来か?」

「いえ、ちょっと違います。あなたはルパン三世です。でもこっちではリュパン三世なんですよ。」

「「「・・・・・・は?」」」

「つまり・・・あなた方のいた世界とは別世界です。」

「ちょっとまて・・・なんだ?・・・・つまりここは異世界で、俺たちがいた世界からすると未来に当たるということか?」

「はい。すごい理解力ですね。」

「信じられるか!!!」

「ですよねぇ〜・・・・でも実際この世界にはもう銭型警部も峰不二子さんもいませんよ?」

「なんだって?」

「それどころかあなたたちは・・・というかこの世界であなたたちに当たる人物はすでに死んでいます。」

「・・・・・・」

「あ、それともう一つ、この世界で泥棒は止めたほうがいいです。」

「・・・どういう意味だ?」

「あなた方のいた世界とはレベルが違います。この世界では武偵といって武装した警察のような人がごろごろいます。かくいう俺もそうですし。しかも一部の人間は人間と言っていいか不安になるほど人間離れしたやつもいます。五ェ門さんの斬鉄剣も全く通用しない人物もいます。次元さんと同等かそれ以上の射撃技術を持っている人もごろごろいますよ?」

「なんだと!?五ェ門でも歯が立たんのか」

「信用できないなら俺とやってみますか?」

「随分と舐められたもんだなぁ・・・・どうする五ェ門。」

「いいだろう。相手してやる」

「わかりました。」

俺はすぐ普通の刀を取り出すと構える。

「・・・って今どっから出した!?」

「まぁまぁ気にしなさんな」

「気にするだろう!!」

「それよりかかってきてください。」

「無視か！」

五ェ門さんが斬鉄剣を構える。そして

「きぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

奇声を上げながら斬りかかってきた。

それを俺は・・・・

「ッ！！！・・・・・・・」

すべて目で見て避けた。

五ェ門さんが下がる。

「そんなもんですか？」

「・・・本気で行くぞ。」

そしてまた五ェ門さんが一瞬で抜刀し斬りかかってくる。

右、下、上、右、斬り払い、袈裟切り・・・・・すべて的確に避ける。

そしてまた五ェ門さんが一気に下がる。

「・・・・・貴様、人間か？」

「はい。一応そうなるんじゃないですかね？」

その頃ルパンたちは・・・

「・・・・うわぁ・・・・・・・」

「・・・・ありえねぇ・・・・・」

口をあんぐり開けて眺めていた。

「俺なんかもう何やってんのか全然見えねぇんだけど・・・・・」

「俺もだ・・・・なんでアイツ避けれるんだ？」

「さぁ・・・・・？」

「ここはあんなのがごろごろいんのか・・・・・」

※いえ、ナオヤが人間やめてるだけです。

「盗みは無理だな・・・・・」

「・・・・帰りてぇ・・・・・・」

そしてまた戻る。

「はぁ・・・・はぁ・・・・・」

「もう終わりですか？では今度は俺から行きます。」

そういって俺は一瞬で五ェ門さんの後ろに回り込み斬りかかる。

「ッ！！・・・・・」

キンッ

「おぉ、その状態でまだ反応できるんですか・・・あなたも十分人間やめてるでしょ。」

そしてさらに斬りかかる。

だがすでに疲れきっているのか、かろうじてはじいているようだ。

「ふぅ・・・もう終わりですね。」

「はぁ・・・・はぁ・・・・一太刀も当てられない・・・・だと？・・・・はぁ・・・・」

「というわけで信じてもらえました？」

「あぁ・・・・・・」

「さて・・・・・・」

これからどうするかなぁ・・・

第17話～ルパンルパーン・・・・あれ？ザ・サードだっけ？～（後書き）

はい！というわけでルパン三世を混ぜてみました！
やっぱりナオヤがチートすぎる気がしなくもない・・・

第１８話～帰還～（前書き）

か、風邪が・・・治らない・・・・・・やっと更新。
遅れてすいません・・・。

では第１８話・・・どうぞ～

第１８話～帰還～

～理子視点～

「・・・・・・・・え～・・・・・」

今、目の前ではありえないような戦いが繰り広げられていた・・・。

片方は目に見えない速度で刀を振るい、相手を斬りつけようとしている。

肉眼で追い切れないような速度でふるうとなるともう弾丸の領域である。

その人が人間なのか疑いたくなるような光景だった。

もう片方は・・・

「なんでその見えない太刀を目で見てかわせるの・・・？」

そう・・・なぜか人の目で見えないような剣筋をそのまんま見てかわしていた。

というか見えたとしてもその弾丸のような速度で迫る剣をなぜかわすことができるのかという・・・・。

「・・・・・ナオヤって人間？」

「む、失礼な。体の構造上分類は人間だぞ？」

「わ、びっくりした・・・・・終わったの？」

「おう、どうやら納得してくれたみたいだ。」

いつの間にか終わっていたらしいナオヤが（ていうか見てたはずなんだけど・・・）私の呟きに気づいて言ってきた。

というか体の構造上て・・・・・まるで構造以外は人間じゃないみたいな・・・・・いや、もう人間やめてたんだった。

ほんと構造だけだ。

「・・・・なんかすごく失礼なこと考えてないか？」

「・・・・・ソンナコトアリマセンヨー」

「・・・・・まぁいいか・・・じゃああっちで今後のこと話してくるけど・・・・理子はどうする？」

「うーん・・・ちょっと用事あるから先に帰ってる。」

「そうか。じゃあまた明日ー」

「じゃあね～」

そういって手を振りながら寮に向かって歩きながら考える。

（・・・・ナオヤ敵にしたらこの作戦全部つぶれそう・・・・ていうかいっそナオヤに―あいつを倒して≪・・・・・・・≫もらお

うかな～・・・？）

今後の作戦の修正案を。ていうかぶっちゃけナオヤを敵に回すと修正どころじゃないという・・・。

～ナオヤ視点～

「さて・・・・これで盗みの危険性はわかってもらえたかな？」

「・・・あぁ・・・たしかにオメェみてぇのがごろごろいるんじゃぁ・・・・無理だしな」

「・・・拙者もまだまだ未熟か・・・・・・いっそこっちで旅にでも・・・・」

「・・・あー・・・とりあえず、坊主。オメェなんかいろいろ知ってるみてぇだが・・・・俺たちが元の世界に帰る方法とか・・・しらねぇか？」

「うーん・・・ちょっと待ってください」

元の世界、ルパン三世の世界か・・・というかなんでこっちに来てしまったのか・・・・・・。

（・・・考えても知識があるわけでもないから分かるわけないか・・・となると・・・・）

神様。俺を転生させてくれた最上位の神様。

（おーい。神様ー。最高神様ーー。）

『・・・・おぉー久しぶりじゃのう。なんかあったんか？』

・・・・あれ？もしかして気づいてないみたいな？たぶん世界に干渉したーとか言ってすぐに話が来ると思ってたんだが・・・・？

（あのさ、なんかこっちの世界に通常いてはいけない人たちが入り込んだんだが・・・・）

『・・・？ちょっと待っておれ。・・・・・・・・あぁ・・・・・どうやらこの前の転生者騒動のときの影響じゃな。まだ少し歪んどるから別世界につながってしまったんじゃろう。』

（どうすりゃ元の世界に戻せるんだ？）

『あぁ、放置しとってかまわんよ。少ししたらかってに世界が引っ張り込んでくれるじゃろう。』

（なるほど。で、少しって具体的にはどのくらい？）

『えーっと・・・・だいたい一時間かそこらじゃな。っと・・・・もうすでに１５分たっとるみたいじゃからあと４５分程度かの。』

（わかった。ありがとなー）

『気にするな。もともとこっちが完全に調整できんかったのが悪いんじゃし』

（ん。それじゃ）

『それじゃあの』

そこで念話は途切れた。（ここまでの会話、思考、計3秒）

とりあえず・・・

「・・・・・たぶんあと一時間くらいで戻れます。」

「本当か!?」

「はい。こっちも原因が分かったので。」

「で、何が原因なんだ?」

「・・・それは詳しくは話せません。というかめんどいです。長いので」

「めんどっ!?ってお前・・・・・はぁ。まぁいい、戻れるんだな?」

「はい。」

「ならいい。で?俺たちはどうすればいいんだ?」

「そうですねぇ・・・・・」

特にやらなければいけないこともなし。やりたいこともなし。話すも何も原作知ってるから興味なし。うむ、困った。

「特にやらなければいけないことはないですが何かやりたいことは

ありますか？」

「俺は特にねぇな」

「俺も」

「・・・拙者は修業がしたい。手合わせ願えるか？」

なんと！？剣の達人から手合わせを頼まれた！！（※お前が人間やめてるからだよ）

「・・・わかりました！お二人は何かしたいことはないので？」

「んー・・・・あっ！！ルパン！！車！！車修理しねぇと！」

「あぁ・・・・・そうだったな。ということで俺たちはあっちで車の修理やってるよ。」

「わかりました、直りそうになかったら俺に言ってください。手はあるんで。」

「わかった。んじゃぁ五ェ門のあいてよろしくな！」

「はい。それじゃぁ、五ェ門さん、さっそく行きますか！」

「招致。・・・・いくぞ！！」

そしてそこから一時間は早かった。

五ェ門さんの剣をかわし続け、パーツが足りないと言われれば財宝

で取り出し（その間も斬りかかってくる）、配線がわからないと言われれば手伝い（この時も斬りかかってくる）、一時間そんな感じで時間をつぶした。

ほんと、すぐに時間は過ぎて行った。

そしてルパン一味がこっちに来てからちょうど一時間・・・。

「・・・ふぅ・・・なんとか終わったな。車の修理。」

「あぁ・・・それにしても・・・お前いったいどこから・・・ってうお!?」

突然、足元が光りだし、

「あ!!五ェ門さん、時間です!!」

「なぬ!?結局一太刀も当たらなかった・・・」

五ェ門さんもその光っているところに行き、

「あっ!!!そうだ!お前名前は!?」

「あ、自己紹介してませんでしたね。俺の名前は・・・」

ルパン一味が光っているところに集結。

「俺は神野ナオヤ!短かったけど楽しかったですよ!!

「あぁ、俺たちもだ。五ェ門との戦い、なかなかの迫力だったぜ?」

「次は負けんぞ。」

「車、修理手伝ってくれてあんがとよ。助かったぜ。」

「はい！！それで・・・これは三人へのお土産で・・・す！！！！！」

俺は財宝でなかから特別な改造を施したワルサーＰ３８、スミス＆ウェッソンＭ１９コンバットマグナムそれぞれ特殊マガジン付きと、懐に隠しやすい形の小太刀、メモを光る地面に投げ入れた。

「これは・・・？」

「それぞれ俺が作り上げたものです！かなり特殊な改造が施してありますけど・・・整備なんかは元のやつと同じようにできるし、細かいところはそのメモに書いてあります！！小太刀は俺が鍛えたやつです！切れ味は斬鉄剣にも劣らないはずなので試してください！！」

「いいのか・・・？こんなかなりレアそうなやつもらっちまって。」

「はい！さっき改造したやつなんで問題ないです！あ、小太刀はもともとあったやつですけど・・・・」

「な・・・！？おま、五ェ門に付きっきりだったろ！？いつこんなの作ってた！？」

「禁則事項です♪」

・・・うぇ・・・自分でやってて気持ち悪くなった・・・も

うやめよう。

「・・・・・・なんかお前は次元が違うな。」

「・・・そう、かもしれませんね。他の人とは違うんでしょうね」

「まぁ、なにはともあれありがとよ！ありがたく使わせてもらうぜ！」

「それでは、また！！！！・・・・といってももう会うことはないんでしょうけど。」

「あぁ・・・・・じゃあな！！」

「それじゃぁな！」

「・・・・さらば」

そうして三人は光に包まれて消えていった。

・・・・車を残して。

～ルパン視点～

「うっ・・・・・まぶしいな・・・・・」

「・・・・・戻ってこれたのか？」

「・・・・・・・・・・」

俺たちは来た時のトンネルにいた。

「どうやらちゃんと戻ってこれたみたいだな・・・。」

「というか夢だったんじゃないだろうな?」

「・・・・いや、これがあるではないか」

そういって五ェ門が出したのは小太刀。スッと抜いて近くの壁を切ってみると・・・・

「・・・・??・・・・ッ!!!!!・・・・・なんだこれは!?」

「ど、どうした五ェ門・・・・って・・・うわぁ・・・・あいつとんでもねぇもの渡していきやがったな・・・」

壁には一一ミリにも満たない隙間≪・・・・・・・・・・・・≫ができていた。

「うわぁ・・・・傷にすらなってねぇよ。なんだこれ?」

それはまるで最初からそういう形だったかのようなあとだった。

「・・・五ェ門。ちょっと貸してくれ」

「う、うむ・・・」

俺はその小太刀を持ち、軽く壁に当ててみる。すると・・・

「・・・・うわぁ・・・・・・やべぇ・・・・・」

「なんだ・・・・これ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

コンクリートでできている壁がまるでプリンにスプーンを刺すかのような柔らかさで切れていく。

「・・・もうおかしいだろ・・・これ。」

「・・・・俺たちの銃はどうなってんだ？」

そう言われて初めて思い出し、早速試し撃ちしてみる。

「・・・・そうだな。あの缶でも狙ってみるか」

次元はそう言って３０ｍほど離れたところに落ちている缶を狙って引き金を引いた。

ポスッ

「「「・・・・・・・・・・・・・・は？」」」

なぜか銃撃音はなかった。・・・・いや、それはまだサイレンサーが付いているということで納得できる。・・・・サイレンサーにしてもかなり小さかったが。

問題は・・・・・・

「・・・・缶が微動だにしてねぇんだが・・・？」

「でも弾は出たよな・・・・？五ェ門見えたか？」

「・・・・一瞬何かが通ったということしかわからなかった・・・・。」

「「なっ・・・・！？」」

五ェ門は今まで幾度も銃弾を斬ってきた。

その五ェ門ですら見えないとなると・・・・

「・・・ちょっと缶見てくる。」

「・・・・俺も」

「・・・・・・・」

結局俺たち三人で缶の様子を見に行き、チェックすると・・・・。

「・・・・んなあほな・・・。」

「・・・・・・これ、やばくないか？かなり・・・・」

「・・・・・・・・・・・」

そこにはたしかに穴のあいた缶があった・・・・・・うしろの地面にもかなり深く小指サイズの穴が開いていたが・・・。

「弾は出た・・・。だが缶は微動だにしていない・・・。そして一直線にあいた穴・・・。」

「・・・・五ェ門にすら見えず、音も聞こえない、穴はなぜか通ったところが虫食いのように穴が開く・・・・」

「・・・暗殺にはもってこいの道具だな」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「よ、よし！最後は俺だな！！」

そしてまた同じく３０ｍくらいから缶を撃ってみる・・・・。

ポスッ

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

やっぱり次元の銃と同じような結果になった・・・・が。

「・・・・・ッ！！？？・・・おいルパン・・・・ここ読んでみろ」

そういって次元が一緒に渡されたメモの一か所を指差しながら見せてきた。

「なになに・・・・？『ちなみに銃には改造マガジンが付いていて、最高で３０発まで入ります♪』・・・・・・・・」

俺たちは無言でマガジンを確認し、弾を入れてみる。

「「「・・・・・・・・・物理的におかしいんだが？」」」

通常のマガジンより１、２センチ長いマガジンにはなぜか弾が３０発入った。

次元のほうは・・・本体の大きさが変わらないのに同じく３０発入ったようだ・・・・・

「・・・・・続きは『そしてフルオート機能つきです！セミとの切り替え可』・・・・・・・」

銃になにやらスイッチらしきものが付いているので変えてやってみる。

ボスボスボスボスボスボスボスボスボスボスボスボスボスボスボスボスボスボスボス・・・・・・

「「「・・・」」」

２０発あたりでやめた・・・・。

今更だがほとんど反動がなかった。

「・・・・・これは不味いだろう・・・・・いろいろと・・・・」

そのときのショックが大きすぎて車がないことにしばらく気づかなかったんだってー・・・・・。

第１８話～帰還～（後書き）

・・・五ェ門ってこんな口調だったっけ・・・？

さてそんなことより、アンケートやりたいと思います！
チートもらって転生の主人公神野ナオヤ。
現在、外伝編はテイルズのファンタジアのみです。
いつか本編として書きますけど。
ここで質問！

ナオヤを別の世界に行かせるならどこがいい？

１Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！
２ネギま！
３テイルズシリーズ（どれか）
４その他（タイトルを書いてください！）

どれがいいです？

といっても感想くれる人がそんなにいるわけじゃないので一人二票まで！
期限は・・・・今は特になしです！でも突然終わるかもしれません！！

というわけで・・・次回も多分遅くなります。すいません。

第１９話～フラグが立ちました～（前書き）

な、なんとか書けた・・・・
すいません、、遅くなりました。親の目をかいくぐって投稿する１９話。
なぜこうなったかわかりません！
どうぞ！！

第19話～フラグが立ちました～

～キンジ視点～

「はぁ・・・」

結局あのあと、アリアは外へ行き、少しすると泣きだしてしまった。

そしてナオヤも中から出てくることはなかった。

一度は何をしてるのかと思い、中に行こうとも思ったがこの状態のアリアを一人にしておくこともできずにただ、ただずっと泣きやむまで、俺はアリアのそばで立ち尽くしていた。

しばらくして泣きやみ、アリアはゆっくりと歩き出した。俺はアリアの後をついて歩くだけだった。

そしていつしか寮の近くまで来ており、アリアは「ここで別れましょう」といってそのまま寮に帰って行った。

・・・今まで女性を避けてきたためか、ああいう時にどうすればいいのか、俺には全くわからなかった。

どうしてやることもできなかった。

その後、結局俺も自分のマンションに戻り、明日の準備をした。

そして今、武偵校で授業を受けていた。隣にいるはずのアリアは今、ここにはいなかった。

・・・ただアリアを見つけたからという理由で後をつけていたらいろんなことを知ってしまった。

アリアの母親が『武偵殺し』に冤罪を着せられているということ。

そして早くも二審まで有罪判決を受けているということ。

たぶん下級裁隔意制度――――証拠が十分に残っている事件について、高裁までを迅速に執り行い、裁判が遅滞しないようにする新制度――――を適用されたのだろう。

その高裁での量刑、なんと懲役８６４年、事実上終身刑だ。

面会室の時の会話からするとどうやら他にも冤罪を着せられているらしい。

どうやらアリアはその冤罪を最高裁までに、すべての真犯人を捕まえるという荒っぽいやり方で覆そうとしているようだ。

アリアの実家こと、『H』家はどうやら警察か何かの名門らしく、みんな自分にあった相棒を見つけだすことで自らの能力を飛躍的に伸ばし、たくさんの功績を残してきたらしい。

だが、アリアはその相棒、パートナーを見つけられずにいる。

そりゃそうだろう。

あんな天才児に合わせられる相棒なんてそうそういない。

アリアが始め、俺たちのことを奴隷と呼ぼうとしたのも（ナオヤにＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩされて言えなくなっているが・・・）パートナーからドレイに格下げすることで心理的負担を下げようとしたからかもしれない。（となると現在は心理的負担大・・・？）

・・・・・・・・・・・・

そんなことをぼんやり考えながら全然授業に集中していなかった時、理子からメールが来た。

～ナオヤ視点～

「さてっと・・・どうするかな」

現在、原作はちょうど理子が正体を現す前だ。

だが、今回は・・・・

「ちょっとまずったかなぁ」

原作では病院でのケンカののちアリアがロンドンに帰るために飛行機に乗り込み、理子の情報から推理したキンジが助けに出る。

だが、この喧嘩をしなかったためアリアたちは仲違していない。

その少しの違いからどんなふうになるのか予想ができない。

もしかしたらアリアが帰らないかもしれない。

理子がメールを送らずに情報が足りなくてキンジが助けにいかない
かもしれない。

理子の計画が変わっているかもしれない。

挙げればきりがない。

ただ、一つ言えるのは理子はアリアが本領発揮できる状態でなければ殺しはしないだろうということ。

つまり・・・・

「キンジを見張ってよう！！！」

という結論になった。

※ここまでの思考（会話文除く）約０、２１秒。

つまりはたから見ると、

「さてっと・・・・どうするかなちょっとまずったかなぁキンジを見張ってよう！！！」

・・・・・・・・・・・・・・

次の日、学校ではナオヤの変人疑惑が上がっているのだが・・・・・
それはまた別の話。

「というわけでキンジ、いまからお前を監視する！！！」

「どういうわけだ！？」

放課後、キンジのところへ行き、いっさい状況を説明することなく監視宣言。

そしてキンジの後を少し離れた所からあからさまに眺めて監視。

その後、学校ではキンジ×ナオヤ×？？？というＢＬの構造が出来上がっているという噂がたつのだが・・・・・それはまた（ｒｙ

そしてキンジが男と女のハーレムを作り上げるという噂が（ｒｙ

さらにアリアが振られたという（ｒｙ

さらに（ｒｙ

・・・というような感じで無限に噂がたち続けてたいへんなことになるのだがそれは（ｒｙ

～アリア視点～

「バカッ！キンジのバカー！！！」

なんであたしがこんなに怒っているかと言うと、なぜかキンジとナオヤの間に恋愛感情が生まれているという噂が立っていて、あ、ああたしがき、キンジにふ、ふふふられたなんていうわけのわからない噂が立っているからだった。

「あ、あああたしはれれ、恋愛なんてきょ、興味ないんだからぁぁぁぁあああ！！！」

た、たしかにキンジは結構やさしいし・・・と、時々心配してくれてるし・・・突然へ、変な口調になってあ、ああ、あああたしのことをひ、姫様とか言ったりして・・・／／／／／

「（かぁぁぁぁぁぁあああ／／／／）」

―――――／／／／／／／／

※アリアが完全に惚気てしまってはなしにならないので元の視点に戻します。

～ナオヤ視点～

ん？なんか今アリアが落ちたような音が・・・・まいっか。

「で、キンジ。アリアは？」

「ん？・・・・今日は学校には来てなかったぞ。」

「そうか、じゃあ理子は？」

「・・・なんかしらんが呼びだされた。多分その辺にいるんじゃないか？」

・・・・・・・・ゐ？

「マジ？」

「あぁ。授業が終わったら台場のクラブ・エステーレってとこに来いだってさ。」

「ほう・・・」

ほうほう・・・・・

「つまりフラグがたったわけですね」

「何のことだ」

「まぁまぁまぁまぁ・・・それで?行くのか?」

「・・・あぁ。なんかこう、胸騒ぎがする」

「・・・そうか」

この辺はそこそこ原作と同じだな。・・・世界の修正力とかあるんかな?

「まぁいいや。じゃあ俺はちょいと用事があるんで逝かせてもらうわ。」

「(・・・なんか今字が違ったような気がしたが・・・まぁいいか。)そうか、わかった」

そして俺は空港に行き、椅子に座って待つ!!

~一時間後~

俺はＰ○Ｐでテイ○ズ　オ○　○　ワール○　レディア○トマイソロジー３をやっていた。

ていうかおもしろいよねアレ。マジはまるわぁ・・・。

じゃなくて、キンジが来た。

キャビンさん脅してった。

そして俺は席を立ち、ゲームをしながらキャビンアテンダントに話しかけた。

「よう！準備はどうだい？」

「・・・あのーお客様？初対面だと思うのですが・・・」

「はっはっは・・・気にすんなよ理子」

するとさっきまでの声とは全く違う声になり、

「・・・毎回思うんだが・・・・なぜわかる？」

「俺がお前を見分けられないわけがないだろう。」

「っ！！／／／／／」

・・・・あれ？なんか今変なフラグ立てた気がしなくもない・・・・。

「・・・お、お前はなんなんだ?邪魔するのかと思ったら・・・その・・・・突然・・・・口説き文句みたいなのを・・・・ボソボソ・・・・」

「ん?なんだ?なんかいったか?」

「い、いや、何でもない」

「そうか?」

「・・・・それより・・・・邪魔するのか?」

「いや?面倒だし」

「・・・・・ふふ。」

「どった?」

「なーんでもないですよーだ!ふっふっふ・・・・理子りんにかなうとおもうなよー?」

理子は突然表に戻って話し始めた。

「・・・やっぱりその突然の切り替えは違和感があるなぁ」

「えっへん!そこがポイントなのだー!ツンデレだってー突然デレるからいいんじゃないかぁー!!」

「「「「「「「そうだそうだーー!!!!」」」」」」」

「うわっ！お前ら誰だ！？」

突然、近くにいた大きなお友達と思われる人たちが大きな声で叫んだ。

・・・・・周りの人めっちゃ引いてる。

「・・・・・もういいや。おなかいっぱい。と言うわけで俺は逝く！！」

「いってらっしゃーい！！」

「「「「「「逝ってらっしゃーい！！！」」」」」」

「うわっ！」

・・・まだいたのか。ていうかそんな野太い声でいってらっしゃいの合唱せんでくれ・・・・。しかも今字が違ったろ。

とりあえず高速で退散。

さて、そうしよっかなぁ・・・

～理子視点～

「ふぅ・・・」

・・・何しにきたんだろう・・。

「というかなんでわたしの変装見抜けるのかなぁ・・・・？」

自分で言うのもなんだけど、わたしはかなり変装に自信があった。
そうそうばれることはないと思ってたんだけど・・・。

なぜかあいつはいつも会うたびにかならず見抜いてくる。

なんでわかるんだろう。

気になって聞いてみたらあのセリフ。

回答になってないけど・・・その・・・・正直うれしかった。

なんでうれしかったのかわからないけど・・・・なんだかアイツとは敵対したくない。

そう思った。

「・・・次も見抜いてくれるかな?ナオヤ・・・」

第１９話～フラグが立ちました～（後書き）

はい、短いです。すいません。
そして今後も遅くなると思います。ごめんなさい。

第２０話～原作完全破壊～（前書き）

どうも、ゴマです。頑張って更新しました。
・・・・・でもなんでこうなったんでしょうね。

第２０話～原作完全破壊～

～キンジ視点～

「・・・・どうしてこうなった？」

～～～～～回想～～～～～

俺は理子から情報を得てアリアが殺されるという結論に達し、急いで空港まで追いかけた。

そして近くにいたキャビンさんに話しかけ、武偵手帳を見せながら飛行機を止められないかと言った。

だが案の定、ダメだったらしく戻ってきた。俺は仕方なく飛行機に乗り込みアリアのいる部屋に行った。

入ってから近くにいた（さっきとは違う）キャビンさんに案内してもらった。

そしてアリアの部屋に入り込み事情を話した。

アリアは驚いていたがすぐに「なぜそれに気づけたか」と聞いてきた。

俺はまだ話すことができないから心のなかで謝りながら「偶然だ」と答えた。

そして少ししてだんだんと雷の音が大きくなり、アリアがビクつい

てきた頃。

突如として銃声が聞こえた。

あわてて外に出ると操縦士の二人が最初にあったキャビンさんに引きずられて出てきた。

そして謎の気体を噴出する弾を転がされ、乗客に指示を出しながら俺たちも非難。（後から気付いたがあれはただの煙幕だった。）

そして・・・椅子についているランプが不規則に点滅した。

信号だった。内容は、一階のロビーにいるから来いとのこと。

俺とアリアは注意しながら、呼びだされた一階のロビーに行った。

そこには先ほどのキャビンさん。

そしてそのキャビンさんは実は変装していた理子だった。

そして理子が襲い掛かってきた。

その時、

『・・・・・・ぁぁぁぁ・・・・・』

「？・・・アリア、今何か聞こえなかったか？」

「・・・？いえ・・・特には聞こえなかったけど・・・・」

気のせいか？と思った時

ドカァァァァァン

「ぐはっ！」

「なっ・・・・」

「は・・・・・？」

「・・・・・・・えぇ～・・・・・・」

・・・飛行機の装甲をぶち破ってナオヤが入ってきた。

最初は皆びっくりしていたが・・・・ここは空の上。そんなところで装甲をぶち破ったら・・・・

ヒュゴオォォォォォォォォォォォォォォ

「「「「うわぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああ」」」」

当然皆穴に吸い込まれるわけで・・・・。

そして外に放り出される寸前で

「ぬうぅぉぉぉぉぉおおおおおおおおおお！！！」

ガガガガガン！！！

ナオヤが目にもとまらぬ速さで穴を修復した・・・。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

・・・・まぁ俺たちはまじめな雰囲気を完璧にブチ壊されたわけで。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・向こうも状況を把握したのか固まっている。そして今に至るというわけだ。

～～～～回想終了～～～～

「・・・そ、そうだな～・・・・どうしてこうなっちゃったんだろうなぁ～」

俺が呟いた言葉を拾って会話をつなげようとしたらしいナオヤの言葉。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

そこに突き刺さる、お前がやったんだろ的な冷たい視線。（もちろん俺含む）

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

「・・・・え、えっと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

「・・・・・・・・・・・・・・・はい、すいませんでした。」

「「「よろしい。」」」

・・・・・・なんでさっきまで戦おうとしていたやつらがこんなんになったんだ?

~ナオヤ視点~

うわっ!このタイミングで俺!?

ゴマ『いや、そろそろかなぁと』

「だれ!?」

「「「うわっ・・・・・・」」」

「・・・・あ・・・いや・・・その・・・・・・・・・・・・」

「「「・・・・・・・・・」」」

ゴマ『うわぁ・・・またこの空気にしてやんの』

「てめぇのせいだろが!!・・・・・・・・あっ」

「「「(ビクッ)・・・・・・・・・」」」

「い、いや、その、なんか今声が聞こえて！」

「「「（ヒソヒソヒソヒソヒソヒソ・・・・・・）」」」

・・・・うわぁ・・・・なんか話してる・・・・・・。

「「「・・・・・よし。とりあえず病院だ」」」

「ちょ、まったァァァァアアアアアア！！！！」

「うわっ！壊れた！！」

「逃げろ！」

「きゃーナオヤにおそわれｒ「お前は何を言っている！！！」イタッ！」

・・・・・・・・カオス。

～第三者視点～

※カオスな状況になったため他の人の視点からお送りいたします。

その後、なんとか騒ぎは収まったが結局やり直しになり、アリアとキンジが理子との戦闘を開始した。

ナオヤは戦闘には参加せず、そのまま見ていた。

そして理子が何かの能力なのか自分の髪の毛を操ることでナイフを持たせ、アリアに斬りかかり、アリアの側頭部が斬られる・・・・

というタイミングでナオヤが参戦。

二本指の白刃取りでナイフをキャッチ。キンジたちに一度部屋に隠れるように指示した。

～ナオヤ視点～

ふぅ・・・いくらできるだけ原作通りに進めたいからと言っても友達の頭を斬られるっていうのは見過ごせないなぁ。

「・・・・・なんで邪魔する？」

「・・・・悪いな。さすがに致命傷は見逃せねぇや。」

「・・・・・・」

理子は無言で距離を取った。

「・・・・・・うそつき」

「・・・・・あぁ・・・・ごめんな」

「・・・・・・・バカ・・・・・」

「・・・・・あぁ・・・考えなしにあんなこと言って悪かったな」

「・・・・・・変態」

「・・・・・あぁ・・・・俺はへんた・・・ってまて！？なぜに変態！？」

「・・・・・このクズ野郎」

「グハァ・・・・そ、そこまでいうか」

いつもとは違った様子の理子に罵倒される。・・・・まぁ俺が悪いんだしな・・・・。

「・・・・はぁ・・・・なんだかやる気なくなっちゃったなぁ・・・・」

「・・・・・悪いな。」

「もう・・・なんか責任取ってよね?」

責任・・・・ねぇ・・・・・

「・・・じゃあ・・・・」

「なに?」

「俺がブラドとヒルダからお前を守ってやるよ」

「!!!!」

「いったよなぁ俺。お前も含めて全部助けるって。」

「・・・・・」

「だから助けてやる」

「・・・・これを果たしたらもう助けてくれないの？」

「何言ってんの？」

え？なに？

「全部助けるって言ったろ。ちゃんと最後まで付き合ってやんよ。」

「・・・・助け終わったら・・・もう終わり？」

「ん？そりゃ終わりだろ」

「ビクッ・・・・・・・そう・・・・なんだ・・・終わったら・・・それだけなんだ」

・・・・そういって理子は俯いてしまった。

「・・・・どうした？別に終わったからと言ってそれで関係なくなるわけでもないのに」

「・・・・・え？・・・・だって助けることがなくなったらそれで終わりなんでしょ？」

「ん？別に助けることがなくたってもう会わないわけでもないだろう。俺たち友達だろ？」

「・・・・・・友達・・・・」

「え？違ったの？・・・・俺だけが勝手に友達だと思ってたの？」

「いや・・・そうじゃなくて」

「・・・・・・・・？」

「・・・・／／／／／／も、もういい」

「・・・・・・・・・・・・？？？？」

・・・・・・・なに？俺なんかした？

「・・・・なら俺がブラドどもから守るってことでいいか？」

「・・・・・・できるの？」

「余裕余裕～♪」

「わかった」

結局アリアたちにも話して和解した。

理子には初めから用意してあったパラシュートで脱出してもらい、犯人はパラシュートで逃げたということになった。

だが、その後ミサイルが飛んでくるイベントは残っていたようで巨大なのが二発、飛行機のエンジンを破壊していった。

さて、あとは原作通り。いつの間にかヒスっていたキンジがアドバイスしながらアリアが操縦。

クラスのみんなの助けも借りてなんとか着地に成功。
その後、司法取引などのいろいろな書類が来てしばらくはその書類の処理に困ったとさ。
さて・・・・
「どうしよう・・・・」
原作ブチ壊しちまった。
理子との戦闘ルート×
俺が倒すつもりだからブラドとの戦闘ルート（多分）×
きっとその後出てくるブラドの娘の戦闘対象俺
理子との絆が深くなるイベント×
結果・・・・原作何それ？オイシイノ？
・・・・・・・・・・・・・・・・
「マジでどうしよう・・・・」

第２１話～氷の魔女～（前書き）

どうも！ゴマです！
また更新できました！
でもいろいろとおかしくなってしまった！！！
では２１話、どうぞ～

第２１話～氷の魔女～

～ナオヤ視点～

「・・・今回の事件で武偵殺しが冤罪だって証明できたからママの公判が伸びたわ。年単位で最高裁が延期になるんだって。」

「よかったじゃないか」

そう。あの事件のおかげで武偵殺しの分が冤罪だということが証明できたため、何とかかなえさんの最高裁が伸びたのだ。

「・・・・ええ」

「どうした？なんか浮かないみたいだが。」

「・・・なんでアンタは理子の味方をしたの？」

「それは俺も気になってたんだ。理子が武偵殺しなんだろ？」

「・・・・・・・」

さて・・・・聞かれるとは思ったがどうしようか。

やっぱりここは・・・・

「強いて言うなら・・・・」

「「・・・・・・・」」

「俺があの空気ブチ壊したからな！」

「「・・・・・・・・・・・・・・え？」」

「いやー理子もかなり凝った作戦立ててたみたいだったのに俺が邪魔しちまったからな～・・・」

「「・・・・・・・・・・・・・・」」

かなりいい雰囲気だったのにね？俺マジで何やってんだか。

「・・・・・・・・・・・まぁいいわ・・・ナオヤだし。」

「・・・・・・・・・・・・だな。」

む、悪しき気配。

「セイヤァァァァァァァァァア」

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああ」

キンジへのダイレクトアタァァァァァァァック！！（テイ○ズの獅子戦吼）

「ちょ、キンジ！？え！？ていうか今のなに！？」

「てめぇ・・・いきなり何しやがる！！！」

「うおっ！？もう立ち直ったのか？手加減したとはいえ全力でやる

と建物が簡単に壊せるような代物なんだがなぁ・・・・」

「そんなもん人に向けて使うんじゃねぇ！！！」

まぁまぁまぁまぁまぁまぁまぁ・・・・・

「6回・・・・・」

「なにが！？」

「・・・・まぁいいわ。このままだと話が進みそうにないし。」

「・・・・・・・・・そうだな」

「それよりもアンタどうしてあんなとこから来たの？」

「あんなとこ？」

「いや、飛行機の装甲ぶち抜いてきたじゃない」

「あぁ・・・」

あれか・・・・

「あれは語ると長い・・・・「ならいいわ」・・・・・・・・・」

「どうせナオヤだしな」

む、悪しき（ｒｙ

「セイヤァァァァァァァァァァアアア」

「デジャビュ！？ぐほぁぁああああ」

「・・・・・・・・はぁ・・・・・じゃぁキンジ、アンタはなんであたしのところに来たの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「　返事がない　ただの屍のようだ　」

「・・・・・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・」

ん？アリアさんよぅ

「あんましため息ばっかついてると幸せが逃げるぜ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

なげェ・・・・

そしてしばらくしてキンジが復活できた頃・・・

「・・・それじゃキンジも起きたことだし、ちょっと話があるわ・・・・」

「それは大切なことかい？」

「・・・・えぇ、とっても。」

「・・・・・そうか」

今ので判断出来てしまった。

このタイミング。この場面。

アリアの・・・・別れを告げるイベント。

「キンジ・・・ナオヤ・・・・アンタ達とは約束してたわね・・・・」

「・・・・・・・・・」

「アンタ達とパートナーを組むのは最初の一回だけって・・・・」

・・・・・・アリア。

「何勘違いしてんだ?」

「・・・・・へ?」

「俺は別に期限なんて付けてねぇぞ?」

「・・・俺は強襲科(アサルト)に戻るのは一回だけだと言ったはずだぞ?」

「・・・・じゃ、じゃあ・・・・」

「俺はお前のパートナーを辞めるつもりはない。・・・・・来年には武偵を辞めるけどな」

「俺の場合は、アリアだけのパートナーって訳にはいかないけどな。」

「・・・・・ありが・・・と」

うんうん・・・なかなかに・・・・・・流れが読めんかった!!!

まさかこうなるとは・・・キンジも、俺がいたせいかあんまり嫌悪感を感じてないみたいだし。

まぁ・・・これはこれで

「一件落着・・・・てな」

ところで・・・一件落着っていうと二件目三件目がありそうだと思わないかい?

・・・・やべ。キンジのセリフ取っちまった。

そしてその後、キンジの家で白雪たちとひと悶着あったことは・・・・いいよね?別に

〜???視点〜

「ふむ・・・・・やはり狙うなら星伽か・・・・」

暗い部屋。そこにはただ一人、銀色の髪をした女がいるだけだった。

女は獲物を品定めする。狙われた獲物は・・・・

「星伽白雪・・・お前にしよう・・・・」

～ナオヤ視点～

「ふぁぁぁぁ・・・・・ん・・・・」

おはよう！皆！

今日は日曜日さ！というわけでおやすみ！！！

ゴマ『寝るな！！！』

ゴンッ

「ぐはぁ・・・・・」

・・・どこからかタライが俺の頭に降ってきた。

「・・・なぜにタライ？そして毎回思うがお前は誰だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

・・・ちっ。もういないのか。

「さて・・目が覚めてしまった。・・・・なにしよう。」

さて！またまた状況の整理だ。

現在は第一巻のイベントが終了し、ちょうど二巻に入ったところか。

ということはジャｎ『まだばらすなよ？』・・・・・ちっ。さっき帰ったんじゃなかったのか・・・。

まぁいいや。あいつが白雪を襲うんだったか？

・・・・めんどくせぇ・・・・・

あ、そういえば俺も超能力があったんだった。

Ｇ４２だっけか？・・・・・・あれ？俺人間だっけ？※身体構造上は人間に分類されます

まぁいいや。とりあえず暇だ。というわけで・・・

「今回はジャンヌさんに教えてもらいましょー！イエェェェェェェェェェェェェエエ！！！！！」

「うわっ・・・・・・・貴様・・・どうやってここに来た！？」

「はいはいどーもー。わたくし神野ナオヤと申します。」

「な、き、貴様があの化物か？」

「へ？俺もう化物扱いになってるの？」

「・・・・全科でRランクとか言う意味のわからない者を貴様は人間と言うのか？」

「うわひでぇ・・・・」

「ふん！そんなことは関係ない！」

「いやお前が言ったんじゃん」

「・・・・・・・・・・貴様は何をしに来たんだ？」

「遊びに来た」

「死ね」

ブンッ

「うわっ」

いきなりジャンヌさんが聖剣デュランダルを抜いて襲い掛かって来た・・・・・ので

「よっと」

素手でつかんでみた。

「なッ！？さすが化物・・・・だがこれなら！！」

パキパキパキ・・・・

「ん?うわっつめた!・・・・ふん!」

パリンッ

「はっ!?いや待て貴様!!どうやって私の氷を!?」

「どうやってって・・・こう、手に力を入れて・・・フン!って感じで」

はいそうです!割りましたね!聖剣をつかんだら掴んだところから凍ったからね!俺冷たいのあんまり好きじゃないんだ!

「ば、バカな!あの氷がついた時点ですでに動かないはずだ!!」

「いや知らんがな」

知ってるけど

「クッ・・・・」

「ふむ・・・・あのさ」

「・・・・なんだ」

「そろそろ剣退けてくんない?」

「・・・・・・・・・」

そうなんですよ。この子もうすでに万策尽きてるのに力を抜かない

んですよ。策士とか言ってたのにねぇ・・・なんかこう無駄に時間稼ぎをしてるような・・・・・ん?

「そこらへんにあったトラップなら作動しねぇよ?」

「な、なに!?いつの間に・・・・クッ・・・・」

スッ・・・・

「やっと退いてくれたよ・・・」

「・・・・で?何の用だ?」

「いやだから遊びに「真面目に答えろ」・・・・・白雪狙ってんだろ?」

「なぜそのことを!?」

「ふはははは俺最強!!」

「・・・・・・・・・で?」

「・・・・いや、せめてなんか突っ込んでよ」

シュンッ

「いやいやいや!?デュランダルを突っ込まないでくれ!?」

「貴様が何か突っ込めと言ったからだろう」

「そういう意味じゃないよ!?」

「なら貴様のうしろの穴に・・・・」

「待てッッッ!!!この小説をノクターンに乗せるつもりか!?」

「・・・貴様、案外かわいい顔をしているな・・・はっ!まさか女か!?なら前の穴に・・・」

「だからやめぇぇぇい!!!!そして俺は男だ!!!!!」

あれ!?ジャンヌってこんな変態だったっけ!?

「スキあり!!」

ボンッッ

「あ、なるほど・・・下ネタで俺に突っ込みをさせてその間に逃げると・・・・」

・・・・・・なぜに下?

「ジャァァァンヌゥゥゥゥゥゥゥ!!お前変態だったんだなぁぁぁぁぁぁぁ!」

『違うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!』

いやだってねぇ?自分で言っておきながら違うはないだろう。

そして結局ジャンヌさんには逃げられてしまった。

暇なので家に戻った。電話したらみんな今日は用事があって忙しいって～・・・

その日は一日中ずっと一人じゃんけんやってた。

右手が１０３２４７４２８３８４７２６４９９８７３勝。左手が２勝

右手ＴＵＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！！！！！！

・・・・・その日のご飯はなんだかちょっとしょっぱかった。

第２１話～氷の魔女～（後書き）

・・・・なにがどうしてこうなった！

誰かシャーロック・ホームズを呼んでください！！助けて！

第２２話～人外バンザイ～（前書き）

俺頑張った！！どうもゴマです。

特にいうことなし！

では２２話どうぞ～

第２２話～人外バンザイ～

～キンジ視点～

「よう、ナオヤ」

「お、キンジ！おはようさん！」

月曜日の朝。いつも通りに学校に来た俺が一番最初に見かけたのはナオヤだった。

・・・すごくテンションの高い。

「・・・なんでお前そんなにテンションが高いんだ？昨日何かあったのか？」

「いや！特に何もなかったぜ！！ほんとのほんとになんにもなかったぜ！！！なんにも・・・・なかったぜ・・・・」

「え！？いやどうした！？」

まっ・・・まさか・・・

「・・・昨日、俺に電話してから何したか・・・・・順番に教えてくれないか？」

「・・・昨日、お前に電話した後・・・武藤に電話したら・・・・『新しい車が来るから無理！わりぃな！』ってすごくうれしそうに言ってた」

「・・・そうか」

武藤・・・・お前のところにも言ってたのか

「・・・・それで？」

「・・・そのあと不知火に電話したら・・・『ごめん、はずせない用事があるんだ』ってすごくさわやかに言われた」

・・・・・・お前もか不知火

「・・・・・それから？」

「・・・・アリアは『裁判の準備で忙しい』って・・・・白雪は『星伽の行事があるからだめ』だって・・・」

「・・・・・・」

「レキは『仕事があります』って・・・理子は『今日はギャルゲーの日！』って・・・・」

・・・・レキは分かるが理子のは何なんだ？

「他にも風魔は『修行がありますゆえ』って・・・あかりちゃん達は『今日は三人で遊ぶ約束なんです。すいません・・・』って申し訳なさそうに・・・」

「・・・結局その日何してたんだ？」

「・・・・・一人じゃんけんしてた」

「なんでそんなさみしいことしてんだよ!?」

「・・・誰も暇な人いないし・・・・」

「勉強しないのか？」

「・・・基本テスト満点だし」

「整備は？」

「・・・・二十秒で全部終わったし」

「魔改造とかしないのか？」

「・・・・大半がもう化物だし」

「ゲームとかは？」

「・・・今持ってるやつ全クリカンストしたし。アイテムとか隠しとか全部終わったし」

「昼寝は？」

「・・・・俺一日一時間寝たら他の人が十時間以上寝たのと同じ効果があるし」

「・・・そ、そうか・・・・じゃあじゃんけんの勝敗は？」

「・・・・右手が１０３２４７４２８３８４７２６４９９８７３勝。左手が2勝した。右手がクソ強かった」

「・・・・そうか」

俺はナオヤの肩に手を置いた・・・・。

なんだかちょっと・・・視界が霞んでいた。

～ナオヤ視点～

キンジに構ってもらって少しすっきりした。

そして今度遊ぶ約束をした。周りにいた人たちも一緒に遊んでくれることになった。

・・・うれしくて目の前が少し霞んでた。そしたら皆が温かい目でこっちを見てた。

「・・・・さて!そろそろ教室に行くか・・・・・ってお?おーいアリアー」

「ん?なんだ。ナオヤにキンジじゃない。・・・どうしたの?なんか目が赤いけど・・・」

「・・・後で説明する」

「??」

キンジ・・・・

「それより今度さ・・・って、ん?」

「どうしたの?ナオヤ・・・ってこれ・・・」

「・・・『星伽　白雪　至急教務科(マスターズ)まで来い』・・・か。珍しいな。白雪が呼びだし喰らうなんて」

そう、目の前の掲示板に白雪呼び出しの指示が書いてあったのだ。

・・・まさか

「アリア、キンジ・・・お前ら、毎回部屋で乱闘やってるからってグルで報告したんじゃ「「するか（わけないでしょ!?）」」冗談だ」

「私たち貴族はね!そんな告げ口みたいなことはしないのよ!!」

「ふ~ん・・・・」

「へぇ~・・・・」

「な、なによ!」

「「いや、何でもないが?」」

「~~~~~~~ッ!!」

ふはは特に理由のないこのイライラする攻撃でもくらっとけ!・・・・本当に他意はないがな!!

「それよりも!!白雪を追うわよ!!」

「なぜだ?」

「弱みを握るのよ!!」

おいアリアさんや。告げ口はしないのに弱みを握るとはこれいかに。

「いいから行くわよ!!」

そしてそこからは原作通りだった。・・・途中までは。

キンジがかなりやけくそ気味にアリアを「たかいたかーい」といって通気口まで押し上げ、アリアに鳩尾を蹴られた。・・・ププッ

そして、匍匐前進で中を進み（女性が匍匐前進で男性の前を行くのはどうかと・・・）アリアがさっさと前に行ってしまう。

キンジが「お前匍匐前進が早いな」といい、アリアは「強襲(アサルト)科のなかでは一番早いわ」と答え、またキンジが「そうだろうな。お前は邪魔になるものがないからな」といい、そしてアリアが「なにが?」と聞き・・・キンジの「胸だ」の発言の瞬間、俺の目でも捉える事の出来ない速度でアリアの足が動き、絶妙な角度でキンジの顔面にめり込んだ。

・・・5?ほど。っていうか陥没してね!?・・・ギャグ補正つえぇ・・・

そして白雪との会話を盗聴後、アリアが突入。キンジがアホみたい

にアリアの上に落下。そして俺はアリアたちが教師の綴に投げられたあたりで登場。

そこからが少し違った。

「んー？何これ？」

おい綴先生。教師なのに生徒をこれ扱いとは何事だ。

「あー・・・ハイジャックの時のカップルじゃん。」

カップルとか言ったら・・・あぁ・・・もうアリアが真っ赤に・・・。

「んでこっちは人外バンザイじゃんか。」

「おいこら誰が人外バンザイか」

「お前だぁー・・・神野ナオヤ。教務科（マスターズ）を除くすべての科においてRランクの人外バンザイ」

おいせめて武偵とは呼んでくれないのか。

「だが実際はRランクに収まっておらず、実力だけならすでにRランクが百人束になっても勝てないという噂がある。」

・・・アレ？なにそれ・・・俺シラナインダケド・・・・たぶんあってるけど。

「だが一般校（パンチュー）からの転校生のため、経験が足りないと思われる。」

はいあってます。ていうか転校生じゃなく転生者なんだけどね？

「情報科（インフォルマ）のＳランクが調べたが、転校前の情報が一切存在しない。最近は本当に人間かどうか怪しまれている。」

・・・・・ナンテコッタイ。まあ突然学校に来たＲランクなんて調べられない方がおかしいがな！・・・人間かどうかは最近自分でもわからなくなってるケド・・・・

「武器は・・・違法改造・・・ってか魔改造の鋼鉄破り（メタルイーター）。・・・射程範囲は６ｋｍを超え、最近は秒間３０発で乱射できる。弾倉に入る弾は全部で５０発。・・・ねぇ・・・弾倉の形どうなってんのさ。いやそれよりもなんで狙撃銃が当たり前のようにＡＲよりも連射できるのさ。」

「俺にもよくわかりません」

「・・・・通称《人外モデル》と呼ばれ」

エ！？なにそれ！？せめて俺の名前を入れてよ！！

「その人外モデルを二丁同時に持ち、スコープをのぞかずに６ｋｍ以上先の的に平然と当てる。さらに狙撃時の反動をすべて押さえ、特殊なサイレンサーで現在は着弾時以外には聞こえない。・・・・風切り音はどこいったのさ。立ったまま狙撃し、百発百中。・・・・アンタ変態だね」

「なぜその結論に至ったかじっくりご教授願いたい」

「あたしはそれよりなぜそんな人外バンザイな体のつくりになってるのか知りたい。尋問してやろうか」

ヤメテ！

「・・・・でこっちは神埼・H・アリア。Sランク武偵で双銃双剣(カドラ)ね。ロンドンではだいぶ活躍してたみたいだが全部ロンドンの武偵局が自分たちの業績にしたみたいだねぇ。協調性がないせいだ。このマヌケェ。」

「ふん！貴族は誰かが自分の手柄を横取りしても威張らないのよ！」

「へぇ～・・・あたしは平民でよかったねぇ。そういえばアンタ、およ「あぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」」

あぁ・・・・そういえばアリアは・・・

「あ、あたしは浮き輪があれば大丈夫なのよ！！」

泳げないんだったなぁ・・・

ほらアリア、そんな風に自爆したから横でキンジが「いいこと聞いたぜ～」みたいな顔で笑ってるよ？

「そんでこっちは遠山キンジ。Eランクの探偵科(インケスタ)。」

「・・・・・・」

「だが、強襲科(アサルト)の生徒は一目置いているものが多く、ある種のカリスマ性があると思われる。」

ほんと、綴の頭はどうなってるのやら・・・どうせ全生徒の情報が頭に入ってんだろうな。

「受けた依頼は、青海の猫探し、ＡＮＡのハイジャック・・・ねぇ、なんでアンタやることの大きい小さいの差がそんなに激しいのさ。」

「俺に聞かないでください」

いやキンジよ。お前に聞かずに誰に聞けと・・・あ、アリアに聞けばいいか。どうせわからないだろうけどな！

「武器は違法改造のベレッタ。」

「（ギクッ）」

「三点バーストどころかフルオートまでできる通称（キンジモデル）ってやつだな。」

「は、はは・・・それはハイジャックの時に壊れちゃったんで今は普通のベレッタで合わせてます・・・。」

「装備科（アムド）の平賀文に改造（イジリ）の予約入れてんだろ」

ジュッ

「あつ！」

笑いながら怒るという芸当を見せた綴が咥えていたたばこで根性焼き。・・・生徒に根性焼きはどうかと思うぞ？

「・・・・で？その三人が何の用だ？」

「あたしたちが魔剣（デュランダル）から守るわ！」

「ほう・・・？」

「え？え？」

「今ならキンジの部屋に住み込みでボディーガード・・・・」

「お願いします！！！！」

うわっ！？早っ！？あれ！？原作だとここは少し言いあってからアリアがキンジに銃を突き付けてそれからＯＫじゃなかったか！？

「ちょ、なんで俺の部屋なんだよ！？」

「（あんたの部屋にすれば白雪が一発で落ちると思ったからよ）」

「・・・・・はぁ・・・・・・もう勝手にしてくれ」

キンジ陥落！

「・・・・・・先生。」

「いんじゃない？Ｓランクと人外バンザイが無料でボディーガード。お得じゃん」

「はい！」

うはっｗｗうれしそうｗｗｗ

って

「だから人外バンザイ言うなって・・・・」

こうして魔剣（デュランダル）＝ジャンヌさんから白雪を守り抜こう！という作戦が決定した・・・。

第２３話～策士、策を練らず～（前書き）

どうも～ゴマです

今回はいつもより更新が早い分、短いです・・・すいません。

第２３話～策士、策を練らず～

～ナオヤ視点～

「・・・・・ごめんキンジ。やりすぎた」

「・・・・・私も悪乗りしすぎたわ・・・・」

「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・」

どうも、みなさんおはこんばんにちは。

・・・・わかりづれぇ・・・というわけで普通にこんにちは。

え？挨拶はいいからさっきのセリフは何か早く教えろだって？

わかったわかりましたよ。いいでしょう。実は・・・

「・・・・部屋、魔改造しすぎた・・・・」

と言うわけです。

あの後、普通に帰ることになったんだが・・・・。

ほら、俺とアリアとキンジでさ、白雪の護衛やるってことになったじゃん？

で、場所は全員キンジの家ってことになったんだけど・・・

アリアが『とりあえず帰ったらキンジの家を要塞化するわよ！！』って言いだしちゃってさ・・・

そんでしばらく言い合ってキンジが折れて、晴れて公式に要塞化したわけだ。

俺としては宿主の許可があるなら文句はないので協力したんだが・・・・

調子に乗ってやってしまったというわけだ。具体的には

玄関と窓には特殊なレーザー光線を出す、壁。見た目はまんまただの壁なのにどこからともなくレーザーが発射される。

このレーザーがかなりの曲者で、色がなく光よりも速く、音がなく発射された形跡もなく、触れると痺れ、四方八方から発射されて縄のように巻きつく。

しかもレーザーなのに消えず、俺が持っている特殊な武器で斬ることでしか外れない。あとこれが発動する条件は、設置した時に設定する人物以外が宿主の許可なく入ろうとすること。（ちなみに武藤は設定していないため入ると捕まるｗｗ）

そして魔剣対策（デュランダル）で、これに巻かれると超能力が使えなくなる。

・・・・なんて鬼畜。これだけでもすでにヤヴぁいのにさらにこれに巻かれると地面に穴があいて特殊な空間に落とされる。そこは本当になんにもない真っ黒な空間なので通常の人間は十分も一人でいれば発狂する・・・・・。

ちなみにこれは俺の能力で作ったが、なぜか皆「俺だから」って言ったら納得していた・・・・。

あっ、ちなみに許可されてる人物に変装しても、指紋をつけても声を変えても、ばれるよ！なぜならこいつは本人の気配・・・というかなんというか一人ひとりが持っている魂みたいなものに反応するからね！！

これも言ったら同じ反応された・・・・。

そしてさらに、部屋の壁を特殊合金に作り替えたよ！！多分核爆発でも壊れないよ！！ていうか俺でも壊せるか怪しいよ！！

さらにさらに窓も同じく俺お手製だよ！！！ドアも作り替えたからね！！カギはいらないよ！！本人が触れるだけであいちゃうから！！それどころか声で「開け」とか「閉めろ」とか言うだけで勝手に開いたりしまったりするんだよ！！これも同じく魂っぽいのに反応するから声をまねても関係ないんだよ！！

しかもこいつに攻撃すると問答無用で特殊レーザーぐるぐる巻きの刑にあって、その後、俺のところに飛ばされるんだよ！！

他にもたくさんあるけど長いから終り！！！ていうか説明しきれません！！！

「・・・・・これどうすんだよ・・・・」

ごめんね！！俺チートでごめんね！！！

そしてきっと忍び込むことが多いであろう理子、ごめんね！アリア

の要望で設定してないんだ！！まぁ真っ暗地獄には落とさないようにしたけど・・・・。

「・・・まぁ・・・・とりあえずここまでやっておけば魔剣（デュランダル）も入れないでしょ・・・・」

だろうね！ていうか多分シャーロックも堕ちるよ。

とその時、

ガチャ

「キーく・・・うわっ！！ちょ、なにこ『パカッ』キャーーーーー」

スッ・・・

「「「・・・・・・・・・・・・・・・」」」

理子ェ・・・・・

かかるの早すぎだろう・・・・・

・・・・・・・・・とりあえず、

「「「救出・・・・するか（しよっか）」」」

そしてその後、理子を救出し終え、話を聞くことにした。

「で、理子は何用で？っていうかなぜここに？」

「ぐすっ・・・え、えっとね。・・・理子を助けて？」

・・・・・はい？？？？

「え？ちょ、え？なに？」

「あのね、あたしがキー君やナオヤ、アリアに負けたって言ったらイ・ウーを退学になっちゃったの」

・・・・・・・・・な、なぬ！？早い！！早いぞ！！！なぜだ！！まだジャンヌさんと戦ってない！！！

「だからさ」

このイベントはッッッッ！！！

「一緒にドロボーしよ？」

ジャンヌ編のあとだぁぁぁぁぁぁぁぁぁあぁっぁあぁぁぁぁぁぁぁあぁ！！

「無理」

あっさり言ったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！！！

「いや、今すぐってわけじゃなくて、「無理」この依頼が終わってから「無理」手伝っｔ「無理」もぉ！！なんでアリアばっかり答えるの！？しかも拒否！！！」

いや、普通に考えて一緒にドロボーしよ?って言われてやる武偵はいないだろ・・・・・

「アンタ、武偵が犯罪やったら通常の何倍もひどい罰があるってこと忘れてんじゃないでしょうねぇ・・・・・?」

「・・・・ぷぅ・・・・・」

いやそんな膨れられてもねぇ・・・・かわいいけど

「・・・・ブラド」

「ッ!?今なんて!?アンタのドロボーと無限罪のブラドが関係あるの!?」

「関係あるよ。かなり近い部分に。でも細かいことは・・・・」

「・・・・わかったわ。乗る。キンジとナオヤは?」

「・・・・・少し考えさせてくれ」

「俺は当然乗るぜ?」

「OK~。それじゃ細かい話はこの件が終わってからね!」

「わかったわ。」

「おう」

「・・・・・・・」

そして理子は帰って行った。

さてさて・・・・・原作がぁぁ・・・・・・

なんで今このタイミングでこのイベントが出ちゃったんだよ・・・・

イ・ウー・・・・・近いとこまで来てたのかな・・・・・・はっ！まさか別の狙いが！！・・・・・・なんてなぁ・・・・

・・・あれ？俺今余計なフラグ立てた？

「・・・キンジ。」

「・・・・なんだ？」

「あのね・・・無限罪のブラドは私のママに冤罪を着せている奴の一人なの。」

「・・・なるほどな」

「今まで目撃証言なんかほとんどなかったから今回はラッキーだったわ。」

おっとアリアさんや？

「アリア、絶対に油断してかかるなよ？」

「？どういうこと？」

うーん・・・ここから先を言うとなんで知ってるんだっていう話になっちゃうんだけど・・・・・・まぁなんとかなるか

「ブラドは強いぞ?スーパーキンジモードといっしょに行っても勝てるかどうか・・・いや二人じゃ無理だな」

「おい、人をどこぞのロボットのモード見たく言うな」

「・・・・・そんなに強いの?」

「ああ。」

まぁ俺が行くと一秒と持たず終わるけど・・・

「・・・なんでアンタ、ブラドのこと知ってるの?」

おっと来たかこの質問・・・だが!!!

「俺だからな」

・・・どうだ!?

「・・・・そうね」

決まったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!

「まぁとりあえず、今はこっち(デュランダル)をはやくなんとかしましょ」

「そうだな」

と言うわけでとりあえずジャンヌさんを何とかしようということに決まりました。

そしてその後、白雪が帰ってきて、キンジ宅おなじみの「ハレンチ!!」イベントが終わり、家具はボロボロだが傷一つない壁を見て改めて魔改造乙と思ってから一日が終わった。

〜〜〜深夜〜〜〜

「くっくっく・・・この時間帯なら全員寝ているはず・・・呼びだすよりもこのまま行った方がいい。」

ゆっくりとマンションの裏側から昇り、窓の前に来る。そして・・・

「さて・・・星伽はどこに・・・」

ギュッ・・・

「な、なんだ?これは!?・・・痺れ・・・・クッ・・・身動きが取れない・・・・この!!」

・・・・・・・・

「な、なぜだ!?なぜ力が使えない!!!」

突然、体に何かが付いたような感触があった直後、全身が痺れてきた。

なにかが体にまとわりついているようなので凍らせて壊そうにも力が使えない。

さらに体がしびれているので力が入らない。

・・・なんて鬼畜!!!

※ジャンヌがいるのが外のため、穴があかず落とせません。

「ク、クソ!!」

～～～翌朝～～～

「う～・・・・ん・・・・よく寝た・・・・ふぁぁぁぁ・・・・」

ナオヤが最初に起床し、何か飲み物がないかリビングへ・・・

ガチャッ・・・

冷蔵庫を開け、中から牛乳を取り出す。

そしてコップに入れ、カーテンを開けようとコップを持って牛乳を飲みながら窓へ行くと・・・

「ブフゥゥゥゥウウウウ!!!!!」

・・・思いっきり噴き出した。

「ゲホッ・・・ゴホッ・・・エホエホッ・・・・・はぁはぁ・・・・・何やってんの・・・・・ジャンヌさん・・・・・」

カーテンを開けた先には・・・案の定、夜中につかまってそのままぶら下がっていたジャンヌさんがいた・・・。

第２３話～策士、策を練らず～（後書き）

・・・・・どうしてこうなった。

じゃんぬさんが　どじっこに　てんしょくしました。

挿絵のみ投稿（前書き）

初めて挿絵投稿します。絵だけです。
・・・・下手でごめんなさい

挿絵のみ投稿

＞i352270―4437＜

主人公の神野ナオヤの絵です。
・・・こぶいちさんの絵の書き方をベースに書いたつもりなんですが・・・
基盤がなくなってますね！はいごめんさい！生まれてきてごめんなさい！
絵を模写することならできるんです！結構うまいって言われてます！あ、うそです石投げないでっ！
ちなみに肩？に担いでるのが一応鋼鉄破り（メタルイーター）です。
改造版なのでスコープがないです。て言うかこいつスコープ覗かないし。
髪長いですはい。
そしてこれ一応一番最初に思いついていた絵です。なのでもしかしたら変えるかもしれません。

第２４話～勇者キンジ～（前書き）

どうも！ゴマです。
２４話、どうぞ～

第２４話～勇者キンジ～

～ナオヤ視点～

は～いどうもみなさん。ナオヤです。

現在どんな状況かと言うと・・・

あの後、ジャンヌさんがあのままだとかわいそうだったのでとりあえず家のなかに入れて、皆を起こしました。

すごく唖然としてたけどね。・・・・・・一番びっくりしてるのは俺だよ・・・。

そして話を聞いたところ、どうやら俺が最初に突っ込んでいったせいで皆に作戦がばれていると思い、焦って夜中に自宅へ突入、そのまま捕縛しあばよとっつぁ～んするはずだったらしい。なんで知ってるかと言うとちょっとジャンヌさんにＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしてみたらすぐにしゃべってくれた。

・・・・ジャンヌさんや？アンタ策士じゃなかったの？あばよとっつぁ～んどころか今回の目標は・・あたりで捕まっちゃってるよ？

というわけで・・・・・

「どうしよう・・・・」

原作は完全におかしくなっているし・・・ていうかなんでジャンヌさん家に来たの？普通先に白雪の家じゃないの？

・・・ボディーガードの依頼の情報があったらしい。なんでそこは優秀なのにアレにかかっちゃったのさ。※お前の魔改造のせいだ

さてさて・・・・

「で、アリア？どうすんの？」

「とりあえず尋問科（ダギュラ）にでもブチ込んどけばいいんじゃない？」

「うーん・・・・」

なんだかなぁ・・・・

「ところでジャンヌさんや？」

「（ビクッ・・・・ガタガタガタガタガタ・・・・・）」

「い、いや・・・・そんなにおびえなくても・・・・」

「アンタのアレを喰らっておびえるなって方が無理よ」

「俺もそう思うぞ」

そんなに怖いかなぁ・・・・※本人に自覚なし

「そうだ、かなえさんの裁判に出てもらおう。」

「・・・・そうだったわね。なんで忘れてたのかしら。」

びっくりしすぎたのでは？

「とりあえず、教務科（マスターズ）に連絡して、それから裁判に出してもらうように頼みましょうか。」

「んじゃ俺が連絡してくる」

「よろしくキンジ」

「はいよ」

そういってキンジは携帯を取りに自室に戻って行った。

「さて、・・・あっさり終わったな。どうする？」

「どうするって、次の依頼が早くなっただけよ？」

「あぁ・・・理子のか。」

たぶんあの依頼は理子のネックレスだろう。ブラドの話が出てきたし。

「一体何させる気かしらね・・・・・」

「・・・アリア。気をつけろよ？ブラドは危ない」

「ええわかってるわ・・・」

「・・・・今、ブラドといったか？」

「ん?そうだけど」

「・・・・なるほどな」

「なんか知ってんの?」

多分俺が知ってる内容だけど。

「・・・まぁ教えてやろう。たぶん理子の依頼だろうが・・・ブラドがいたならすぐに作戦を中止して逃げたほうがいい。」

「・・・どういうこと?」

「双子のジャンヌ・ダルク達が戦ったという記録があるが・・・やつは銀の銃弾を受けても、聖剣デュランダルで貫いても死ななかった。やつは死なないのだ。」

「なッ・・・」

あれ?俺前に説明してなかったっけ?言ったような記憶が・・・

「だから戦いになったら逃げるための戦いをすることだな。やつにはお前たちでは絶対に勝てない。・・・・・そこの人外は別としてな。」

「おい」

「やつが負けたところは、イ・ウーのリーダーと戦った時だけだったらしい。」

そうそう、ちゃっかりシャーロックも勝ってたんだよなぁ。

「あとから聞いた話だが、やつを倒すには四つの弱点を同時に破壊しなければならないらしい。」

っていうかこのイベントって今発生すんの？

「・・・・ま、せいぜいがんばるんだな。」

「・・・・そ、情報ありがと。ちなみにその弱点ってどこかわからないの？」

「・・・・残念だが判明していない。ただ、弱点の場所には目玉の模様があるってことは分かっている。」

あれ？ジャンヌってその目玉模様の位置知ってなかった？え？マジ？ここも違うの？

「おーい。すぐ来るってよ。」

「そう、わかったわ。」

「・・・・・・」

そしてすぐに教務科（マスターズ）？らしき人たちが来てジャンヌさんを連れて行った。

その後、俺たちは結局、ほとんど何もせず依頼を達成してしまった。

そのため白雪がキンジの家に泊まる期間はほとんどなかったのだが・・・・

「（ジーーーーーーーーーーーーーーー）」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「（ジーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー）」

「・・・・うぅ・・・・・・・・・・・・」

白雪にありえないくらい病んでいる目でしばらく見られ続けた・・・・・。

あのアリアでさえおびえてしばらく近づけなかったほどだ・・・。

・・・・めっちゃ怖かった。

そして一日が無事に終わり、翌日。すぐに依頼達成の情報が理子のところに入ったらしく、すぐさまメールが来た。・・・・あの喫茶店か・・・。

俺たちはとある喫茶店に呼び出された。

そして放課後・・・

「「「おかえりなさいませ、ご主人様ーー」」」

・・・・・・

みなさんお察しの通り、とある喫茶店とはメイド喫茶のこと。

「うわぁ・・・」

やべぇ・・・怖い。メイドさんにはいい思い出・・・というか怖い印象しかないためかなり腰が引けている。

実際はそんなことはないのは知っているんだが・・・・

ミス〇ルカ異国物語のメイドさんとかマジ怖いｗ

まぁそんなことは置いといて。

「で？理子はまだ？」

「来てないみたいね」

「だな」

なぜ呼んどいて先にいない・・・理子よ・・・・まぁ原作通りだから知ってたけどね！

それにしても・・・・居心地が悪い・・・・ひじょーに・・・ひっじょーーーに居心地が悪い・・・・

はぁ・・・前世ではこんなところにいっさい縁がなかったからな・・・あっちを見てもこっちを見てもメイドメイド冥土メイド冥土冥土冥土・・・・。

あれ？俺死ぬのかな？なんか途中から違う単語がちらほらと・・・

「・・・う、うちの実家と同じ挨拶だわ・・・・まさか日本で聞くことになるなんて・・・」

うん、俺も聞く日が来るなんて思わなかったよ。

『理子さまおかえりなさいませ！』『きゃーお久しぶりー！』『理子さまが新しくデザインされた制服、お客様に大好評なんですよ！』『私も気に入っちゃってもうずっとこの服着てるんです！』『私なんかこの前この格好で彼氏とホテ――「あぁーぁーあーアリア！理子がキタッポイゾー。」

やべ、なんか最後がかなり棒読みっぽくなった。

「へ？そうね。・・・いきなりどうしたの？」

「いや、何となく」

どうやらアリアは気づかなかったようだ。・・・キンジはこっち見て「（ナイス！）っていう顔してる。

とりあえず俺からも、「（セーフ）」っていうアイコンタクトしておいた。・・・意味が伝わったかは知らんが。

さて、メイドさんたちの歓声が聞こえてきたからそろそろ・・・

「ごっめぇーんチコクしちゃったぁー！急ぐぞブゥーン！」

・・・腕をぶんぶん振りまわしながらこちらへ走って来る理子。

あれ？お前確かゲームとか入った紙袋提げてたんじゃないの？しか

もそれで遅れたんじゃなかったの？・・・・まぁいいか。

理子は俺たちのいた席へ座るとすぐさま、

「んーと、理子はいつものパフェとイチゴオレ！そっちの男にはマリアージュ・フレールの春摘みダージリン、そっちのダーリンにはイチゴパフェとブラックコーヒー、そこのピンクいのにはももまん投げつけといて。」

勝手に注文をすませてしまった。・・・・ていうか俺のほうに指向けた時にダーリンて聞こえたんだが・・・

「・・・理子？ちなみにどっちがダーリンかな？」

「え？ナオヤに決まってるじゃん！ダーリン？」

「誰がダーリンか誰が」

「えぇ？あんなことまでしといて・・・・ヤリ逃げだぁ！！」

「俺が何をした！！」

「理子の部屋であんなことやこんなことまで・・・「しとらんわ！ってかお前の部屋にすら行ったことないわ！！！」えぇ～・・・そんなに否定しなくていいじゃん」

「・・・はぁ・・・とりあえず理子。俺たちは茶を飲みに来たんじゃないぞ。まずあの時約束したことは守るんだろうな」

「だいじょぶだいじょぶ！証言するから！」

今の約束とは、この前のハイジャックで俺が空気をブチ壊したあとのことだ。あのとき、いろいろと話し和解することになったが・・・・その時に約束したのだ。

一つ、かなえさんの裁判に出ること。

二つ、キンジにカナの情報を教えること。

この二つだ。・・・大げさに言った割には数が少ないがな。

逆に理子からは時期が来たら本気でアリアたちと戦うこと、俺がブラドどもから理子を守ること。

これだけだ。

ちなみにキンジの方の約束はアリアは知らない。

「・・・まさか、リュパン家の人間と同じテーブルにつくとはね。偉大なるシャーロック卿もきっと天国で嘆かれてるわ。」

いや、あいつなら多分全部知ってるだろうしまず生きてるし。

あ、頼んでたのきた。

嬉々として喰いつく理子。・・・・ていうかなんだその大きさ。はっ!!ネタだな!?ネタなんだな!?俺に突っ込めと「なんだその大きさは」・・・・・。

キンジェ・・・・・

「誰がキンジェだ」

「おまえだ」

ったく・・・俺が突っ込もうと思ったのに・・・ていうか理子。なんだその速度は。喰うのが早すぎるだろう。

もうすでに四分の一がないぞ。

「はい、あーん・・・」

「するか」

「えぇ～いいじゃぁーん」

だんっ、だんっ！

・・・アリアが拳銃をお抜きになった。あ、ちなみに今のは銃声じゃなくてテーブルを銃でたたいた音だぞ？裁判官見たく。

「そこまで。風穴開けられたくなければいい加減ミッションの詳細を教えなさい」

ここ、一応民間の施設なんだけどなぁ・・・抜きますか・・・そのガバメント。

すると理子は

「お前が命令すんじゃねぇよオルメス」

いきなり裏理子に戻ってアリアを射殺すように睨む。

アリアですら一瞬怯むような凄みを見せた後、どこからともなくノートパソコンを取り出し起動させつつ、テーブルに放り投げる。

「横浜郊外にある、『紅鳴館（こうめいかん）』――ただの洋館に見えて、これが鉄壁の要塞なんだよぉー！！」

・

・

・

くるっと表理子に戻った理子の示すディスプレイを覗き込むと・・・

地上三階・地下一回建てと思われる建造物の詳細な見取り図とそこにびっしりと仕掛けられた防犯装置について、資料にまとめられていた。

しかもそれだけではなく侵入と逃走に必要と思われる作業が想定されるケースごと、予定日時ごとに、驚くほど緻密に計画されている。

・・・さすが理子。完璧な素人目でもわかる。

確か・・・・原作だとプロでも半年はかかる作業だっけか？

「これ・・・アンタが作ったの？」

「うん」

「いつから」

「んと、先週から」

「・・・・・・・」

パフェの残りを食べながら言った理子の何気ない一言にアリアが赤(カ)紫色(メリア)の目を丸くする。

そりゃ丸まるだろうな。もともとアリアは作戦なんか立てずに現場に突っ込んで、一気に制圧するのがデフォルトだもんな。

「どこで誰に作戦立案術を学んだの」

「ジャンヌに習った」

「「「・・・・・・・・・」」」

「え?え?どしたの?」

「いやぁ・・・・そのぉ・・・・ねぇ?」

「・・・・うん」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・?」

・・・・・・・反応しづれぇ・・・・・・

「いや・・・・この前ジャンヌ捕まえたのは知ってるだろ?」

「うん」

「実はさ・・・・」

「うん」

というわけで理子に説明しました。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・理子がフリーズした。

いやね？ちょっと部屋のスペックを教えただけなんだよ。そしてジャンヌの捕まり方を教えただけなんだけどさぁ・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・理子が途中から固まって動かなくなったんだよ・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・あ、怖い。なんかすっごく怖い。俺が作ったって言ってからジーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっとこっち見てくるからめちゃくちゃ怖い。

「・・・・おーい・・・・・理子ー・・・・戻ってこーい」

あ、勇者が行った。

バキッ

「ぐぇ・・・」

ドサッ

「「・・・・・・・・・・・・・えっ？」」

お、俺ですらほとんど見えない速度で動いた理子が一瞬でキンジの首に手刀を当てて落とした・・・。

勇者は逝ってしまったようだ・・・。

ていうかほとんど動いてねぇ・・・理子。

はたから見たら突然キンジが沈んだようにしか見えないと思う。※そうです。

・・・話しかけたキンジを沈めたところを見るとどうやら何かを真剣に思考しているようだ。

アリアもそれがわかったのか話しかけようとしていない。それどころか呼吸音すら小さくしようとしている。あ、強襲科（アサルト）で習う特殊な呼吸法だ。あれを使うと少し苦しくなるが音が聞こえない。・・・そこまでするかアリア。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・」」」

周りが騒いでいる中、ここだけありえないくらい静かな空間が出来上がっている・・・。

く、苦しい。

「・・・・ナオヤ」

「な、なんだ？」

「・・・・・・・あたしの武器も改造して！」

「い、いいけど」

「やたぁー」

突然、元の雰囲気に戻った理子は喜びつつ残ったパフェをたいらげた。

・・・・えっ？

「「もう食べたの（か）！？」」

「ふぇ？」

か、からっぽだ・・・・いつの間に。

「あ、そうだぁーわっすれてたぁー！作戦作戦！」

「「あっ・・・そうだった・・・・・」」

「えっとねぇ・・・」

「理子・・・キンジは」

「アリア、ナオヤ。理子のお宝はね、ここの地下にあるハズなの」

あぁキンジ。お前はスルーされたようだ。・・・安らかに眠れ。

「でもここの扉は理子でも一人で破れない、鉄壁の金庫なんだよ。」

・・・キンジは死んだけどどうすんだ?※生きてます。

「でもね、優秀な二人組と外部からの連絡役が一人いれば何とかなりそうなんだよ。」

「それで、あたしとナオヤをセットで使いたいわけね。」

あれ?キンジはマジでスルー?・・・あぁ、死んだからか。※生きてます

「・・・で、理子。ここにブラドは住んでるの?」

「あー、住んでるけど無理。ブラドはここ何十年も帰ってきてなくて管理人とハウスキーパーしかいなし、その管理人もほとんど不在で、正体がつかめてないんだけどね。」

「なによ・・・それなら先に教えときなさいよ」

・・・あぁー・・・アリアが膨れ始めた。・・・たしかこれ危険な予兆だったっけ。とりあえず話を変えておくか。

「それで、俺らは何を盗み出せばいいんだ?」

「理子のお母様がくれた、十字架」

やっぱり・・・か。

「あんたって――――ほんと、どういう神経してるの!?」

がたんっ!

アリアが理子を睨みつけ、立ち上がった。

・・・そりゃ怒るよなぁ。だって、

「あたしのママに冤罪着せといて自分のママからのプレゼントを取り返せですって!?」

これだからなぁ・・・

「おーい。アリア落ち着け。」

「落ち着いていられるわけないでしょ!?理子はママと会いたければいつでも会える!電話すればすぐ話せる!」

・・・本当にそうか?アリアよ・・・。理子は、理子の母親は・・・

「でもあたしのママはアクリル越しに少ししか――――」

「うらやましいよ、アリアは」

「―あたしの何がうらやましいのよ！≪・・・・・・・・・・・・・・≫」

そう言ってアリアはガバメントを振り上げた。

だが理子は・・・銃を抜かない。

かわりに淋しそうに視線を落とし、足をぷら、ぷらと小さく振った。

そして――――

「アリアのママは、生きてるから」

「・・・・っ」

アリアが赤紫色（カメリア）の瞳を小さく見開いた。

「理子には――――お父様も、お母様も、もういない。理子は、お二人がお歳を召されてからやっとできた子供なの。お二人とも、理子が八つの時に亡くなってる。」

「・・・・・・」

「十字架は・・・お母様が理子の五歳の誕生日の時に下さったも

のなの。」

といった理子から、す、と視線を逸らし、拳銃も下ろして着席した。

アリア、事情も聞かずに言ってはダメだ。・・・まぁ気持ちは分かるがな。

「あれは理子の大切なもの。命の次くらいに大切なもの。でも・・・・」

理子は少し顔を伏せたかと思うと・・・・

「ブラドのやつ。アイツはそれをわかってて、あれを理子から取り上げたんだ。それをこんな警戒厳重なところに隠しやがって・・・・ちくしょう・・・。」

俺は、グッ・・・とこぶしを握り締める。

「・・・理子。」

「・・・・・・・」

「大丈夫だ。俺が、絶対に、取り戻してやる。」

「・・・・・・・・・（コクッ）・・・」

理子は目に涙を浮かべながら頷いた。

「ほ、ほら。泣くんじゃないの。」

ぽん。

そんな理子の前に、アリアは横を向きつつトランプ柄のハンカチを投げた。

さっき、理子の母親についていろいろ言ってしまった詫びだろう。・・・だがアリアよ・・・投げるなよ・・・・。

・・・・・・ムクッ・・・

「・・・・・なんだこの状況」

勇者が絶妙なタイミングで御帰還されました。

第２４話～勇者キンジ～（後書き）

・・・・キンジェ・・・・・

第２５話～ごめんね武藤～（前書き）

ゴマです。
今回はかなり短いですごめんなさい。

では２５話、どうぞ～

第２５話～ごめんね武藤～

～ナオヤ視点～

どうも～ナオヤです。

キンジが息を吹き返した後、理子は特に気にする風もなく作戦の説明に入り、アリアもスルーしていた。

・・・・どんまいキンジ。

計画はこうだ。

まず俺たちが紅鳴館の手伝いとして中に潜入（もともと手伝いを探している依頼があった）。

そして実際に内側から作戦が可能かどうか確かめ、その後、可能なら少しずつ準備を進め、できなさそうなら作戦の立て直し。

ネックレスを取り返す方法はいくつかあるらしいが、その場で最終的に作り上げるそうだ。

だが問題があった。正確には俺が問題だと思っている。

それは・・・・

「・・・・なぁ理子。」

「な、なにかなぁ？」

「・・・・なんでこの依頼の条件が執事一人とメイド二人なんだ？」

「か、管理人の趣味じゃないかなぁ・・・？」

「・・・・で、まぁそれはいい。・・・・俺、キンジ、アリアのメンバーで誰がメイドをやると？」

「・・・そ、それはぁ～・・・・その・・・やっぱりナオ「ほぅ・・・・」・・・ひぃ・・・」

「つまりそれは俺が女顔でキンジが女装するよりはばれる可能性が低いだろうしこの条件じゃないと受けられないし断られるかもしれないから事後承諾でいいじゃないかぁー・・・・と、いうことか？」

「・・・・・い、いやぁ・・・そのぉ～・・・「ということか？」はいっ！！ゴメンナサイ！！！」

「・・・・・・はぁ・・・・・どうすんだよ」

今回の依頼の条件はなぜか執事が一人でメイドが二人だったのだ！！！

まぁ・・・実際俺が女顔だってことは自覚してるからまぁ・・・・普段ならしぶしぶだが受けただろう・・・だが今回はちょっと事情がアレなのだ。

今回行く建物、紅鳴館の管理人は教務科（マスターズ）の小夜鳴先生なのだ。

俺が女装して先生の前に登場すれば、先生のなかの俺の印象が変わ

るだろう。・・・・・すんごい方向に。

女装好きの変態、ランクがおかしい変態、体の構造がおかしい変態。

・・・・・・全部変態じゃねぇか・・・・。

どうしよっかなぁ・・・・

「・・・・どうしてもだめ?」

「・・・・いや、ダメってわけじゃないが・・・・今回のはちょっとまずいんだよなぁ・・・・」

「何が?」

うーん・・・・まぁ理子になら話しても大丈夫・・・・かな?

俺は理子に耳打ちする。

「(実はさぁ・・・・紅鳴館の管理人ってあの小夜鳴なんだわ・・・・)」

「えっ!?ウソッ!?」

「まじまじ」

「なに?何の話?」

「わりぃ。これは話せん」

なんとなく

「・・・まぁいいわ。」

「・・・うーん・・・・・。」

どうするか・・・・つまるところは女装した俺が俺だとばれなければいいわけだ・・・・・。

あ、

「変装すればいいじゃん」

「「「・・・・はい？」」」

「だから、顔も声も変えちまえばいい。こうやって」

しゅばッ

「なッ！」

「うそぉ・・・・・」

「えぇっ！？」

はい、今の一瞬で変えました。・・・・・ジャンヌに。

「『これならばれんだろ。』」

「うわっ・・・・そっくり」

「どんだけだよ・・・・・」

「何それ・・・・・・・・」

声も変わってるよ!!どうやってやったかは・・・・俺もよくわからん!なんかできた。気合ってすごいね!ご都合主義って便利だね!

・・・・・なんか電波を受信した気がする。

「『次は・・・これ』」

しゅばッ

「『ようキンジ』」

「武藤そっくりだな。きもい」

「声までそっくりね。きもいわ」

「どうやってるの・・・?あときもいよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

ごめん武藤。なんかごめん

そしてきもいそうなので変えましょう。

しゅばッ

「『キンちゃん・・・』」

「し、白雪そっくり・・・。」

「・・・・なんかもうなれたわね」

「わたしも」

むっ・・・・ならばこれはどうだ！

しゅばッ

「『の○太く～ん』」

「うわッ！？リアルドラ○もんキモッ！？」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁあ！？」

「・・・・・うっ・・・・」

ド○えもんに変えてみた。

『ママぁぁぁぁ怖いよぉぉぉぁぁ』

『大丈夫よ！大丈夫・・・』

『ママぁ～あれなぁに？』

『しぃッ！見ちゃいけません！』

「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・」」」」」

リアルド○えもんは封印しました・・・。どうやらこの世界には未来的青狸はいないらしい。他のアニメなんかはあったのになぁ・・・・サ○エさんとか、ゲームだとド○クエとかテイ○ズとか。

そしてド○えもんの顔をかぶり物に変化させ、下の顔を武藤に変える。

ずぽっ

「ふぅ～・・・・」

「「えっ!?」」

「（しぃー!これで武藤に罪をなすりつける）」

「（・・・・前から思ってたけどアンタって結構鬼畜よね）」

失敬な

「（・・・・今さらだろ）」

失礼な

「（・・・・・・・・・）」

いや流れ的になんか言おうよ

「（だが断る）」

な、ナンダッテー

「さて・・・・・」

「「「「帰るか」」」」

というわけで帰りました。後日また集まって作戦会議だって。

・・・・空気ブチ壊してごめんね！！

第２６話～顔を借りるのって許可がいるの？～（前書き）

どうも、ゴマです。
最近書きたいものがたまってます・・・そして多分、もうすぐアンケート締切りです！！それでは第２６話、どうぞ～

第２６話～顔を借りるのって許可がいるの？～

～ナオヤ視点～

やぁどうも。最近なんだか疲れ気味のナオヤです。

さて、早速本題に入るとしよう。

次の日の放課後、俺たちは今度は別の店に入り浸り、理子が俺たちに作戦の詳細を説明していた。

作戦は結局、

1、俺たちが世話役として紅鳴館に潜入。（俺は女装だが）

2、館の配置をチェックし、作戦の練り直しなどが必要かなどを調べる。

3、時期を見て、俺たちのなかで最も小夜鳴先生と仲良くなった人物が先生を庭に誘い出し、その間に残りのやつがネックレスをかっさらう。

・・・・・・原作と変わんねぇ・・・・。

まぁいい。

そして着々と準備は進み、ついに潜入するための服が届いた。

つまりメイド服だ。・・・・・・・・糸色望した！

違った絶望した。

某先生の方じゃなくて。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「ま、まぁ・・・・どんまい。」

「同情するなら金をくれ!!」

「なんでだ!」

まぁこれが言いたいがためにキンジの前であからさまに落ち込んでみただけなんだがな!

「俺の同情を返せ!」

「・・・すいません、当店は返却を受け付けておりません。」

「品物じゃねぇだろ!ていうかどっちかっつうと俺が売った側だろ!」

なに!?ならば!

「金返せ!こんな不良品押しつけやがってッ!!この野郎!!」

「なんで俺がキレられてんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「・・・・・あぁ・・・・・楽しぃ・・・・少なくともキンジに出

会えてよかったことが一つはあったな」

「俺の価値は突っ込みかぁぁぁぁぁぁぁ」

「他に何がある」

「・・・・・・・・・・せめてボケのハードルを下げてくれ」

「そんなに嫌ならボケをやめてやろうか?」

「本当か!?」

「あーあ・・・最近キンジのセリフが少ないと思ってせっかくキンジに対してボケてるのになぁ」

「メタ発言はやめんか・・・。」

「いいだろう!そこまで言うなら・・・キンジの描写カットだッッッ!!!」

「やめ」

※これ以降はキンジの描写が減ります（笑

さて、

「そろそろいくか」

その後、キンジとアリアが試しに服を着た時にひと悶着あったとかなかったとか。

・・・ないわけがないな。あのフラグメイカー。

ふぅ・・・・

「そろそろ俺も準備するか」

作戦実行は明後日。

俺はいそいそと支度を始めた。

――――

・・・十秒で終わった。

だってだいぶ前から準備してたし。

俺の脳のスペックが異常過ぎてあと何をすればいいかとかすでにわかってたし。

・・・・・暇だ。寝よう。

～～～～翌日～～～～

～キンジ視点～

やった！！俺の出番ｇ

～アリア視点～

ん？なんだか今非常にキンジに同情したくなったわ・・・・・。疲れてるのかしら。

・・・まぁいいわ。

それにしても・・・

「おそい！まだナオヤと理子は来ないの！？」

「・・・・・・・」

「ってどうしたのキンジ？」

「・・・・・・・いや・・・・何でもない」

「ふーん・・・・」

ま、いっか。

「・・・はぁ・・・」

またキンジがため息をついたその時、

「ごめんねぇー。遅れちゃった」

理子がやってきた。

「おそい！どんだけ待たせてんのよ！・・・って誰？」

「いやぁーいろいろあっちゃってさぁ。この顔のこと？」

理子はなぜか誰か知らない人の顔をしていた。・・・とてもきれいだった。

「この顔ならキー君に聞けば・・・ってあれ?どったの?」

「・・・・・・・・・・」

「はぁ・・・キンジが朝からずっとこんな感じなのよ」

「ふーん・・・おーいキーくーん」

「・・・なんd・・・お、おまえッ・・・なんでッ・・・!!!」

え?え?なに?どうしたの?

「ふふふ・・・その方が面白いからです!!」

「・・・ぐっ・・・」

・・・・・

「ね、ねぇキンジ・・・。理子の顔の人って・・・・・?」

「・・・・・・・・」

「ねぇキンジ。キンジってば!」

「う、うぉ!?・・・あ、あぁ・・・悪い。」

「ちょ、ちょっと!?どこいく気よ!!」

そういうとキンジはすたすたと行ってしまった。・・・・・まだナオヤが来てないのに。

「あー・・・・たぶんすぐ帰ってくるんじゃない？」

「・・・そうね。」

・・・なんだかもやもやする。理子の変装している人の顔を見た瞬間、キンジの様子が変わった。

なんだか・・・もやもやする。

「・・・・とりあえず、ナオヤを待ちましょ」

～ナオヤ視点～

ふっふっふ・・・・

今回はちょっといたずらを考えさせてもらったＺＥ!!

実は・・・

「なぜお前がここにいる・・・・」

あ、ちょっとまってね

「ようジャンヌ。元気か？」

今目の前にいるのは皆さんおなじみあほｎ「違う」・・・・ジャンヌさんだ！

「誰がアホの子だ」

「あ、せっかく防げたのに自爆してらぁ」

「・・・・」

まぁ、どっちにしろよいこの皆はワカッテタヨネ！

ΩΩΩ＜モチロンサー

よし！

・・・っていや誰だ！？

・・・・・・・き、気にしないでおこう。

「さて、ジャンヌさん。今実はさぁ・・・・カクカクシカジカ四角いムーブでさぁ」

「・・・・残念ながら私は精神科を知らないんだ。他を当たってくれ。」

「ナ、ナンダッテー・・・って違う違う。」

「何がだ。私はカクカクシカジカで伝わるほど頭がおもしろい構造にはなってないぞ」

「えぇー・・・説明めんどくさい」

はい実はただ単にしゃべっただけです。・・・全然説明なんかしてないんだぁー

「仕方ないなぁ・・・実はさぁ。」

～～～～説明中～～～～～

「でさぁ、やっぱりワ○メちゃんのスカートはおかしいと思うんだ。」

「それには賛成だな。明らかにかぼちゃパンツが丸見えだろう」

～～～～説明終了～～～～

「と言うわけで、ジャンヌさんの顔を使って侵入する許可がほしいんだ」

「いやいやいやいやいやいや!?待て!ちょっと待て・・・!?磯野カ○オの走り方の話からなぜ私の顔の話しになった!?っていうか使用許可って何だ!?」

「な、なんだって!?今の説明で伝わらなかったのかい!?あ、ちなみに使用許可ってのはこれ」

シュバッ

「『この状態でブラドのところに潜入してもＯＫ?ってこと。』」

「なっ!?なんてめちゃくちゃな・・・・」

「『褒めるなよ』」

「照れるなよ。ていうか私の顔でそれをしないでくれッッ・・・!!」

怒られた・・・だと!?

「・・・はぁ・・・なんだか頭が痛くなってきた・・・。」

「『大丈夫?痛いんだったら首から上斬り落そうか?』」

「発想が怖いわ!!せめてそこは頭痛薬とかだろう!!」

「『持ってないし。・・・作れるけど。』」

「・・・・今のは聞かなかったことにしよう。と言うか何の話だ?」

「『あぁーそうそう。この顔でブラドんとこ行ってもいいかっていう。』」

「それだ!なんでこんなにも話が脱線しているんだ!?」

「『犯人は・・・お前だ!!』」

「なんでわたしなんだぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「『そんなことより、結局この顔で行ってもいいのか？』」

「はぁ・・・・・はぁ・・・・へ、へんなことしないなら・・・・いいぞ」

「『・・・・・・・・わかった』」

「おい！？なんだ今の間は！？私の顔で一体何をするつもりなんだ！？」

「『ま、まぁまぁ・・・あ！そ、それじゃぁそろそろ行くな！！』」

「待てッッ！！！私の顔で何をするつもりなんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

・・・ごめん。ごめんね。

ちょっとメイド服着て歩きまわるだけだから勘弁して！

ど、どうせ依頼だしきっと大丈夫さ！！・・・・・たぶん

～～～～待ち合わせ場所～～～～～

「さぁてと・・・許可も下りたことだし、ちゃっちゃといくかぁ」

※正確には下りていません

「ジャ、ジャンヌ！？アンタなんでこんなところにいんの！？」

へ？ジャンヌ？・・・・・あ、あの顔のままだった。・・・・・・・

ま、いっか。おもしろそうだし。

「神崎か。ちょっと神野に頼まれてな」

「ナオヤに？」

「どうやら今回の依頼に行けないらしい。だから私に代わりに行けとのことだ。」

「「ええ！？」」

よっし・・・騙されてる騙されてる・・・ウケケ

「と言うわけでブラドの館に侵入するのは私がやることになった」

「ちょ、ちょっと待ちなさい！？まずなんでアンタがここにいるの！？刑務所は！？」

「ふっ・・・とっくに司法取引が済んでいる」

「んなっ！？」

・・・なんかもういいや。キンジもいないし。

「・・・とまぁ冗談はここまでにして・・・」

シュバッ

「俺だ！安心しな！」

「「・・・・・このっ・・・」」

「おっと?俺にメイド服着させるように手配したのは誰だっけ?」

「くっ・・・・・・」

「わ、私は「そういやぁー・・・結構乗り気な奴もいたなぁ・・・・なぁ・・・・アリア?」・・・・・・そ、そうね・・・・・ぐっ」

くっくっく・・・・・はーっはっは!俺の勝ちだぁぁ

「・・・ま、まぁいいわ・・・で?なんでジャンヌなの?」

「本人から許可もらってきたから」※もらってません

「「・・・・・は?」」

「ジャンヌさんは本当に司法取引済んでるのらー」

「・・・うそ・・・・・」

「・・・・・バカ」

「グハァ・・・・・な、何故?」

「・・・本当に来ないのかと思ったじゃん。・・・・・裏切られたのかと・・・・」

「あぁー・・・・ちょっとおふざけが過ぎたな・・・・・悪かったよ」

「・・・・・・・」

あぁー・・・かなり不安だったんだろうね・・・さっきの理子の表情すっごくやばかったし。まぁそれもあったからすぐにやめたんだけど。

「・・・・悪かったよ。今度なんかおごるから」

「わぁーい！よし！じゃぁさっそく紅鳴館に行こうか！」

「「・・・・・・・・・・・」」

やられた・・・・まぁでも・・・・いっか

「そういえばキンジは？」

「「・・・・・・・・・・あ」」

～第三者視点～

キンジは防波堤に座り込んでいた

「・・・・空が、青いな・・・・」

第２７話～魔王様降臨～（前書き）

新しく小説を始めてしまった・・・・
だってもう我慢できなかったんだもの！！
あ、これはアンケートとは別物です。おもにこちらが優先されるのであしからず。
それでは第二十七話、どうぞ～

第27話～魔王様降臨～

～ナオヤ視点～

・・・はぁ・・・・・どうも・・・・・ナオヤです。

唐突ですが心が折れそうです。

とりあえずあの後、キンジを回収して紅鳴館に向かいました。

・・・・案の定出たよ・・・・小夜鳴先生・・・・。

やだぁ～・・・・ジャンヌさんの顔でもメイド服みられるのヤダぁ～・・・・しかもブラド戦になった時にばれそうな気がする・・・・

明らかにジャンヌの戦い方じゃないし。・・・・・いっそジャンヌっぽく戦う？・・・・いやいやいやいや・・・・勝ったらジャンヌの立場が・・・。

と、こんな感じでめんどくさいんだよ・・・・。

・・・・もう・・・いいや。なるようになるさぁ・・・・

「ど、どうしたの？なお・・・・ジャンヌ」

「疲れたんなら変わるか？なおｙ・・・ジャンヌ」

・・・はぁ・・・・・こいつら潜入に向いてねぇ・・・・・も

うほとんど俺の名前だしてんじゃん・・・・キンジなんかあと一回A打ったら俺じゃん・・・・

これも疲れの原因のひとつさぁ・・・・・・

「『大丈夫だ・・・問題ない。』」

あぁ・・・こんなタイミングでつい使ってしまった・・・。某蛇の人のセリフを・・・・・・。

だいぶ疲れがたまっちまってらぁ～・・・

あぁー・・・ちなみに今日が作戦日です・・・。なに?働いている時の描写はどこだって?何それ。

・・・あぁ・・・・そういえばさっき、キン○クリム○ンって聞こえたような・・・・え?それなら仕方ないって?・・・・まぁいいや。

俺誰と話してんだろうな・・・※独り言です

さみしいね、さっちゃん

・・・さっちゃんってだれ?

『ジャンヌ～、キンジ～、アリア～聞こえる～?』

『聞こえるぞ』

『こっちも大丈夫』

『俺のとこもだ』

『それじゃぁ作戦の説明ね』

はい、今作戦開始の五分前～です。

え？なんでまた飛んだのかって？いやいやいや・・・飛んでないですよ？え？飛んでる？・・・まさかさっきのキ○グクリ○ゾンのせい・・・か？

・・・まぁそれより・・・。

『わかった？』

『ええ。大丈夫よ』

『わかった』

すでに説明が終わっちゃってるこっちを何とかしなくては・・・・・・

え？俺の思考能力なら一秒も経ってなかったろって？・・・・・・さぁ・・・？ご都合主義のせいじゃね？

まぁ、俺のもう一つの思考が完全に聞き取れてるからいいんだけどね？

つまり要約すると、今日までの間に一番仲良くなれたアリアが小夜鳴先生を庭に呼び出す。

その間に俺とキンジでネックレスを回収するっていうことなんだけど・・・

・・・・どうしよっかなぁ・・・・多分俺がいるとキンジがＨＳＳなる前に回収出来ちゃうんだよねぇ・・・・そうなるとそのあとのブラド戦が・・・ッ！！！！！

『おい理子！！！！！今ここにいること誰かに知らせたりしたか！？』

『ど、どうしたの急に『早く！！』だ、誰にも知らせてないけど・・・・』

・・・・・やべぇ・・・・・やべぇのが来なすった。

『ねぇ？どうしたの？』

『・・・この作戦、俺は抜ける』

『『『は？』』』

『ちょ、どういうこと！？』

『落ち着け！！ナオヤ・・・・何かあったのか？』

『・・・・あんまり詳しいことは言えんが・・・・・かなりやべぇのが来なすった』

『・・・どういうこと？』

理子も裏になってかなり真剣モード。

・・・・あんまり話せんのですがねぇ・・・

『ちょっとな・・・俺の敵だ』

『・・・・・・勝てるの？』

『当り前さぁ・・・・でも、お前らじゃ束になっても絶対に勝てない』

『『『・・・・・・！！！！』』』

『そんなに・・・？』

『・・・・あぁ。だから俺だけで行く』

『・・・絶対に帰ってこいよ？』

『おうよ！！！』

俺はそれだけ言うとジャンヌの変装をはずし、やつが来た場所へ向かった。

～キンジ視点～

ナオヤはあの連絡を最後として、通信を切った。

・・・無事に帰ってくるよな・・・？

『・・・とりあえず、作戦はこのまま、ナオヤが抜けただけの形でいくよ』

『『わかった』』

俺たちもそれで通信を一度切り、作戦通りに向かった。

俺はコツコツと掘っていた穴の近くに準備。この穴は、目標のネックレスが保管されている部屋につながっている。

「・・・・・・・・・・」

作戦が始まるのを待った。

～ナオヤ視点～

さっき説明するのを忘れてたけど・・・来たのはこの世界の人間・・・ていうか生き物じゃない。

この世界にご訪問なすったのは・・・魔〇戦記ディ〇ガイアから魔王ラハールさんだぁ・・・・・。

・・・なんでぇ～・・・・なんでこのタイミングでぇ～・・・・

あ、そうだ

（おぉ～い、神様ぁ～）

『・・なんんじゃぁ～？おぉ！久しぶりじゃな！』

（ん？神様気づいてないの？）

『なにがじゃ？』

（・・・いや。異世界からちょっとしたのが来なすったんだけど）

『・・・・・・・・・なぬ！？ちょっとまっとれ・・・・・』

えぇ・・・・？マジで？気づいてないの？気づかなかったの？・・・まさか悪魔系の介入ではなく自分の力で来た・・・みたいな？

たしかに俺自身も異世界出身だしなぁ・・・いろんなアニメとかの世界があるとか言ってたし・・・あ、ていうか魔王なんだから悪魔より普通に上じゃね？

となると・・・・え？こっちでいう神様レベル？勝てんの？無理じゃね？・・・・・ていうかなんかラハールさんから殺気がパネェ・・・ってん？

・・・またなんか来たよ・・・・・・・え？エ？Ｅ？・・・・・あれ？こ、コイツ・・・マジか・・・・・・もうヤダ。

なんで大魔王プリエさんがいらっしゃったのぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！？

なんで！？あんたはラ・ピュセルのキャラでしょ！？・・・・あ、そういえばＰＳＰ版で出たディスガ〇アで出てきたような・・・・？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『・・・・・・すまん。気づかんかった。どうやら自力で介入しとるらしいの・・・・ってどうしたのじゃ？』

（神様ぁ～・・・・こっちに来た人のこと知ってる？）

『いや・・・・自力で来られた以上間接的には接触できんから知らんが・・・・（魔王ラハールと大魔王プリエ）さぁて仕事でも続けるかの！！！』

ブツッ・・・・

・・・・・・・・・・また切られた・・・・と言うかあんた最高神じゃなかったの？最高神でもあの二人は怖いの？

マジで？じゃあ俺って無理じゃね？・・・・よし逃ｇ「なんだ貴様は？」・・・オワタ。

魔王様があっちからいらっしゃった。

「ふん！どいつか知らんが・・・・ここはどこだ？あの大魔王を追ってきたらここに着いたんだが・・・・」

プリエさん・・・あなたが犯人だ！！

・・・言っても変わらんか・・・・とりあえず相手しなきゃ・・・・

「あぁ～・・・・えっと・・・・とりあえずお名前は？」

これ聞いとかないと途中でミスって名前だしそうなんだよねぇ・・・

「俺様か？俺様は魔王ラハールだ！！」

知ってます。・・・・・いや俺から聞いたんだけどさぁ・・・？

「あぁ、ラハールさんね、で、ここがどこか・・・・だっけか？」

「あぁそうだ。ついでに言うと大魔王プリエってやつを知らんか？」

知ってます！！めっちゃ強い人！！

「えぇっと・・・ここは地球です。プリエって人かどうかはわかりませんけど、ラハールさんと同じく異世界から来た人ならあそこに・・・・ってうわぁ！？」

ヒュゴォォォォォオオオオ！！

なんか来たぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！ラハールさんに説明してたら何か来た！！！何これ！？岩！？

ドゴォォォォォォォォォオオオオオオオン！！

・・・・うわぁ・・・・・でかい穴が・・・・・・とりあえず、

「来たみたいですよ？」

「・・・・そのようだな・・！！！」

・・・・・・どうしよ。

とりあえず・・・！！

「結！！！」

「「・・・・？！！！」」

「まだまだぁ！！！結結結結結結結結！！！」

めっちゃ指を振る。・・・・はい、結〇師ですね。

十枚も重ね張りしちゃったよ・・・。まぁやろうと思えば百でも二百でもいけるけど・・・。

「・・・・お前・・・・・・何をした？」

あ、呼び方がお前になってる。

「いやぁ～・・・ちょっとした結界を張っただけですよ」

これならそう簡単には・・・

ドゴッ！！バギッ！！

「「！！！」」

ベキャ！！バリィィン！！！

うっそぉん。もう一枚突破されたよ・・・。核だろうがビッグバンだろうが耐えられる代物だぜ？・・・・なんでそんな簡単に一枚破ってんのさ・・・。

ドゴッ!!!バリィィィン!!

え!?もう二枚目!?コツでもつかんだの!?

「どうすんですか?あれ相手に勝てますか?あ、できるだけ周りを巻き込まずに」

「・・・・巻き込まずには無理だな。とりあえずこの辺一帯は焦土と化すだろう」

・・・マジかよ・・・・

「・・・・・はぁ・・・・・じゃあ俺が相手してもいいですか?」

「貴様ごときが相手になるとでも?」

「まぁ・・・・アンタよりは周りに気を配れるし」

「おもしろい・・・・!!ならやってみろ!!」

「へいへい・・・・・」

しゃぁないですな・・・。

バリィィィン!!

お、どうやら話しこんでる間に全部割ったみたいですなぁ~・・・・じゃぁ

「おやすみ・・・・結!!!」

「ふん・・・・！それしか能がないのか」

いやいやまぁまぁ・・・見ててなよ・・・・・すぐ終わるから。

ドゴッドゴッ・・・バキバギィン！！

「ん？さっきとは違うのか？」

「まぁねぇ～・・・俺特性だから」

んじゃまぁ・・・

「はじめますか」

ドガァァァァァァァァァァァァァァァァァァン！！！！！！！

「ヒャッハァ～～～～」

「なっ！？何をした！？」

お～結界の中が見事に大爆発してるわｗｗ

「なにって・・・・簡単なことさ。結界で囲って」

テイ○ズのビッグ○ンでど～ん。

「・・・・・んなばかな・・・・・」

いやいや・・・俺のＬＶがあるのかは知らないけれどまぁ・・・魔力量的にももうアレな段階まで言ってるから大丈夫じゃない？ちなみに威力は通常のビッグバンの数十万倍・・・だったかな？・・・・いやさらに高かった気もしてきた。え？そんなものいつ作ったのかって？そりゃぁ日ごろの描写されてない時にｗｗ

「・・・・お？まだ意識がある？・・・・さっすが大魔王そんじゃぁ～追加ぁ～」

ビッ〇バン×１０００００回。・・・・やりすぎた？

ドドドドドドドドドドドドドドドドド午後午後五ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉおぉおぉっぉおっロオぉおおぶるぁぁぁぁおおぉおほぉｗぉっぉっロオぉぉおぉオオオォォォ１ッォォォォォォォォォオオオオオン！！！！！！！！！！！！！！

ちょｗ途中からなんかいろんな空耳がｗｗｗっていうかなんで若本ｓｗｗ

「・・・・・・・・・・・・・」

あ、なんかラハールさんからひかれた・・・・。ヤメテ！！そんなジト眼で見ないで！！

ちなみに俺らがいるところにさらに結界張ってそれに対してサイレントとかいろいろとかけてるから、音も光も漏れてないｗｗ

「・・・・・・鬼だな」

「なんて失礼な」

鬼に。

・・・・あ、おさまったっぽい。

モクモクモク・・・

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

なんかボロッボロの少女がいた・・・・。

「・・・鬼畜」

「言わないで！！」

・・・・すっごく悪いことしてるように思えてきた・・・・。

第２７話～魔王様降臨～（後書き）

・・・・・あれ？いつの間に来たんですか？ラハールさん。

・・・・テ、テガカッテニー

第２８話～オタク仲間？～

～ナオヤ視点～

どもっス、ナオヤっス。現在、罪悪感が半端ないっす。

いやぁねぇ・・・向こうから襲ってきたとはいえ、ほとんど見た目少女の大魔王様を結界鬼畜縛りでフルぼっこにしちゃったもんだからさぁ・・・。

まだ一言も声聞いてないし。しかも爆発終わって出てきたのがボロボロの女の子・・・っべぇよ・・・マジっべぇよ・・・。

「・・・これどうします？いります？」

「いらん。俺様はこいつを倒したかっただけだからな。倒された後のことなぞ知らん」

うお！？さっすが悪魔。

「よっ鬼畜！鬼！悪魔！アンタ最低だ！」

「ふはははそう褒めるな」

あ、本物の悪魔でしたね。これ褒め言葉になるんだ。

でもほんとにこの人どうしよう。

「とりあえず・・・元の世界に帰ってもらっていいですか？」

「ふむ・・・・特にこっちに用事はないからな。いいだろう」

ふぅ・・・よかｔ「ただし、貴様と戦ってからだ！」・・・・ゑ？？

「・・・あの～・・・・・・俺と戦うんでせう？」

「そうだ」

「どうしても？」

「そうだ」

・・・・・・・・・・・・・・・エ？

「いや、あの・・・俺この後用事があるんで時間ないんですけど・・・・「知らん」・・・・・・はぁぁぁぁぁぁ・・・・・・わかりましたよ・・・・」

もうしらね・・・めんどくさいからちょっと鬼畜で仕留めるか・・・

「じゃあこのコインが地面に落ちたらスタートってことで」

俺はどこからともなく取り出したコインを指ではじく。

「いいだろう」

ラハールさんが持っていた剣を構える。

ゆっくりとコインが落ちてくる。

チャリン・・・

ブゥオン！

ものすごい轟音と共に剣を振るラハールさん。だが・・・

「ハズレ。そこじゃないよ」

その一斬られた俺の周りにいる俺たちが言う《・・・・・・・・・・・・・・・・・》。

「なッ！？ならば・・・！！飛天無双斬！！」

フハハハハハハハハハハハハ無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アアアアアアアアアアアアアア！！！！！

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「

「「「「「多重影分身の術！！！」」」」」」」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

最初に始まった瞬間大量の分身を即座に作りだす。

そして作りだした１００００人もの俺が一斉に影分身。一人が１０００人に分身するタイプなので１００００×１０００で約１０００００００人いることになる。

そして・・・

『一気に行ってみよう！！！イオナズン！！！』

「ちょ、まt―――――――」

ピカッッッ！！！

ォォォォォォォォォォォォォォォオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！！！

「・・・・・・・・・やっべ・・・・・形残ってるかな？」

あまりにも威力がアレすぎて音も最初の方聞こえんかった・・・・。

・・・・・・ヒューン・・・・・・・ボテッ・・・・。

「あ、魔王見っけ」

見るも無残なくらいボロッボロになった殿下が落ちてきた・・・・。

「・・・・やべー・・・・・生きてるかな。おーい・・・・・ラハールさーん、生きてますかぁ～？」

・・・・返事がない　ただのしかｂ「グフッ・・・生きてる・・・俺様は生きているぞぉ・・・」あ、まだ息があった。とりあえず・・・

「キュアベホマキュアベホマキュアベホマ」

テイ○ズとドラ○エの回復魔法を交互に唱えてみた。っていうか過

剰回復。

「・・・・・ん?なんだ?体が軽く・・・」

「あ、大丈夫ですか?」

「なっ!?貴様!大丈夫なわけあるか!!」

「いや戦い挑んできたのそっちじゃん」

「くっ・・・・まぁいい。それよりなぜ俺の傷は回復しているのだ?」

「俺の魔法です」

「・・・・まぁいい。なぜただの人間が魔法が使えるのかなどはとりあえずいい」

いや、ここまでやっといてまだ、アンタのなかでは俺はただの人間なのか。

「なぜ助けた?」

「いや、誰も殺すとか言ってないし」

「俺は殺すつもりだったぞ?」

「知ってる。でも俺は俺」

「・・・ふっ・・まぁいい。仕方ない。今回はおとなしく退く

としよう」

「あ、この人連れて行ってね？」

「・・・・仕方ない」

おお・・・・なんとか丸くおさまった・・・・・。

「じゃぁとりあえず、俺はこの後忙しいんで」

「わかった。じゃあな。ナオヤ」

「はいはーい」

・・・・・・あれ？今俺名前で呼ばれなかった？エ？なんか変なフラグ立てた？

俺は後ろを向いて確認しようとしたが・・・もうそこにラハールさんはいなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・。

「と言うわけだ。加勢しよう」

「どういうわけだ。ってかそっちは終わったのか」

「おう。しっかり丸く収まった」

てなわけでキンジのところです。どうやら今、ネックレスを回収したみたいです。ついでにちゃっかりＨＳＳになってらぁ。

あ、理子たちにはもう連絡したよ?俺戻ったって。

「キンジ～、ネックレスは?」

「これだ」

お、なかなかにきれいな十字架じゃん。

「ほい。で?アリアたちとは今から合流だよな?」

「そうだ」

「小夜鳴先生にはばれてないか?」

「ああ。聞いた限りじゃああっちもうまくいったらしい」

「そっか」

・・・いやまぁ原作知ってるからこのあとどうなるかも大体予想がつく・・・かな?だいぶ変わったけど。

「そんじゃま、さっさと合流すっかな」

「そうだな」

そして俺たちはそろって紅鳴館を後にする。

目的地は横浜駅に程近い横浜ランドマークタワー。

みなとみらい２１の中核を成すオフィスビルだ。

理子はここにアジトを置いている。

原作知識によると、理子はどうやらホテルやマンションなどの近代的なところに陣取りたがるらしい。

そして肝心のネックレスの受け渡しのために来たんだが・・・・どうやら既に屋上で待っているらしい。あ、ついでに言うとアリアとさっき合流した。

さっさとエレベーターで行こうとする・・・・・が、

『ブー・・・・・重量オーバーです』

「「「・・・・・・・・・・・・・」」」

他にも（屋上ではないだろうが）昇ろうとしていた人たちがなぜか多く、俺が乗ろうとしたら鳴っちゃった・・・・。

「・・・・・階段で行くわ・・・・先行ってて・・・・・」

「「あ、うん・・・・・・」」

・・・・・気まずっ！心なしか他に乗っている人たちも居心地が悪そうだ・・・・。

とりあえず階段にダッシュ！！「お、お客様、中では走らないようにお願いいたします」・・・・・。

怒られた・・・・・。

とにかく、人目につきやすいところではゆっくり歩き、誰の視線も感じなくなった瞬間・・・・

「イヤッフゥウゥウゥウゥウゥウゥ!!!!」

必殺!!１００段ぬかし!!!!

いやまぁ階段を１００段ずつぬかしているだけなんだが・・・だがしかし!!言うだけなら簡単そうだが皆考えて見てくれ!!

小中学校の階段でも大体２０~３０くらいだったはず!!!!アレの約五倍の長さだと考えてくれ!!

人外バンザァァァァァイ!!!!人に見られたらおしまぁぁぁぁぁぁい!!ヒャッハァァァァァ!!

はたから見ると無重力空間だと思わせてしまうこの動き!

そんなこんなで遊びながら行くと・・・・

「なん・・・・だと・・・・!?エレベーターを追いぬかしてしまった・・・・」

はい怪しまれること間違いなしですね。

今、ちょうど屋上まで半分くらい上ったとこなんですけど・・・・・・エレベーターがまだ四分の一も昇ってないです。

・・・・ふう。仕方ない。

「屋上まで逝っちまおう」※誤字にあらず

というわけで来ました屋上。え？立ち入り禁止だろって？ふはは。
俺の未元物質に不可能はない。

・・・はいすいません鍵壊しました。でも大丈夫、直したから。ん
でもって作り替えたから・・・・・オリハルコンで。

「おーい、理子～」

「ん？あ、ナオヤぁ～。無事？」

「無事無事。モーマンタイ」

「そ。よかった・・・・で？相手は誰？」

「魔王様」

「は？」

「いやなんでもない」

やべぇ・・・・反射的に答えてしまった・・・・。

「ん～？だれだれぇ～？理子りんにお・し・え・て？」

「ダダこねてもダメ。知らない方がいい」

と思う。・・・・あんまし関係ないけど。

「えぇ～？・・・・・しょうがないなぁ・・・」

「それより・・・・・お前、約束守る気あるか？」

「・・・・・どういう意味？」

「そのまんま。まだアイツらのこと対等だと思ってないだろ？」

原作知識だけど。

「・・・・・・あぁ～あ・・・なんでそんなに理子のことわかるの？」

原作知識です・・・・とは言えない。

「勘・・・・だな」

「勘？あたしが変装してるのとかも？」

「それは気配でわかる」

「・・・・・やっぱ変なの」

「変で結構。ていうか結局守る気なし？」

「んふふ・・・・それはあとでのお楽しみ」

「ふ～ん・・・・まぁいいけど」

多分ブラドが出てきてどうにかなるし。

ガチャ。

ドアが開く音がした。

多分キンジたちだな。てかそれ以外に来ないだろ。来たら困る。

「あ、キーくぅーん」

理子がとててて、っとキンジに向かって走って行って・・・・あ、抱きついた。・・・なんかアリアが睨んでる。

「キンジ。さっさとそいつに十字架あげちゃって。なんかソイツが上機嫌だとムカつくわ」

あ、ほんとに嫉妬してる。

「おーおー、アリアんや。キーくん取られてジェラシーですね。わかります」

アリアんって誰だよ。

なんかアリアもバイオリンみたいな声上げてるし。

あいつ武偵じゃなくて大道芸人とかでも行けるんじゃね？

Sランクだからかなり動けるし。

あ、キンジが十字架取り出した。
理子はものすごい早業でそれを首のチェーンにつないだ。
「乙！乙！らん・らん・る――――！！」
「ブッ！！」
ちょ、ドナ〇ドｗｗどんだけテンションあがってんだよ。
「理子。喜ぶのはいいけど・・・ちゃんと約束守ってくれるんでしょうね」
「アリアはほんと――理子のことわかってないね～。ナオヤはちゃんとわかってくれてたのに」
そういって俺を指差す理子。
「ナオヤ・・・？――ってちょっと！？なんでアンタいんの！？」
「うっそだろ・・・・いや、ナオヤだからありえるのか・・・」
「え？え？」
どうやら理子だけ意味がわかってないらしい。
「理子。アイツ、エレベーターに乗ってないぞ」
「へ？」

「だから、アイツだけ乗れなかったんだ。それで階段で逝った「おい、字が違うだろ」それで俺たちより早くここについてんだ・・・」

「・・・・・・人外バンザァイ!!」

「うるせぇ!」

俺が言うのはいいが他のやつに言われるのはなんかヤダ。

「まぁそのことは置いといて・・・お礼はするよ。キーくん理子のリボン解いて?」

お、来たか。

キンジがアホみたいに信じて解いていく。

そして――

「んな!?」

――キンジのほっぺにキスした。

「な、なななな何やってんのよ!?アンタは!?」

「んふぅ・・・ごめんねぇーキーくぅーん。理子、悪い子なの」

やっぱり・・・か。これ絶対なんか世界の意思的な力がはたらいてるよなぁ~。いや・・・そうでもない・・・か?

「もう一度言おう――悪い子だ。約束は全部ウソだった。ってこ

とだね。だけど俺は理子を許すよ。女性の嘘は罪にならないからね」

キモッ!!やべぇ・・・きめぇ・・・まぁ二重人格みたいなもんだから本人も心では思ってんだろうね。

っていうかもう一度言おうだって。多分作戦の最中にでも言ったんだろうな。・・・・えっ?どういう状況だったの?

「とはいえ俺のご主人様は――――許してくれないんじゃないかな?」

うわぁ・・・ご主人様だってさ。多分俺が知らない間に、それに近いことされたんだろ。・・・・・まぁいいけど。

ってかアリア固まってんぞ?生でキス見たからじゃね?

あ、キンジが指鳴らして起こした。

「――――っ!ま、まぁこうなるかもって感じはしてたからね!!防弾制服着てきてよかったわ。キンジ、ナオヤ、闘(や)るわよ。合わせなさい」

――――仰せのままに・・・っと行きたいところだが・・・どうやら原作はちょっと変わったらしい。

「悪いがその前にやることがある」

「・・・?ナオヤ?どういうこと?やることって――――」

アリアがそこまで言った瞬間俺は一気に理子のいる方へ移動する。

「ちょ――」

そして理子を一抱き上げそのままアリアたちの方へ《・・・・・・・・・・・・・・・》飛ぶ。

バチバチッ

俺が引いた瞬間そこから聞こえる電気の音。

「な、なに!?」

「――――――」

「こんばんは。小夜鳴先生。課外授業でもしてくれるんですか?遺伝子の」

「ほぅ・・・さすが、Rランクというだけはありますね。かなり完璧に気配を消したつもりだったんですが」

「無駄ですよ。その程度じゃ俺からは隠せない」

「ちょ、ちょっと!?どういうこと?」

「なんで小夜鳴先生が・・・・」

そう・・・物陰から現れたのは小夜鳴先生だったのだ。

そして横から現れる銀色の狼二頭。原作知識によるとあれはブラドの僕だ。

「ふむぅ・・・・困りましたね。これでは彼を呼べません」

「彼？・・・あぁマイケル君ですか」

「いや誰ですか？そんな知り合いはいませんけど・・・・」

「え？マイケル君じゃない？じゃぁジョニー君ですか？ポール君ですか？・・・・あぁ、ベッカム君ですね」

「いえ、そんなどこぞのペンギンの話じゃないんですが・・・・」

おぉ・・・このネタについてくるとは・・・・先生・・・・

「実はオタクですか？」

「実は研究と言ってもずっとやってるわけじゃないんですよ。結構待ち時間とかできるんですよねぇ。そういう時に漫画や小説を少々・・・」

「なるほど。ちなみにゲームは？」

「最近のならテイ○ズ、ドラ○エ、ポケ○ン、ディス○イアなどなど、昔のならウ○ザードリィとか天○魔境とか」

「おっとっと」

「いしのなかにいる」

「「ガシィ」」

「「「ポカァーン・・・・・」」」

おっと・・・つい握手までしてしまった。

「テ○ルズではどの作品を？」

「フ○ンタジアからマイ○ロ３、最近ならエ○シリアですね」

「一番は？」

「決め難いですが・・・・やはりマイ○ロ３ですかね」

「ふっ・・・・・」

「「ガシィ」」

おっとまたやってしまった。

やめるつもりはないが。

「一番のお気に入りキャラは？」

「せーの・・・」

「「ユーリ・ローウェル」」

・・・・・

「「ガシィ」」

「「「ちょっとまったぁぁぁぁぁぁ！！！」」」

「「なんですか？」」

いいところだったのに・・・・

「なんでアンタらはそんなに簡単に打ち解けてんだ！？敵じゃないのか！？」

「「昨日の敵は今日の友・・・・ガシィ」」

「だからなんですぐ握手に持って行くんだ！？」

だってこの人いい人じゃん。

「キンジ・・・お前はいつから人の友人にケチ付けるようなやつになったんだ？」

「ナオヤ君・・・」

「先生・・・・・」

「「ガシィ」」

「「「だからなんでだよ！？」」」

・・・・・・・カオス

第２８話～オタク仲間？～（後書き）

・・・・・・あるぇ？
ブラド戦は？
・・・・くそっ！止まれキャラ達！！勝手に内容を作るんじゃない！！
助けて！ド○えもーん！
『ちゃらちゃちゃっちゃちゃ～地球破壊爆ｄ・・・あ、間違えた。』
だれ！？何を出そうとしたの！？俺はなんであとがきでボケてるの！？

第２９話～誰が魔王だって？～（前書き）

ついに・・・ついにブラドとの戦いです！！

第２９話～誰が魔王だって？～

～ナオヤ視点～

やばい・・・先生いい人。

「あ、そうだ。先生、さっきなんで理子にスタンガン向けたんですか？」

「いえ、ちょっと彼を呼ぶために彼女には生贄になってもらおうかと」

ふむ・・・やっぱり絶望がいると。ならば！！

「先生！ならこれを読むんだ！」

ヒュッ！

パシッ！

「ん？・・・こ、これは！！『さよなら絶○先生』ではないですか！？こ、これをどこで！？」

「え？本屋で売ってないですか？」

「最近はほとんど売り切れててないんですよ」

絶望した！最近の本屋の品揃えに絶望した！

「ふむ・・・それでは早速」

～３０分後～

「フフフ・・・くっくっく・・・・あはははは！！はー・・・・ひー・・・お？どうやら彼が来たようですよ？」

「「「あれ！？絶望は！？」」」

いや、読んでたじゃん絶望。

「いやいやいや！？だいぶ爆笑してたぞ先生」

「その爆笑のなかに絶望があったんじゃない？」

まぁ実際はあるかどうか知らんけど。

ていうかよく３０分も待てたね。

「「「ＭＨでウカム狩ってた」」」

「絶望した！武偵の緊張感のなさに絶望した！」

「「「この空気で緊張感持てとか不可能」」」

言いきられた。

「・・・・・俺のこと無視？」

「あ、どうもです。自己紹介はいいですよね？記憶は共通のはずだ

し」

「ってブラド!?アンタいつの間に!?」

「てか小夜鳴先生は?」

「ああ、小夜鳴先生がブラドだよ」

「「・・・・・・・・・・はっ!?」」

理子はもう知ってるけどね。

「・・・・・・・・・・なんで俺の秘密をガンガンばらしてるんだお前は?」

「・・・・さぁ?」

「・・・・まぁいい。それにしても・・・・なぁ?いいご身分じゃねぇかリュパン4世?」

「「!?」」

「・・・・・・・・・」

そういえば理子がアルセーヌ・リュパンのひ孫だってことは俺、アリア、キンジ以外は知らないはずだったんだよなー。

「そういえば小夜鳴がしらべてたなァ・・・・お前ら知ってるか?コイツには――」

「やめろぉーーーーー！」

理子がいきなりブラドに飛びかかった。

手にはワルサーが二丁握られている。

「黙ってろ」

ブラドは無造作に手を一振り。

理子はしゃがんで回避し、下から二発顔へ向けて発砲。

「ちょ、理子！？」

「おいッ・・・！頭は・・・・！！」

「キンジ、忘れたか？ブラドは不死身だぞ」

「あ」

弾はブラドの頭を貫通したがブラド自身は気にした風もなし。

そしてさらにブラドは腕を振る。

「！？理子！！！」

一撃が理子に当たり弾き飛ばされる。

「ぐっ・・・・あ・・・」

「ふん・・・・こいつにはなァ」

「・・・やめ・・・・・ろ・・・・・」

「リュパン家の血をひいていながら、一優秀なＤＮＡが全く遺伝してなかったんだ《・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・》」

「・・・あぁ・・・・・」

「なぁリュパン４世。お前は無能だ。だからこんな風にすぐに限界を迎える」

ブラドは理子の方にゆっくり歩いていく。

そして前まで来ると理子の首にかかっていたネックレスに手をかけた。

そして――――

ブチッ

――――俺のなかの何かがキレた。

「おい」

「アンだ？――ブゴォアッッ！！」

俺は理子のネックレスにかかっていた手を斬り落とし、ブラドを塔の中心へ向けて蹴っ飛ばした。

「大丈夫か?理子」

「ナオ・・・・ヤ?」

どうやら殴られた場所が悪かったらしくあまり呼吸ができていない。

「・・・・キュア」

俺は一言、回復の魔法を唱えてからブラドの方へ向かう。

理子は気絶してしまったらしい。

「・・・・・貴様ァ・・・・よくも俺の腕を」

「どうせ生えてくんだろ。気にすんな」

「なんだと・・!?」

簡単に怒りをあらわにしている。ちょろいな。まぁ・・・・それよりもキレている俺はどうなんだって話なんだがな。

「アリア、キンジ」

「な、なに(ガクガクガクガクガク)」

「ど、どうした?(ブルブルブルブル)」

「いやなに・・・・ちょっと理子連れてなかに入ってくれないかな?」

おっと・・・なぜか敬語になってしまった。

「「わ、わかった」」

キンジたちは理子を連れて行ってしまった。

あ、アリアが戻ってきた。

「な、ナオヤ？」

「なに？」

「そのぉ～・・・・殺さないでね？」

「・・・・原型は残しておくよ・・・・・・ケケ」

「ヒィ・・・・！？」

ひどいなぁ・・・・そんな悲鳴を上げて行かなくてもイイジャナイカ。

「あっはは・・・かわいそうに。仲間にも見捨てられてらぁ」

そんななか、今のやり取りが聞こえなかったらしく、ブラドはなんかほざいてた。

「まぁまぁまぁまぁ・・・とりあえず――」

俺はニヤァと口の端を釣り上げ・・・

「――――踊ろうや」

地獄の宴を始めた。

～キンジ視点～

ドゴォォォォォン！！

ギャァァァァァァ

ヒャッハァァァァァァ！！！

「「「「（ガクガクガクガクブルブルブルブルブル）」」」」

「あ、あんなこと言ってたとはいえ・・・・さすがにブラドがかわいそうになってきたわね」

「許せないが・・・それ以上に同情してしまうな・・・・あれは」

「ねぇ・・・・さっきから悲鳴が聞こえるんだけど・・・・・」

も、もう許し――グハァァ！？

アァァァァン！？ナンダッテェ――！？キコエナイナァァァァァァ！！！！もっと大きな声で逝ってみろぉぉ！！！！

ご、ごめんなギャァァァァァァァァ

「「「「（ガクガクガクガクガクガクガクガク）」」」」

（絶対に・・・・絶対にナオヤだけは怒らせてはいけない・・・・・）

三人ともが心のなかで誓ったのだった・・・・。

～魔王して――――「ほぅ・・・そんなに俺とO☆HA☆NA☆SIしたいのか？」ナオヤ視点！！！！～

「ヒャッハァァァァァァァ！！！」

「グギャァァァァァァ！！！」

「オラオラオラオラオラオラオどうしたどうした！！！」

「ご、ごめんなさいもうじませんだからゆるじでグボェァァァァァァ！！！」

「ハッハッハァァァァァァ！？んだってぇ！？聞きとれんなぁぁ！！！！」

絶賛フルボッコ中☆

※しばらくお待ちください

「ふぅ～・・・・すっきりしたぁ」

・・・がちゃ

お、どうやらアリアたちが戻ってきたな。

え?ブラド?そこらへんで伸びてるよ?

「う、うわぁ・・・・」

「(ガタガタガタガタガタ)」

「な、ナオヤ・・・?なんかすっごいすっきりした顔してるけど・・・?」

「大丈夫、形は残ってる」

ビシィ!!

親指を立ててキンジに向けて見た。

「そ、そうか」

微妙な顔された。

「怪我は・・・ないな」

「あったりまえ~」

「・・・お前ほんと・・・・人間から離れてくよなぁ・・・・」

「目指せ種族神野!」

「それお前以外いねぇだろ・・・」

いやぁそれほどでも・・・

「褒めてねぇよ。・・・にしても・・・どんだけ暴れたんだ?」

「いやぁ・・・ブラドって不死身じゃん?それで最近のイライラもぶつけてたらこんなに」

「八つ当たり!?」

「おもにお前らの件で忙しかったからな」

「「「ごめんなさい（ガクブルガクブル）」」」

三人にそろって土下座された。

「だ、大丈夫だって。もう発散したから」

「「「・・・ほんとに?」」」

「うん。後キンジがそれやるときもいからヤメテ」

「ヒドッ!?」

いやだって、野郎の上目づかいなんて誰得?

そしてさめざめと泣くキンジの横でブラドに黙祷を捧げる女子二人。

「さてっと・・・終わったし帰ろうぜ」

「「「自由!?」」」

「いや、他に何すんのさ」

「「「いやいやいや！！教師に連絡！警察に連絡！そして見張り！」」」

「え～・・・・めんどい」

「「「・・・・・・・・・・・・」」」

「わぁったわぁった・・・・のこりゃいいんだろ」

そんなこんなでブラド討伐！・・・あれ？なんかぐだぐだ

第２９話～誰が魔王だって？～（後書き）

やっと・・・終わったぁ・・・・

そしてここでアンケートの結果発表です！！といってもまだ終わったわけではないんですが・・・。

１位Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！
２位Ｆａｔｅとネギま
３位テイルズオブヴェスペリアと鋼殻のレギオスと魔法少女リリカルなのは

でした！！
というわけで、とりあえず上からいくつか書いてみます！
そして書いていけそうならやってみます！！！
ちなみにプロローグの時の行き先が変わっているということにします。
・・・ある意味二次創作？

アンケート外伝1Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ

～ナオヤ視点～

「・・・・・て・・・・きな・・・い」

（う・・・・ん？なんだ？）

「お・・・さい・・・・お・・・・ろーーー！！」

「う・・・・ん？・・・・・ここどこ？」

「あ、起きた。あんた唐突だけど入隊してくんない？」

「・・・・・・・」

「・・・・・？ちょっとアンタ？」

（・・・・・・・・・・ゆりっぺだァァァァァァァァァ！？）

そうだ！？俺確か神様の爺さんに送ってもらって・・・・Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓの世界に来たんだった！！！

「ちょっと聞いてるの？」

「あ、あぁ・・・悪いちょっと考え事してた」

「そ、それで？どうすんの？」

・・・・ＳＳＳに入っても悪いことはないしなぁ・・・ていうか原作ほとんど覚えてないから入らないと消えちゃうかも・・・

「入る」

「そう・・・・・って本当に！？」

「え？だめなの？」

「ふ、普通先にいくつか聞いたりするんじゃないかしら・・・」

「めんどい」
「めんどいって・・・ま、まぁいいわ（大丈夫なのかしら）。じゃあ本部に行きながらでも話すわ。とりあえずあなた、ここにいるってことは死んでるのよ」

・・・さて困った・・・俺の場合ちょっと特殊だから死んだわけじゃない・・・でもそのことを話すべきか・・・・・・・よし。めんどいから保留。

「うん」
「うんて・・・記憶はあるの？」
「あるよ？全部」
「そう・・・それじゃ続きね。ここにいるのは皆死んだ人間で、おもに学生時代をまともに過ごせなくて後悔してた人が来るわ」
「ふむふむ」
「そして、この世界では学校があって、そこでまともに生活をし、思い残すことがなく満足してしまうと消えてしまうのよ」
「ほうほう」
「だから私たちは戦線を組んで天使たちに抗い、消えないようにしているの」
「へぇ～・・・」
「ちなみに今は生きた心地がしない戦線という部隊名になっているけど・・・これはネタだし、破棄ね。初めが死んだ世界戦線。でもこれだと死んだことを認めてるんじゃね？ってことで破棄。その後は変遷を続けてるわ」
「ふぅ～ん・・」
「あ、そうだ。あなたも考えてくれない？」
「・・・・・ぐぅ～」
「寝るな」

バンッ

「イテッ・・・何すんだよ」

たらいで殴られた。ていうかどこから出したし。

「ちゃんと寝ないで聞きなさい。そしてどこから出したかは気にしちゃダメよ」

そういうもんですか

「そういうものよ」

「それで?お前らは具体的に何をしているんだ?」

これは聞いておかなければ・・・どこかでボロ出したくはないし。

「そうね・・・まじめに授業を受けたりすると消えてしまうから授業中遊んだり、天使と戦ったり」

「天使?」

誰だっけ・・・

「そう、天使。アイツよ」

そう言って指差した先にいるのは・・・あ、思い出した。天使ちゃんマジ天使の人だ。えっと・・・なんとかかなでだったはず。やべぇ全然覚えてねぇ・・・。

「アイツは私たちを消すために授業に出そうとしてくるわ」

「へぇ~」

「従っちゃだめよ。消えるわ」

「はいはい」

「・・・本当に簡単に答えるわね。わかってるの？」
「わぁってるわぁってる」

（神様ぁ～願い事プリ～ズ）

『ほいほい・・・で？決まったかの？』
（記憶にあるのを再現できる力。技とか）
『ふむ・・・・ほれ。できたぞ。ついでにデメリットなんかもＯＮＯＦＦ可能にしておいた』
（え？いいの？）
『サービスじゃサービス』
（ありがと～。でも実はまだこれしか決まってない）
『問題ない』
（ありがとよ～それじゃ）
『がんばれよ～』

ブツッ

・・・えっ？回線みたいなのでつながってんの？
ま、まぁいいや。

「さて・・・こんなところで出くわすとわね」
「・・・・・・」

「あなたたち、今は授業中よ・・・・・・そっちのあなたは・・・・・新しく来たの？」
「えぇそうよ。さっき来たみたい」
「よろしく」
「こちらこそ。・・・・それで、今は授業中よ。早く教室に戻って」
「だが断る」

「・・・・そう」
「・・・・・あれ?今のネタなんだけど」
「・・・・・・あんた出会ったばっかでよくそれができたわね・・・・」

なんか呆れられてしまったようだ。

「とりあえず・・・逃げるわよ」
「・・・・・まぁいいか」
「待ちなさい」

そしてゆりっぺダッシュ。俺も後ろについていこうと全力で足に力を込める。
そして・・・・

ダンッ!!!
ヒュゴォォォ!!!

ドゴォォォォン・・・・

「「・・・・・・・・・・えっ?」」

ものすごい勢いで数十メートル先の壁に突っ込んだ・・・・。

(身体能力チート忘れてた・・・・・)

そして俺はそのまま意識を失った・・・。

アンケート外伝1Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ（後書き）

さっそく試しに書いてみた。
このままいくつか書いてみて行けそうなら別のものとして書いてみようと思います。

アンケート2外伝ネギま

～ナオヤ視点～
「・・・・・ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああああああ！！！！！」
現在絶賛落下中ぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ～～～～～！！！！
（神様神様神様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！願い事！！記憶にある技とか再現する力プリ～ズ！！！）
死ぬ！！！これは死ぬ！！
『ほいほい・・・それ。できたぞ』
「ひぃぃぃぃぃぃ！！！重力操作！！！巻きあがれ！サイクロン！！」
あわてて俺にかかる重力をなくす。続けてサイクロンで風を起こし、なんとか落下速度を落とす。
そしてやんわりと落下する程度まで速度を落とす。
（神様ぁぁぁぁァァァァァァ！！！あぶねぇよ！！今能力なかったら死んでたよ！！！）
『すまんすまん。ミスっちった』
（ミスッちったじゃねぇよぉぉぉぉぉ！！）
『ほんとすまん。それより、願いはそれでいいかの？今なら元に戻せるが』
（いや、これでいいよ。て言うかさっき考えてこれもらおうと思っ

てたし）
『そうか。・・・・では頑張れよ』
（あぁ）

ブツッ・・・・・

・・・・電話？これ電話だったの？
まぁそんなことより・・・・

「どうすっかなぁ・・・・」

ゆっくりと落ちていく中でどうするか考える。
この世界はネギまの世界。飛ばされたはいいが・・・・

「介入の仕方がわからない・・・・というか今いつの時代？つかここどこ？」

・・・・やべぇ・・・・場所もわからん・・・・。

「とりあえず下りるか・・・」

というわけで重力も元に戻して・・・・今何時？

「・・・・・・とりあえず人・・・探すか・・・」

とりあえずで降り立った森のなかを歩き続けること二時間。
心が折れた。

「ここどこだよぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

二時間もぶっ続けで歩き続けてるのに人一人どころか気配もないし道もない。
・・・泣けてきた。マジでここどこ。

「だれかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「・・・だれ？」
「お！？ひとだぁ・・・・あ？」

ついに人の声が聞こえたと思ったら・・・そこには金髪のょぅ女が居た。
・・・・なぜこんな森の奥に幼女？・・・・てか！？あれエヴァンジェリンじゃん！！！ちょ！？なんで！？ていうか今の話し方見るとまだほんとに幼女！？となるとほんとに今っていつなのさぁぁぁぁぁ！！！？？

俺人間！！能力あるだけ！！寿命は普通！！！原作開始前に寿命で死亡だとぅ！？
・・・と、とりあえず・・・今は幼女の相手をしてよう。

「・・・・・・おねぇさんだれ？」

「グハァ・・・・・・ｏｒｚ」

心がへし折られた・・・・俺男。

「あ、あのね・・・・俺女じゃなくて男だよ・・・・・」
「え？そうなの？ごめんなさい・・・・」
「あ、いいよ気にしなくて・・・・俺いっつもそんな感じだから・・・」

さらに沈んでいると幼女はなんだかおろおろしている。・・・・・
エヴァってこどものころこんなだったの？かわぇぇ・・・・癒されるわぁ・・・

「きゃぁ！？」
「あ、ごめん。我慢できなかった。・・・・嫌？」
「・・・・（ふるふる）・・・・」

よかったぁ～・・・この子マジ癒されるからつい抱きついちゃったよ・・・幸いにも嫌がられたないからいいや。
あ、そういえば。

「君・・・名前は？」
これ聞いとかないとね。

「・・・・エヴァ・・・エヴァンジェリン」

やっぱりか・・・

「そう、いい名前だね。俺は神野ナオヤ」
「ジン・・・ノ？」
「ああ・・・えっとこっちだとナオヤ・ジンノになるのかな？」
「ナオヤ？・・・ナオヤはなんでここにいるの？」
「えっと・・・道に迷って・・・そういうエヴァは？」
「・・・・・・・」
「・・・・・話したくないならいいよ。とりあえず、どこか街への道わかる？」
「・・・・（ふるふる）・・・」

知らないらしい・・・マジか・・・

「そっか・・・仕方ない。俺はしばらく放浪して街を探すよ。君はどうする？」
「・・・・ついて行って・・いい？」
なん・・・だと！？俺はいつフラグを立てた！？
「いいけど・・・・大丈夫？」
「大丈夫」
なにがかはわからんけど・・・
ていうか俺原作ほとんど覚えてないから危ないんだけど。
・・・まぁ能力あるから大丈夫か。
「じゃあついてくる？」
「うん・・・」
と言うわけでなぜかエヴァが仲間になった。
・・・・これからどうすんの？

アンケート2外伝ネギま（後書き）

幼女時代のエヴァの所に飛ばしてみた。
・・・・・口調がわからないですがご都合主義なので勘弁してください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7723v/

緋弾のアリア～世界に見放され皆に見守られる者～

2011年12月18日11時33分発行